歷代國文學新選

文部省検定濟

卷四

375.9
Yo19
資料室

41792
教科書文庫
4
810
41-1927
200030
2005

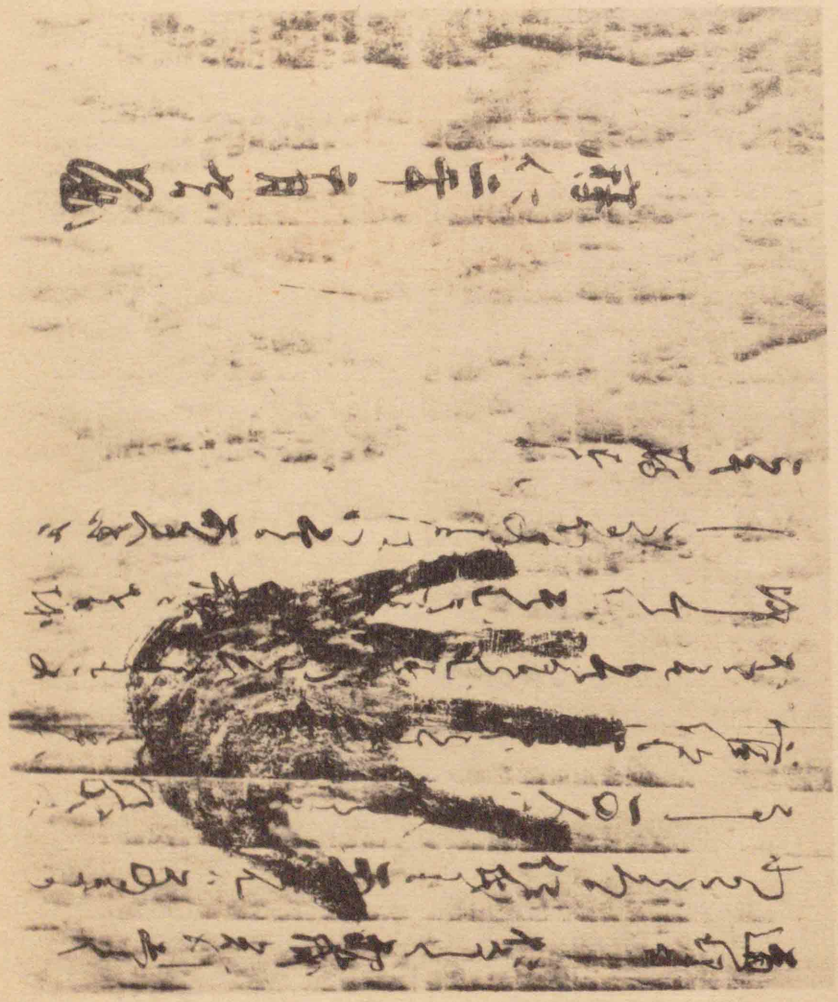
昭和二年十二月二十七日
文部省檢定濟
中學校國語科用

文學博士吉澤義則編

歷代國文學新選

星野書店藏版

資料室
375.9
Y069



後鳥羽天皇宸翰

廣島大學圖書之印

広島大学 教 19634 図書

國文學史年表

（書名の赤字は此卷に在るもの。また括弧を施せるは書名にあらず。）

時代	天皇	年號	紀元	書名	備考
上古				（祝詞）	神代より次々に出で來れるものにて製作の年代明かならず。
	（四十二代）文武	元年	一三五七	（宣命）	此年の御即位の宣命を以て最古となす。
	（四十三代）元明	和銅五年	一三七二	古事記	此年正月太安麻呂之を上る。
	同	和銅六年	一三七三	風土記	此年諸國に詔して風土記を編ましめらる。
	（四十七代）淳仁	天平寶字三年	一四一九	萬葉集	（二十一代）雄略天皇より此までの歌を集む。
中古	（六十代）醍醐	延喜五年	一五六五	古今集	此年四月紀貫之等之を上る。
	（六十六代）一條	正暦	一六五〇—一六五四	枕草子	此頃清少納言之を作る。
	同	寛弘	一六六四—一六七一	源氏物語	此頃紫式部之を作る。
	（七十二代）白河	延久五年—應德三年	一七三三—一七四六	大鏡	此頃成る。
近古	（七十七代）後白川	保元	一八一六—一八一八	（今様歌）	中古末期より近古前期に至る間最も盛なり。
	（八十二代）後鳥羽	建元元年	一八五〇	山家集	此年二月作者西行法師歿す。
	（八十三代）土御門	元久二年	一八六五	新古今集	此年三月藤原定家等之を上る。
	（八十四代）順德	建保元年	一八七三	方丈記	此年十月作者鴨長明歿す。
	同	承久元年	一八七九	金槐集	此年正月作者源實朝殺さる。
	（八十七代）四條	仁治三年	一九〇二	東關紀行	此年の八月より十月に至る紀行文なり。
	（八十九代）後深草	建長	一九〇九—一九一五	保元物語	保元・平治・平家の三物語は共にその年代不明なれども此頃までの間に成れるものなるべし。
	同	同	同	平治物語	
	同	同	同	平家物語	
	同	同	同	宇治拾遺物語	年代不明なれども鎌倉初期のものなるべし。
	同	建長四年	一九一二	十訓抄	此年十月成る。
	（九十七代）後村上	延元四年	一九九九	神皇正統記	此年北畠親房之を上る。
	同	正平五年	二〇一〇	徒然草	此年二月作者吉田兼好歿す。
	同	正平十三年	二〇一八	吉野拾遺	著作年代不明なるも延元元年より此年までの記事を載す。
	（九十八代）長慶	天授二年	二〇三六	增鏡	此年までの間に成る。
	（九十九代）後龜山	元中九年	二〇五二	太平記	正平二十三年より此年までの間に成る。
	（百代）後小松	應永	二〇五四—二〇六八	（謠曲）	此頃足利義滿觀世流祖觀阿彌を同朋となす。
	（百六代）正親町	天正元年	二二三三	（狂言）	室町時代より徳川前期に至る頃盛なり。此年足利氏亡ぶ。
近	（百八代）後水尾	寛永五年	二二八八	醒醉笑	此年成る。
	（百十一代）後西	萬治二年	二三一九	伊曾保物語	此年成る。
	（百十二代）靈元	寛文六年	二三二六	御伽婢子	此年出版。
	（百十三代）東山	元祿二年	二三四九	奥の細道	此年の三月より九月に至る紀行文なり。
	同	元祿六年	二三五三	（浮世草子）	比年浮世草子の作者井原西鶴歿す。
	同	元祿七年	二三五四	（俳句）	此年蕉風の祖松尾芭蕉歿す。
	同	元祿十四年	二三六一	藩翰譜	此年十月新井白石之を作る。
	（百十四代）中御門	寶永七年	二三七〇	樂訓	此年貝原益軒（八十一歳）之を作る。
	同	正德五年	二三七五	（淨瑠璃）	此年の十一月より十七ケ月間、國姓爺合戰を竹本座に於て興行す。
	同	正德六年	二三七六	折たく柴の記	此年五月新井白石之を作る。
	同	享保九年	二四八四	（淨瑠璃）	此年十一月淨瑠璃作者近松門左衛門歿す。

古	同	同	同	平家物語	
	同	同	同	宇治拾遺物語	年代不明なれども鎌倉初期のものなるべし。
	同	建長四年	一九一二	十訓抄	此年十月成る。
	九十七代 後村上	延元四年	一九九九	神皇正統記	此年北畠親房之を上る。
	同	正平五年	二〇一〇	徒然草	此年二月作者吉田兼好歿す。
	同	正平十三年	二〇一八	吉野拾遺	著作年代不明なるも延元元年より此年までの記事を載す。
	九十八代 長慶	天授二年	二〇三六	増鏡	此年までの間に成る。
	九十九代 後龜山	元中九年	二〇五二	太平記	正平二十三年より此年までの間に成る。
	百代 後小松	應永	二〇五四—二〇六八	(謠曲)	此頃足利義滿觀世流祖觀阿彌を同朋となす。室町時代より徳川前期に至る頃盛なり。
	百六代 正親町	天正元年	二二三三	(狂言)	此年足利氏亡ぶ。
近世	百八代 後水尾	寛永五年	二二八八	醒醉笑	此年成る。
	百十一代 後西	萬治二年	二三一九	伊曾保物語	此年成る。
	百十二代 靈元	寛文六年	二三二六	御伽婢子	此年出版。
	百十三代 東山	元祿二年	二三四九	奥の細道	此年の三月より九月に至る紀行文なり。
	同	元祿六年	二三五三	(浮世草子)	比年浮世草子の作者井原西鶴歿す。
	同	元祿七年	二三五四	(俳句)	此年蕉風の祖松尾芭蕉歿す。
	同	元祿十四年	二三六一	藩翰譜	此年十月新井白石之を作る。
	同	寶永七年	二三七〇	樂訓	此年貝原益軒(八十一歳)之を作る。
	百十四代 中御門	正德五年	二三七五	(淨瑠璃)	此年の十一月より十七ヶ月間、國姓爺合戰を竹本座に於て興行す。
	同	正德六年	二三七六	折たく柴の記	此年五月新井白石之を作る。
	同	享保九年	二三八四	(淨瑠璃)	此年十一月淨瑠璃作者近松門左衞門歿す。
	同	享保十九年	二三九四	(狂歌)	此年狂歌の祖ともいふべき油煙齋貞柳歿す。
	同	同	同	駿臺雜話	此年八月作者室鳩巣歿す。
	百十六代 桃園	寶暦八年	二四一八	雲萍雜志	此年九月作者柳澤淇園歿す。
	百十七代 後櫻町	明和二年	二四二五	(川柳)	此年初めて川柳集柳樽を出版す。
	百十八代 後桃園	安永五年	二四三六	雨月物語	此年上田秋成之を作る。
	百十九代 光格	天明元年	二四四一	常山紀談	此年四月作者湯淺常山歿す。
	同	天明二年	二四四二	西遊記	此年の秋より翌年の秋に至る紀行文なり。
	同	天明三年	二四四三	鶉衣	此年作者横井也有歿す。
	同	天明四年	二四四四	東遊記	此年の秋より翌々年の夏に至る紀行文なり。
	同	寛政元年	二四四九	梅野叢書	此年三月作者三浦梅園歿す。
	同	寛政六年	二四五四	玉勝間	此年より文化八年に亙りて刊行す。
	同	享和二年	二四六二	膝栗毛	此年より十返舍一九之を作り初む。
	同	文化三年	二四六六	藤簍冊子	此年上田秋成之を刊行す。
	同	同	同	浮世風呂	此年より七ヶ年間に亙りて式亭三馬之を作る。
	同	同	同	椿說弓張月	此年より五ヶ年間に亙りて曲亭馬琴之を作る。
	同	文化八年	二四七一	琴後集	此年作者村田春海歿す。
	百二十代 仁孝	文政五年	二四八二	(脚本)	此年並木五瓶歿す。
	同	文政十二年	二四八九	花月草紙	此年松平定信歿す。
	同	天保十年	二四九九	鳩翁道話	此年發行。
	百二十一 孝明	元治元年	二五二四	橿園文集	此年作者中島廣足歿す。

例言二則

一　本書は中學校國語科副讀本として、國文學の源泉を知了せしめその理解を徹底せしめるのを目的として編纂しました。

二　この目的に順應するため、近古より明治に至る各時代の代表的作物中から選文しこれを逆年代順に配列して難易の程度を考慮しつゝ五卷に分冊しましたが、必ずしもそれを第一學年から第五學年に割當てたといふのではありませぬ、中にも卷一はほゞ二三學年を卷二はほゞ三四學年を目標として撰びました。

昭和二年秋

修學院の新居に於て

編者識

歴代國文學新選　卷四

目次

増鏡……一―三五

一　序……二

二　後鳥羽天皇……六

三　源實朝……九

四　承久の御企……一三

五　隱岐の後鳥羽上皇……一八

六　後嵯峨天皇……二三

七　後醍醐天皇……二八

一　船上寺遷御……二八

二 還御……三二

方丈記

方丈記……三七——六三
一 發端……三八
二 安元の大火……三九
三 治承の辻風……四一
四 治承の遷都……四二
五 養和の飢饉……四五
六 壽永の疫病……四六
七 元暦の地震……四九
八 出家の動機……五一
九 日野の閑居……五四
一〇 一期の餘算……六一

徒然草

徒然草……六五——一一二
一 つれづれなるまゝに……六六
二 いでやこの世に生れては……六六
三 あだし野の露……六八
四 家居のつきづきしく有らまほしきこそ……六九
五 神無月の頃……七一
六 同じ心ならん人と……七二
七 何處にもあれ……七三
八 人は己をつゞまやかにし……七四
九 折節の移り變るこそ……七五
一〇 萬の事は月見るにこそ……七八
一一 飛鳥川の淵瀬……七九

一二　靜かに思へば……八〇
一三　人の亡き跡ばかり……八一
一四　雪の面白う降りたりし朝……八三
一五　朝夕へだてなく馴れたる人の……八三
一六　名利に使はれて……八四
一七　五月五日賀茂の競馬を……八六
一八　あやしの竹の編戸の内より……八七
一九　老來りて……八九
二〇　龜山殿の御池に……九〇
二一　仁和寺にある法師……九一
二二　是も仁和寺の法師……九二
二三　久しく隔たりて逢ひたる人の……九三
二四　世に語り傳ふる事……九五

二五　蟻の如くに集りて……九七
二六　人の心すなほならねば……九八
二七　ある人弓射る事を習ふに……九九
二八　寸陰をしむ人なし……一〇〇
二九　花は盛りに……一〇一
三〇　家に有りたき木は……一〇四
三一　身死して財のこる事は……一〇六
三二　能をつかんとする人……一〇六
三三　一道にたづさわる人……一〇七
三四　年老いたる人の……一〇九
三五　さしたる事なくて……一一〇
三六　わかき時は……一一一
三七　相模守時頼の母は……一一二

三八　萬の道の人……一一三
三九　或者子を法師になして……一一三
四〇　萬の事は賴むべからず……一一七
四一　萬のとがあらじと思はゞ……一一八
四二　人の物を問ひたるに……一一九
四三　主ある家には……一二〇
四四　八つになりし年……一二一

宇治拾遺物語……一二三―一四七
一　鬼に瘤とらるゝ事……一二四
二　鼻長き僧の事……一二九
三　袴垂保昌に逢ふ事……一三二
二四　繪佛師良秀家の燒くるを見て悅ぶ事……一三四

五　雀恩を報ゆる事……一三六
六　宗行の郎等虎を射る事……一四三

十訓抄……一四九―一五八
一　序……一五〇
二　可レ誡ニ人上多言等一事……一五二
三　可レ庶ニ幾才能藝業一事……一五五

新古今集……一五九―一六四

金槐集……一六五―一六七

謠曲……一六九―一七八

一 羽衣……一七〇

附録

國文學史概說（近世）……一—九
明治文學史概說……一〇—一五

歷代國文學新選 卷四目次 終

増鏡

増鏡二十巻は後鳥羽天皇即位の初から後醍醐天皇隱岐からの還幸まで凡そ百五十年間の事蹟を敍した假名歷史で大鏡・水鏡・今鏡と併せて世に四鏡と稱せられる。作者に就いては一條冬良・一條經嗣・二條良基等の諸說があつて一定しないが、後醍醐天皇の還幸後程なく作つたものであらう。文章は流麗典雅でかの承久の御企・元弘の御恢復・持明院大覺寺兩統迭立の起伏・西園寺家の榮華・北條氏の跋扈等には特に意を用ひて忌憚なく詳述してゐる。

嵯峨の清凉寺　山城國葛野郡上嵯峨にある寺。

一　序

如月の中の五日は鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清凉寺にまうでて、「常在靈鷲山」など心のうちに唱へて拜み奉る。傍に八十にもや餘りぬらんと見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて參れり。とばかりありて、「たけく思ひたちつれど、いと腰いたくて堪へ難し。今宵はこの局にうちやすみなん。坊へ行きてみあかしのことなどいへ」とて具したる若き女房のつき〲しき程なるをばかへしぬめり。

「釋迦牟尼佛」とたび〲申して、夕日のはなやかにさし入りたるをうち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。わが身の上の心ちこそすれ。」とてよりゐたるけしき、何となくなまめかしく、心あらんかしと見ゆれば、近くよりて、「いづくよりまうで給へるぞ。ありつる人のかへり來んほど御伽せんはいかゞ。」などいへば、「このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いと遙けき心ちし侍る。あはれになん。」といふ。「さてもいくつにかなり給ふらん。」と問へば「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程になん。百とせにもこよなく餘り侍りぬらん。來し方ゆく先ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりはつつがなくおはします。なほやんごとなき如來の御光なりかし。」などいふも、古代にみやびかなり。

年の程など聞くもめづらしき心ちして、かゝる人こそ昔物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の事の聞かまほしきままに、年のつもりたらん人もがなと思ひたまふるに、嬉しきわざかな。すこしのたまはせよ。おのづから古き歌など書きおきたるものゝ片はし見るだに、その世にあへる心ちするぞかし。」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて、「いかでかきこえん。若かりし世に見聞き侍りしこと

廣島大學圖書之印

は、こゝらの年頃に、ぬばたまの夢ばかりだになくおぼほれて何のわきまへか侍らん」とはいひながら、けしうはあらず、あへなんと思へるけしきなれば、いよ〱いひはやして、「かの雲林院の菩提講に參りあへりし翁の言の葉をこそ假名の日本紀にはすめれ。またかの世繼がうまごとかいひしつくもがみの物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有樣のやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ」などすかせば、さは心うべかめれど、いよ〱口すげみがちにて、「そのかみはげに人の齡も高く、氣も強かりければ、それにしたがひて、魂も明かにてや、しかきこえつくしけん。あさましき身は、いたづらなる年のみつもれるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていと怪しき僻事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふるごとどもはいかにぞ」といふ。「いさ、たゞおろ〱見及びしものどもは、水鏡といふにや、神武天皇の御代より、いとあらゝかにし

雲林院　もと山城國愛宕郡、舟岡の東に在つた。

翁　世繼の翁といふ、翁の言の葉は大鏡をさして云ふ。

日本紀　日本書紀、三十卷、舍人親王の撰で、神代から持統天皇に至る編年史、漢文で記述してある。大鏡は假字で書いてあるから假名書きの日本紀と稱して之を珍重するのである。

つくもがみの物語　今鏡をいふ、

るせり。その次には大鏡、文德のいにしへより後一條の帝まで侍りしにや。又世繼とか四十帖の草紙にぞ延喜より堀河の先帝までは少しこまやかなる。又、なにがしのおとゞのかき給へると聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は隆信朝臣の、後鳥羽院の御位の御程までをしるしたりとぞ見え侍りし。その後のことなん、いとおぼつかなくなりにける。覺え給へらん所々にてものたまへ。今宵たれも御伽せん。かゝる人にあひ奉れるも然るべき御契あらんものぞ」などかたらへば、「そのかみの事はいみじうたどたどしけれど、まことに事の續きをきこえざらんもおぼつかなかるべければ、たえ〲に少しなん。僻事ども多からんかし。そはさし直し給へ。いとかたはらいたきわざにも侍るべきかな。かのふるき事どもにはなぞらへ給ふまじうなん」とて、

おろかなる心や見えんます鏡

其の序に「祖父は……名は世繼と申しき。……つくも髮はまだおろし侍らねど……いかゞうきたる事は申さん云々」とある。つくもがみとは老母の白髮をいふ。

水鏡　神武天皇より仁明天皇嘉祥三年迄の假名歷史、中山内大臣忠親の作と稱せらる。

大鏡　文德天皇より後一條天皇まで十四代百七十年間の歷史作者は不明。

世繼　榮華物語のこと。四十帖ある。

今鏡　一名續世繼、

作者について は或は水鏡と同じ人であるといひ或は源内大臣通親であるといふ。
いや世繼 今傳はらない。
藤原隆信朝臣 藤原隆信、氏は法性寺と云ふ、爲隆の子、元久二年歿、年六十四。
高倉院 第八十代の帝。
七條院 藤原殖子。
治承 高倉天皇の御代。

　　ふるき姿にたちはおよばで
とわなゝかし出でたるもにくからず、いとこだいなり。
「さらば今のたまはん事をも、また書きしるして、かの昔の面影にひとしからんとこそはおぼすめれ。」といらへて、
　今もまた昔をかけばます鏡
　　ふりぬる代々のあとにかさねん

二 後鳥羽天皇

帝はじまり給ひてより、八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。修理大夫信隆のぬしの女なり。治承四年七月十五日に生れさせ給ひ、

建久 後鳥羽天皇の御宇。
あまねき云々 あまねき御うつくしびの浪八島の外まで流れ、廣き御惠の陰筑波山の麓よりしげくおはしまして云々。(古今集序)

文治元年、御年六つにて位に卽かせ給ひけり。
建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。おなじき三年三月十三日に法皇かくれさせ給ひにし後は、帝ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜かに、ふく風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの浪秋津島の外まで流れしげき御惠筑波山のかげよりも深し。よろづの道々に明けくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なんすぐれさせ給ひける。御歌かずしらず人の口にある中にも、
　　奥山のおどろのしたもふみわけて
　　　道ある世ぞと人にしらせん
と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほど著く聞えて、いといみじくやんごとなくは侍れ。
建久九年正月十一日、第一の御子(土御門院)四つになり給ふに御位ゆづり

鳥羽殿　山城國紀伊郡。
白河殿　同國愛宕郡。
水無瀨　攝津國三島郡島木村大字廣瀨。
元久　土御門天皇の御宇。

申させ給ひておりゐ給ふ。御年十九、位におはします事十三年なりき。今日明日二十ばかりの御齢にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御有樣よりはなか〳〵安らかに御幸など御心のまゝならんとにや、世をしろしめす事は今もかはらねばいとめでたし。

　鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて常に渡りすまはせ給へど、猶また水無瀨といふ所にえもいはずおもしろき院づくりして、しば〳〵通ひおはしまして、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひゞかして遊をのみぞし給ふ。所がらもはる〴〵と川に臨める眺望いとおもしろくなん。元久の頃、詩に歌を合せられしも、とりわきてこそは、

　見わたせば山もとかすむ水無瀨川
　　ゆふべは秋となに思ひけん

萱葺の廊・渡殿などはる〴〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山

定家　藤原俊成の子新古今集の撰者。
新院　土御門院。

より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深きみ山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに〳〵千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言いまだ下﨟なりける時に奉られける。

　ありへけん本の千年にふりもせで
　　わが君ちぎるみねのわか松

　君が世にせきいるゝ庭をゆく水の
　　岩こす數は千世も見えけり　（おどろのした）

三　源實朝

　源頼朝は新院の御位のはじめつかた正治元年正月、あづまにて頭お

建仁　土御門天皇の御代。

ろして、同じき十三日、年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下にもちひられて、二十年ばかりや過ぎぬらん。

北方は北條四郎時政が女(政子)なり。その腹にをのこ二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立ちつぎて、建仁元年六月廿二日從三位同日將軍の宣旨を賜はる。又の年、左衛門督になさる。かゝれども、少しおちゐぬ心ばへなどありて、やうやうつはものどもそむきそむきになりにける。時政は遠江守といひて、故大將(頼朝)のありし時より私の後見なりしを、まいて今はうまごの世なれば、いよいよ身重く、勢そふ事限なくて、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は時宗、次郎は義時といへり。次郎は心も猛くたましひまされる者にて、左衛門督(頼家)をばふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附き從ひて、思ひ構ふる事などもありけり。督は日にそへて人にもそむけられゆくに、いといみじき病をさへして、建仁三年九月十六

建保元年　順德天皇の御代。

閑院内裏　京都二條の南西洞院の西一町にあつた。

日、年二十二にて頭おろす。世の中のこり多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口をしかりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ世をば讓りけれど、うけひく者なし。入道(頼家)はかの病つくろはんとて、鎌倉より伊豆の國へいでゆあびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ所にて遂にうたれぬ。一萬もやがて失はれけり。是は實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。

さて今は偏に實朝、故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滯る事なく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月廿七日正二位せしは閑院の内裏つくれる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年、權大納言になりて左大將をかねたり。左馬のつかさをさへぞつけられける。その年やがて内大臣になりても、猶大將もとのまゝなり。父にもやゝ立ちまさりていみじかりき。この大臣は、大方心ばへうるはしく、猛くもやさしくも萬めやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き從ふさまも父にも越えたり。

いかなる時にかありけん。

山はさけ海はあせなん世なりとも　君にふた心われあらめやも

とぞよみける。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞあとを繼ぎける。故左衛門督の子にて公曉といふ大徳あり。親の討たれにし事を、いかでかやすき心あらん。いかならん時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣(實朝)また右大臣にあがりて、大饗など珍しくあづまにて行ふ。京より尊者を始め上達部・殿上人多くとぶらひいましけり。さて鎌倉に移し奉れる八幡の御社に神拜にまうづる、いといかめしき響なれば、國々の武士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。立ち騷ぎのゝしるもの見る人も多かる中に、かの大徳、うちまぎれて、女のまねをして白き薄衣ひきをり、大臣の車よりおるゝ程をさしのぞくやうにぞ見えける。あや

承久元年　順德天皇の御代。

春宮　懷成親王、即ち仲恭天皇。
新院　順德院。

またず首をうち落しぬ。その程のどよみ、いみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月廿七日なり。そこらつどひ集れるものども、たゞあきれたるより外の事なし。京にも聞しめし驚く。世の中火をけちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣く〳〵袖をしぼりてぞ上りける。(新島もり)

四　承久の御企

かやうのまぎれにて承久も三年になりぬ。四月二十日帝(順德)おりさせ給ふ。春宮四つにならせ給ふにゆづり申させたまふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき廿三日、院號のさだめありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄

中院。土御門院。
本院 後鳥羽院。

の院をば中院と申し、父帝をば本院とぞ聞えさする。この程は家實のおとゞ關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家のおとゞ(光明峯寺殿)攝政になり給ふ。かのあづまの若君(頼經)の御父なり。

さても院(後鳥羽院)のおぼし構ふる事、忍ぶとすれどやう〳〵漏れ聞えて、東ざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつがつかれを御かうじのよし仰せらるれば、御方に參るつはものどもおしよせたるに遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

あづまにもいみじうあわて騷ぐ。「さるべくて、身の失すべき時にこそあなれ。」と思ふものから、「討手の攻め來りなん時に、はかなきさまにて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふことならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかり。」と思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と、二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。

富士川 駿河國。
天龍川 遠江國。

いつの年よりも五月雨晴間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬もうち渡しがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治・勢多へ分ち遣す。世の中響きのゝしるさま言の葉も及ばずまねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界におちくだり、すべて安げなく騷ぎみちたり。いかゞあらんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬればいと心あわたゞしく色を失ひたるさまども、頼もしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂にみかたの軍破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元の例にや院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々、

ものにもがなや　とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思へば。(源氏物語、帚木卷の引歌)

信實朝臣　藤原氏、似繪の名手。

四十五日云々　秦の子嬰のことをさす。

所々におぼしまどふ事さらなり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありきあさましうあはれなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらん。まだいとほしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して、御姿うつし書かせらる。七條院(後鳥羽院の御母)へ奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御船に奉りて遙かなる浪路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじういかなりける世々の報にかとうらめし。

新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや、七月九日、帝(仲恭)をもおろし奉りき。この卯月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これやはじめならん。唐土にぞ四十五日とかや位におはする例ありけるとぞ、からのふみ讀みし人のい

はた　幡多郡。

若宮　後嵯峨天皇。

宰相中將　通親―通宗―女―後嵯峨天皇
通親―通方
通親―承明門院

ひしこゝちする。それもかやうの亂やありけん。さて上達部殿上人、それより下はた殘るなく、この事にふれにしたぐひは、重く輕く罪にあたるさまいみじげなり。

中院ははじめよりしろしめさぬ事なれば、あづまにも咎め申さねど、父の院遙かにうつらせ給ひぬるに、長閑にて都にてあらん事、いとおそれありと思されて、御心もてその年閏十月十日、土佐の國のはたといふ所に渡らせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、若宮いできたまへり。承明門院の御せうとに通宗の宰相中將とて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下﨟一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒れ、ふゞきして、來し方行くさきも見えず、いと堪へがたきに御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ
ことわりしらぬ我が涙かな

せめて近きほどにと、あづまより奏したりければ、後には阿波の國にうつらせ給ひにき。(新島もり)

五　隱岐の後鳥羽上皇

本院六つにて位に卽き給ひて十三年おはしましき。おり給ひて後も土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして、萬機のまつり事を御心一つに治め、百のつかさをしたがへ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて、遠きを撫で給ふ御めぐみ雨

津の國の云々　津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葺(後拾遺集、和泉式部)

の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政事をきこしめすにも、難波の葦の亂れざらむ事をおぼしき。藐姑射の山の峰の松もやう〳〵枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、いく春を經ても、空ゆく月日のかぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、已がちり〳〵にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからことゝふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽燒く煙のなびく方をも、我がふる里のしるべかとばかり、ながめ過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、明日しらぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいていつをはてとか、めぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の浪・煙の波の幾重ともしらぬ境に世をつくし給ふべき御さまども、口をしといふもおろかなり。このおはします所は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて山陰にかたそへて、大きやかなる巖のた

柴のいほり云々　いづくにもすまれずばたゞすまであらん柴の庵のしばしなる世に。（新古今集、西行法師）

二千里外云々　三五夜中新月色、二千里外故人心。（白氏文集）

年もかへりぬ　承久四年。

てるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に、「柴のいほりのたゞしばし」とかりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしくゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼしいづるも夢のやうになん。はる〲と見やらるゝ海の眺望二千里の外ものこりなき心ちする、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹きくるを聞しめして、

　我こそはにひ島もりよおきの海の
　　あらき浪かぜこゝろして吹け

　同じ世にまたすみのえの月や見ん
　　今日こそよそにおきの島もり

年もかへりぬ。所々浦々、あはれなる事をのみおぼしなげく。佐渡院あけくれ御行をのみし給ひつゝ、猶さりともとおぼさる。隱岐には、浦よりをちのはる〲と霞みわたれる空をながめ入りて、過ぎにし方

かきつくしおもほしいづるに、行くへなき御涙のみぞとゞまらぬ。

　うらやまし長き日影の春にあひて
　　汐くむあまもそでやほすらん

夏になりて、萱葺の軒端に五月雨のしづくいと所せきも、御覽じなれぬ御心ちに、さまかはりて珍しくおぼさる。

　あやめふくかやが軒端に風すぎて
　　しどろにおつるむらさめの露

初秋風のたちて、世の中いとゞものがなしく露けさまさるに、いはん方なくおぼしみだる。

　故郷をわかれ路におふる葛の葉の
　　秋はくれどもかへる世もなし

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、沖の方にいとちひさき木の葉の浮べると見えて漕ぎ來るを、あまの釣舟かと御覽ずるほどに、

都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御ふすまなど、都の夜さむに思ひやり聞えさせ給ひて、七條院(後鳥羽院の母)よりまゐれる御文、ひきあけさせ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心ちすれば、やゝためらひて見給ふに、「あさましくも、かくて月日經にける事。今日あすとも知らぬ命のうちに、今一たびいかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでなん。」など、いと多くみだれかき給へるを御顔におしあてて、

たらちねの消えやらで待つ露の身を
　風よりさきにいかでとはまし

八百萬かみもあはれめたらちねの
　われ待ちえんとたえぬ玉の緒

初雁のつばさにつけつゝ、こゝかしこより哀なる御消息のみ常は奉るを御覧ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり。

(新島もり)

瞿曇彌　釋迦を母の死後母に代つて養育した伯母の名。

六　後嵯峨天皇

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院(土御門)の宮(後嵯峨)はおとなび給ふまゝに、御心ばへも、いときやうさくに、御かたちもいとうるはしく、けだかく、やんごとなき御有樣なれば、なべて世の人もいとあたらしき事に思ひ聞えけり。大納言(通方)さへ暦仁の頃うせにしかば、いよ〳〵眞心に仕うまつる人もなく心ぼそげにて、何をまつとしもなくかゝづらひておはしますも、人わろくあぢきなう思さるべし。御母(通子)は、土御門の内大臣通親の御子に、宰相の中將通宗とて若くてうせにし人の御むすめなり。それ(通子)さへかくれ給ひにしかば、宰相のはらからの姫君ぞ御乳母のやうにて、瞿曇彌の釋迦佛養ひ奉りけむ心ちしておはしける。二にて父御門(土御門)には別れ奉り給ひしかば、御面かげだにおぼえ給はねど、猶この世の中におはすと思されしまでは、おのづからあひ奉

城興寺の宮　以仁王の御子で天台座主になられた方。

石清水　山城國綴喜郡にある八幡宮。

椿葉のかげ云々　帝位に上り給ふ事の御告「德是北辰、椿葉之影再改。尊猶南面、松花之色十廻。」(新撰朗詠集、後江相公)

るやうもやなど、人しれず幼き御心にかゝりて思しわたりけるに、十二の御年かとよ、かくれさせ給ひぬと傳へ聞き給ひし後は、いよ〳〵世のうさを思しくんじつゝ、いとまめだちてのみおはしますを承明門院(土御門御母在子)は心苦しうかなしと見奉りたまふ。

はかなくあけくれて、仁治二年にもなりにけり。宮(後嵯峨)は二十にあまり給ひぬれど、御冠(かうぶり)のさたもなし。城興寺の宮僧正眞性と聞ゆる、御弟子にとかたらひ申し給ひければ、さやうにもとおぼして、女院(承明門院)にもほのめかし申させ給ひけるを、いとあるまじき事とのみ諫め聞えさせ給ふ。その冬の頃、宮(後嵯峨)いたう忍びて石清水の社に詣でさせ給ひ、御念誦のどかにし給ひて、すこしまどろませ給へるに、神殿の内に「椿葉(ちんえふ)のかげ二たび改まる。」と、いとあざやかにけだかき聲にて、うち誦じ給ふと聞きて、御覽じあげたれば明方の空澄み渡れるに星の光もけざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる御夢ならむと、あやしくおぼさるれど、人にものたまはず。とまれかくまれと、いよ〳〵御學問をぞせさせ給ふ。

年もかへりぬ。春の初めはおしなべて、ほど〳〵につけたる家々のいはひなど、心ゆきほこらしげなるに、正月の五日より、内の上(四條)例ならぬ御事にて、七日の節會には御帳にもつかせ給はねば、いとさう〴〵しく人々おぼしあへるに、九日の曉、かくれさせ給ひぬとてのゝしりあへる、いとあさましともいふばかりなし。皆人あきれまどひて、なか〳〵涙だにいでこず。大殿(道家)の御心のうち思ひやるべし。御兄(せうと)(左大臣忠家)の若君も殿上したまへる只御門(四條)のおなじ御ほどにて、さわがしきまでの御遊びのみにて明し暮させ給ひけるに、かいひそみて群りゐつゝ、鼻うちかみ、うち泣く人より外はなし。かくのみあさましき御事どものうち續きぬるは、いかにもかの遠き浦々にて沈み果てさせ給ひにし御なげきどものつもりにやとぞ、世の人もさゝめきける。いまだ御つぎ

若宮の社　鶴岡八幡宮。

もおはしまさず、又御はらからの宮なども渡らせ給はねば、世の中いかになりゆかむずるにかと、たどりあへるさまなり。

さてしもやはにて、あづまへぞ告げやりける。将軍(頼經)は大殿(道家)の御子、今は大納言と聞ゆ。御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房朝臣と一所にて、小弓射させ、酒もりなどして、心とけたるほどなりけるに、京よりのはしり馬といへば、何事ならむと驚きながら、使召しよせて聞くに、いとあさまし。さりとてあるべきならねば、その席より、やがて神事はじめて、若宮の社にて鬮をぞとりける。

その程都には、いとうかびたる事ども、心のひき〴〵いひしろふ。佐渡院(順徳)の宮たちにやなど聞えければ、修明門院(順徳御母重子)にも御心ときめきして、内々その御用意などしたまふ。承明門院(在子)も、もしやなど、さま〴〵の御いのりしたまふ。あづまの使都に入るよし聞ゆる日は、兩女院より白河に人をたてて、いづかたへか參ると見せられけるぞことわ

城介義景　秋田城介藤原義景のこと。秋田城介は出羽國秋田城を守るもので、出羽介が之を兼ねる。蝦夷防禦のために置かれた。

かの院　承明門院。

りに、げに今見ゆべき事なれども、物の心もとなきは、さおぼゆるわざぞかしと例の口すげみてほゝゑむ。

日ぐらし待たれて、城介義景といふもの、三條河原にうちいでて、「承明門院のおはしますなる院はいづくぞ。」とかの院より立てられたる青侍のいとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心ちうづゝともおぼえず。しか〴〵と申すまゝに、土御門殿へ參りたれど、門は葎つよくかため、扉もさびつき、柱根くちてあかざりけるを、郎等どもにとかくせさせて、内に參りて見まはせば、庭には草深く青き苔のみむして、松風より外はこたふるものなく、人の通へるあともなし。故通宗宰相中將の御弟を子にし給へりし定通のおとゞばかりぞ、何となくおのづからの事もやと思ひて、なえばめる烏帽子直衣にて候ひけるが、中門にいでて對面したまふ。義景はきり戸のわきにかしこまりてぞ侍りける。「阿波の院(土御門)の御子(後嵯峨)御位に。」と申して出でぬ。院の中の人々、上下夢のこゝち

四辻殿　修明門院の御所。

閑院殿　四條天皇の御所。

かの島　隱岐をさす。

して物にぞあたりまどひける。仁治三年正月十九日の事なり。世の人の心ち、皆驚きあわてて、おしかへしこなた(土御門殿)に参り集ふ馬・車の響きさわぐ世のおとなひを、四辻殿にはあさましうなか〳〵物思しまさるべし。又の日やがて御元服せさせ給ふ。ひきいれには左大臣(良實)参り給ふ。理髪は頭辨定嗣仕うまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小路殿へ移らせ給ひて、閑院殿より劍璽など渡さる。踐祚の儀式いとめづらし。(三神山)

七　後醍醐天皇

一、船上寺に遷御

かの島には春來てもなほ浦風さえて浪荒く、渚の氷もとけがたき世

さめざらましを　思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを。(古今集、小野小町)

源氏の大將　源氏物語明石の巻にある。

かの新發意　明石入道。

のけしきに、いとゞ思しむすぼるゝ事盡きせず。かすかに心細き御すまひに年さへ隔りぬるよと、あさましく思さる。候ふ人々もしばしこそあれ、いみじくくんじにたり。今年は閏二月あり。後の如月の初つ方より、とりわきて密教の秘法を試みさせ給へば夜も大殿ごもらぬ日數經て、さすがにいたう困じ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方、夢うつゝともわかぬ程に、後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて、聞えしらせ給ふこと多かりけり。打驚きて夢なりけりとおぼす程、いはむ方なく名殘悲し。御涙もせきあへず、さめざらましをと思すもかひなし。源氏の大將須磨の浦にて父御門見奉りけん夢の心地し給ふも、いと哀にたのもしう、いよ〳〵御心強さまさりてかの新發意が御迎のやうなる釣舟もたより出できなんやと、待たるゝ心地し給ふに、大塔の宮よりもあま人のたよりにつけて聞え給ふこと絶えず。都にもなほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思

關守の云々　人しれぬわが通路の關守はよひ〳〵毎にうちもねななむ。(伊勢物語)

稲津浦　伯耆國八橋郡。

しなぐさめて關守の打寢るひまをのみうかゞひ給ふに、しかるべき時の到れるにや、御垣守に候ふつはものどもも、御氣色をほの心得て靡き仕うまつらんと思ふ心つきにければ、さるべきかぎり語らひ合せて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりてかくろへゐて奉る。いとあやしげなる海士の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれに押出す。折しも霧いみじうふりて行く先も見えず、いかさまならんとあやふけれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申の時に出雲國に著かせたまひぬ。こゝにてぞ人々心ちしづめける。

おなじ二十五日、伯耆國稲津浦といふ所へ遷らせ給へり。この國に名和の又太郎長年といひて、あやしき民なれどいと猛に富めるが、類ひろく心もさか〳〵しくむね〳〵しきものあり。かれがもとへ宣旨を遣し給ひたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百餘騎の勢

船上寺　伯耆國八橋郡の船上山か、西伯郡の大山か詳かでない。一書には船上山大山寺とある。

前の守　佐々木清高。

にて御迎にまゐれり。又の日賀茂の社といふ所に立入らせ給ふ。都の御社思し出でられていとたのもし。それより船上寺といふ所へおはしまさせて、九重の宮になずらふ。これよりぞ國々のつはものどもに御敵をほろぼすべき由の宣旨つかはしける。比叡の山へものぼらせられけり。

かくて隱岐には、出でさせ給ひにし晝つ方より騒ぎ合ひて隱岐の前の守追ひて参るよし聞ゆれば、いとむくつけく思されつれど、此處にもその心していみじう戰ひければ引返しにけり。京にも東にも驚き騒ぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみに、そこらの武士ども彼處に集ひをるに、かゝる事さへ添ひにたれば、いよ〳〵東よりも上り集ふめり。(月草の花)

二、還御

東寺　京都下京區九條町。

さて都には伯耆よりの還御とて世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせたまひて、事ども定めらる。二條の前の大臣(道平)めしありて參りたまへり。こたみ内裏へ入らせたまふべき儀、たゞ遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ二條の大臣氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよしうけたまはる。天の下たゞこの御はからひなるべしとて、このひとつあたり喜び合へり。

六月六日東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし。去年の春いみじかりしはやと思し出づるも、たとしへなし。今も御供の武士ども、ありしよりはなほ幾重ともなく打圍み奉れるはいとむくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず、たのもしくてめでたき御守かなと覺ゆるも、うちつけ目なるべし。世のならひ時につけて移る心なれば、皆さぞあるらし。先陣は二條富小路の内裏に著かせ給ひぬれど、後陣の兵はなほ東寺の門まで續

禮成門院　禧子。

きひかへたりきとぞ聞えしはまことにやありけん。正成もつかうまつれり。

かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衞府のものどもに打ちまじりたり。めづらしくさまかはりてゆすりみちたる世の氣色かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りたりけるにかと、めでたきにつけても猶前の世のみぞゆかしき。車など立續きたるさまありし御くだりにはこよなくまされり。物見ける人の中に、

昔だにしづむうらみをおきの海に
　波たちかへる今ぞかしこき。

むかしの事など思ひ合するにやありけん、金剛山なりし東の武士ども、さながら頭を垂れて參りきほふさま、漢のはじめもかくやと見えたり。

禮成門院も又中宮と聞えさす。六日の夜やがて内裏へ入らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の

父の大納言宣房。

御修法はじめらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々のこりなく參りつどふ。十三日大塔の法親王都に入り給ふ。この月頃に御ぐしおほして、えも言はずきよらかなる男になり給へり。からの赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にてわたり給へば、御供にゆゝしげなるものゝふども打圍みて、御門の御供なりしにもほと〳〵劣るまじかめり。速かに將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人々程なくきほひのぼるさま、枯れにし草木の春にあへる心ちす。その中に季房の宰相入道のみぞ、預なりけるものゝ情なき心ばへやありけん、東のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言、母の尼上など歎つきせず、胸あかぬ心地してけり。

四條中納言隆資といふも頭おろしたりし、また髮おほしぬ。「もとより塵を出づるにはあらず、かたきの爲に身を隱さむとて、かりそめに剃りしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて男になれらん、何のはゞかりかあらん。」とぞ同じ心なるどち言ひ合せける。天台座主にていませし法親王だにかくおはしませば、まいてとぞ。誰にかありけん、その頃聞きし、

墨染の色をもかへつ月草の
うつればかはる花のころもに。（月草の花）

方丈記

方丈記一巻は鴨長明の隨筆で、作者が安元の大火・治承の旋風、さては養和の飢饉・元暦の地震等、種々な天災地變を體驗して厭世の念を深め、遂に日野山の奥に草庵を結んで一生を終へるまでの事を記したものである　長明は賀茂社禰宜長繼の子で、和歌管絃を善くし、後鳥羽上皇に仕へて北面となり、又和歌所寄人ともなつたが、後故あつて剃髪して蓮胤と號し、大原山に入つた。時に年五十。建暦元年（一八七一）には鎌倉に遊んで將軍源實朝に謁し、やがて歸京して日野山に居り、建保元年（一八七三）十月歿した。但しその歿年には異說がある。

一　發端

行く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。玉しきの都の中に棟を並べ甍を爭へる、尊き卑しき人のすまひは、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかとたづぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年やけて今年は造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。ところもかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかに一人二人なり。あしたに死に、ゆふべに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、うまれ死ぬる人、いづ方より來りて、いづ方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲に心を惱し、何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじとすみかと無常を爭ふさま、いはゞ朝顏の露に異らず。あるは露落ちて花殘れり。殘れりといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず。消えずといへどもゆふべを待つことなし。

安元三年　高倉天皇の御代。
朱雀門　皇居の南門。
大極殿　正殿で即位・朝賀等の大禮を行はせらるる所。
大學寮　二條朱雀大路の東、神泉苑

二　安元の大火

おのれ、物の心を知れりしより以來、四十あまりの春秋を送れるあひだに、世の不思議を見ること、たび〳〵になりぬ。いぬる安元三年四月二十八日かとよ。風はげしく吹きて、しづかならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來りて、いぬゐに至る。はてには朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや。病人をやどせるかり屋より出でたりとなむ。吹きまよふ風に、とかく移りゆくほどに、扇をひろげたる如く末廣になりぬ。遠

の西にあつた。
民部省　太政官の南、美福大路の西にあつた。
樋口富小路　樋口は五條の下の小路。富小路は壬生の東にも西にもあつたが、こゝは東の方であらう。
七珍　金・銀・瑠璃・玻璃・珊瑚・硨磲・瑪瑙。

き家は煙にむせび、近きあたりはひたすら炎を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる炎、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人うつゝごゝろあらむや。あるひは煙に咽びて倒れ伏し、あるひは炎にまぐれて忽に死につ。あるひは又わづかに身一つ、からくして逃れたれども資財を取り出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數知らず。すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず。人のいとなみみな愚なるなかに、さしも危き京中の家を造るとて、寶を費やし、心を惱すことはすぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

治承四年　高倉天皇の御代。

三　治承の辻風

また治承四年卯月二十九日の頃中御門京極の程より、大なる辻風おこりて、六條わたりまでいかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまはるまゝに、その中に籠れる家ども、大なるもちひさきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり。けた柱ばかり殘れるもあり。また門のうへを吹き放ちて四五町が外におき、また垣を吹きはらひて隣と一つになせり。いはむや、家のうちのたから、かずを盡して空にあがり、檜皮ふき板の類、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹きたれば、すべて目も見えず。おびたゞしくなりとよむ音に、ものいふ聲もきこえず。地獄の業風なりとも、かばかりにはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、これを取りつくろふ間に身をそこなひてかたはづけるもの數を知らず。この風ひつじさる

同じ年の水無月
治承四年六月二日。

嵯峨天皇の御年云々
平安奠都は桓武天皇の延暦十三年であるから、これは疑はしい。或は宮城の落成をさすのかも

の方にうつり行きて、多くの人の歎きをなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やはある、たゞごとにあらず、さるべきもの ゝさとしかなどぞうたがひ侍りし。

四　治承の遷都

またおなじ年の水無月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思ひの外なりしことなり。大かたこの京の始を聞けば嵯峨天皇の御時、都とさだまりにけるより後、既に數百歳を經たり。ことなる故なくてたやすく改まるべくもあらねば、これを世の人、たやすからず愁へあへるさまことわりにも過ぎたり。されどとかくいふかひなくて、御門より始めたてまつりて大臣公卿、悉く攝津の國難波の京に移り給ひぬ。世につかふ

知れない。

難波の京
福原の都をさす。

今の京
福原をさす。

かの木の丸殿
齊明天皇が三韓の背いた時筑紫に幸せられ、筑前の朝倉山に行宮を御建てになつた。それが丸木のまゝの假宮であつたか

る程の人、たれかひとり故郷に殘り居らむ。官位におもひをかけ、主君の蔭をたのむ程の人は、一日なりともとく移らむとはげみあへり。時を失ひ世にあまされて、期する所なきものは、うれへながらとまり居たり。軒をあらそひし人のすまひ、日を經つゝ荒れ行き、家はこぼたれて淀川にうかび、地は目のまへに畠となる。人の心皆あらたまりて、たゞ馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

その時おのづから事のたよりありて、攝津の國今の京に到れり。所のありさまを見るに、その地程せばくて、條里を割るに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常にかまびすしくて、壚風ことにはげし。内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、優なるかたも侍りき。日々毀ちて川もせきあへずはこびくだす家は、いづくに造れるにかあらむ。猶空しき地は多く、造

ら、から云ひ傳へてゐる。

同年の冬　治承四年十二月、安德天皇福原から京都に還御あつたことをいふ。

茅をふきて云々　堯堂高三尺。土階三等、茅茨不レ剪、采椽不レ刊。(墨子)

煙のともしき云々　仁德天皇の御事をさす。

れる家は少し。ふる鄕は既にあれて、新都はいまだ成らず。ありとしある人、みな浮雲のおもひをなせり。もとよりこの所に居たる者は地を失ひて愁へ、今うつり住む人は土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車に乘るべきは馬にのり、衣冠布衣なるべきはおほく直垂を着たり。都のてぶり忽に改まりて、たゞひなびたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて、人の心もをさまらず。民の愁、つひに空しからざりければ、同年の冬、なほこの京にかへり給ひにき。されどこぼちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにしも造らず。ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐みをもて國を治め給ふ。すなはち御殿に茅をふきて、軒をだにもとゝのへず。煙のともしきを見給ふときは、かぎりあるみつぎ物をさへゆるされき。これ民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさまむかしになずらへて知りぬべし。

養和の頃かとよ　養和元年は安德天皇の御代。

五　養和の飢饉

又養和の頃かとよ、久しくなりてたしかにも覺えず。二年が間飢渇して淺ましきこと侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬、大風・大水など、よからぬ事ども打ちつゞきて、五穀こと〴〵くみのらず。空しく春耕し夏植うるいとなみのみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて國々の民、あるは地を捨てて境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さま〴〵の御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、さらにそのしるしなし。京のならひ、なにわざにつけても、みなもとは田舍をこそたのめるに、絶えてのぼる物なければ、さのみやは、みさを

明くる年　壽永元年。安德天皇の御代。

少水の魚　是日已過命則衰滅、如少水之魚、斯有何樂云々。（往生要集）

も作りあへむ。念じわびつゝさま〴〵の寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たま〴〵換ふるものは金を輕くし、粟を重くす。乞食道のべに多く、愁へ悲しぶ聲耳に滿てり。

六　壽永の疫病

前の年、かくのごとく、からくして暮れぬ。明くる年は、たちなほるべきかと思ふに、あまさへ、えやみ打ちそひてまさるやうに跡かたなし。世の人、みな飢ゑ死にければ、日を經つゝきはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠うち著、足ひきつゝみ、よろしき姿したる者、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくわびしれたる者ども、ありくかと見れば、すなはちたふれ死ぬ。ついひぢのつら、路頭に飢ゑ死ぬる類はかずも知らず。とり捨つるわざもなければ、くさき香、世界にみちみちて、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬ事多かり。いはむや、川原などには馬車の行きちがふ道だにも無し。あやしきしづ山がつも、力竭きて薪にさへともしくなりゆけば、たのむ方なき人は、みづから家をこぼちて、市に出でてこれを賣るに、一人が持ち出でたるあたひ、猶一日が命をさゝふるにだに及ばずとぞ。あやしき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白がね・こがねの箔など、所々につきて見ゆる木の割れ、あひまじれり。これを尋ぬればすべき方なき者の、古寺にいたりて佛をぬすみ、堂の物の具を破り取りて、割り碎けるなりけり。濁惡の世にしも生れあひてかゝる心うきわざをなん見侍りし。

又いとあはれなる事も侍りき。さりがたき妻夫など持ちたる者は、その思ひまさりて、志深きは必ず先だちて死しぬ。その故は、我が身をば次になして、夫にもあれ、妻にもあれ、いたはしく思ふかたにたま〴〵

乞ひ得たる物を、先づゆづるによりてなり。されば父子ある者は定まれるならひにて、親ぞ先だちて死にける。又母が命盡きてふせるを知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつゝふせるなどもありけり。

仁和寺に隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數知らず死ぬることを悲みて、ひじりをあまたかたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿の字を書きて、緣を結ばしむる業をなむせられける。その人數を知らむとて、四五兩月がほどかぞへたりければ、京の中、一條よりは南、九條よりは北、京極よりは西、朱雀よりは東、道のほとりにある頭、すべて、四萬二千三百餘なんありける。いはんや、その前後に死ぬるもの多く、川原・白川・西の京、もろ〱の邊地などを加へていはゞ際限（かぎり）もあるべからず。いかにいはんや、諸國七道をや。近くは、崇德院の御位の時、長承の頃かとよ、かゝるためしはありけりと聞けど、その世のありさまは知らず。まの

仁和寺　山城國葛野郡。
隆曉法師　源俊隆の子。
川原　加茂川の川原。
西の京　昔は京都を左京・右京に分けたが、その右京の方を西の京といふ。
諸國七道　畿內の諸國及び東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道をいふ。
長承の頃云々　長承三年に諸國に大洪水、

あたり、いとめづらかに、悲しかりしことなり。

七　元暦の地震

又、元暦二年の頃、大なゐふること侍りき。そのさま常ならず。山は崩れて川を埋み、海は傾きて陸を浸せり。土裂けて水湧き上り、いはほ割れて谷にまろび入る。渚漕ぐ船は波にたゞよひ、道行く駒は足のたちどをまどはせり。いはんや、都のほとりには、在々所々、堂舍塔廟、ひとつとして全からず。或はくづれ、或はたふれぬる間、塵灰立ち上りて盛なる煙のごとし。地の震ひ家のやぶるゝ音、いかづちに異ならず。家の中に居れば忽に打ちひしげなんとす、はしり出づれば、又地割れ裂く。羽なければ空へもあがるべからず。龍ならねば、雲にのぼらむこと難

洛中に大火のあつたことをさす。
元暦二年　後鳥羽天皇の御代。

四大種　地・水・火・風。
齊衡　文德天皇の御代。

し。おそれの中に恐るべかりけるは、只地震なりけりとぞ覺え侍りし。
その中に、ある武士のひとり子の六つ七つばかりに侍りしが、ついひぢのおほひの下に小家を作りて、はかなげなる跡なし事をして、あそび侍りしが、俄に崩れうめられて、あと方なくひらに打ちひさがれて、二つの目など一寸ばかり打ち出されたるを、父母かゝへて、聲も惜まず悲みあひて侍りしこそ、あはれに悲しく見侍りしか。子のかなしみには、たけき者も恥を忘れけりと覺えて、いとほしくことわりかなとぞ見侍りし。
かくおびたゞしくふることは、しばしにて止みにしが、その餘波しばしば絕えず。世のつねに驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日、廿日過ぎにしかば、やうやう間どほになりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり、三月ばかりや侍りけん。四大種のうちに、水火風は、つねに害をなせど、大地に至りては、殊なる變をなさず。むかし、齊衡の頃かとよ、大地震ふりて、東大寺の佛のみ

權門のかたはらに云々　近ニ勢家一容ニ微身一者、（中略）有レ樂不レ能ニ大開レ口

ぐし落ちなどして、いみじき事ども侍りけれど、猶このたびにはしかずとぞ。すなはち、人みなあぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁も薄らぐかと見し程に、月日かさなり、年越えし後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。

八　出家の動機

すべて世のありにくきこと、我が身とすみかとのはかなくあだなるさま、かくのごとし。いはんや、所により、身のほどに隨ひて、心をなやますこと、あげて數ふべからず。もしおのづから身數ならずして、權門のかたはらに居る者は、深くよろこぶことはあれども、大に樂しぶにあたはず。歎きある時も、こゑをあげて泣くことなし。進退やすからず、立

而咲一、有ㇾ哀不ㇾ能ニ高揚ㇾ聲而哭一、進退有ㇾ懼、心神不ㇾ安、譬猶ニ鳥雀近ニ鷹鸇一矣。（本朝文粹、慶滋保胤）

人をたのめば　有ㇾ人者累、見ㇾ有ニ於人一者憂。（莊子）

居につけて恐れをのゝくさま、たとへば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ出で入る。妻子・僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狹き地に居れば、近く炎上する時、その害をのがるゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなはだし。又勢あるものは、貪欲ふかく、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あれば恐れ多く、貧しければなげき切なり。人をたのめば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に從へば、身くるし。又從はねば、狂へるに似たり。いづれのところを占め、いかなる業をしてか、しばしもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

わが身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所にすむ。その後、緣かけ、身おとろへて、偲ぶかたがたしげかりしかど、つひにあととむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これを、ありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はかばかしくは屋を造るに及ばず。わづかについひぢをつけりといへども、門建つるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり、風ふく每に、危からずしもあらず。所は川原ちかければ、水の難もふかく、白浪の恐れもさわがし。すべてあらぬ世を念じ過ぐしつゝ、心をなやませる事は、三十餘年なり。その間折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめむ。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。

大原山　山城國乙訓郡。

九　日野の閑居

爰に、六十の露消えがたにおよびて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたるかひこのまゆをいとなむが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、又百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に、齢はとし〴〵にかたぶき、すみかは折々にせばし。その家のありさま世のつねならず。ひろさはわづかに方丈、たかさは七尺ばかりなり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居をくみ、打ちおほひを葺きて、つぎめ毎にかけがねをかけたり。もし、心に叶はぬ事あらば、やすく外に移さんがためなり。その改め造る時、いくばくの煩かある。積む所わづかに二輛なり。車の力をむくゆる外は更に他の用途いらず。

いま日野山の奥に跡をかくしてのち、南にかりのひがくしをさし出して、竹のすのこを敷き、その西に閼伽棚を作り、中には西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。彼の帳のとびらに、普賢ならびに不動の像をかけたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃往生要集ごときの抄物をいれたり。傍に琴・琵琶おの〳〵一張を立つ。いはゆる、折り琴・つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、爰に文机を作り出せり。枕のかたにすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少し地を占め、あばらなるひめ垣をかこひて園とす。すなはちもろ〳〵の藥草を栽ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その所のさまをいはゞ、南に筧あり。岩をたゝみて水をためたり。林のき近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら、跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたより無

旅人の一夜　亦猶下行人之造二旅宿一老蠶之成中獨繭上矣。（慶滋保胤、池亭記）

中頃のすみか　大原山の住家。

日野山　山城國宇治郡醍醐の南にある。

阿彌陀　梵語。無量壽又は無量光と譯す。西方淨土に坐すといふ如來の名。

普賢　佛語。一切の理德を主る菩薩。

不動　佛語。明王の一。一切の鬼魅・煩惱を降服するといふ。

往生要集　惠心院の源信僧都が念佛の業を本として、經典中の要を集めて作つた書。

きにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くして、西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲耳に滿てり。空蟬の世を悲むかときこゆ。冬は雪を憐む。積り消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、又、恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば、口業をさめつべし。かならず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡のしら浪に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕べには、潯陽の江をおもひやりて源都督のながれを倣ふ。もしあまりの興あれば、しばしば松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれども、人の耳を悅ばしめんとにもあらず。獨りしらべ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

時鳥を聞く云々 この世にてかたらひおかん時鳥しでの山路のしるべともなれ。（山家集）

跡の白波云々 郭公なくなくこそはかたらはめ死出の山路に君しかゝらば。（山家集）世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白波。（拾遺集、沙彌滿誓）

岡の屋 山城國宇治郡五箇庄の宇治川に臨むところ。

滿沙彌 沙彌滿誓のこと。元正天皇の頃の人。

又麓に一つの柴の庵あり。すなはち、この山守が居るところなり。かしこに小童あり。時々來て相訪ふ。もし、つれ〴〵なる時は、これを友として遊びありく。かれは十六歲、われは六十路、その齡ことの外なれど、心を慰むる事は、これ同じ。或は茅花をぬき、岩梨をとり、又ぬかごをもり、芹をつむ。或はすそわの田居に到りて、落穗を拾ひて、穗組をつくる。もし、日うらゝかなれば、嶺によぢ上りて、はるかに故鄕の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるに障なし。あゆみ煩なく、志遠くいたるときは、これより峯つゞき、すみ山を越え、笠取を過ぎて、或は岩間に詣で、或は石山を拜む。もしは又、粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡を弔ひ、田上川を渡りて、猿丸太夫が墓を尋ぬ。歸るさには、折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り、且は家づとにす。もし、夜しづかなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く槇

桂の風云々 潯陽江頭夜送レ客。楓葉荻花秋瑟々。（白樂天、琵琶行）

潯陽の江 支那江西省九江郡にある川。白樂天が九江郡の司馬に左遷せられてゐる時、琵琶行を作った。

源都督 桂大納言源經信。琵琶の名手で、その流儀を桂流といふ。

故鄕 下賀茂山城國愛宕郡。

伏見の里・鳥羽 共に山城國紀伊郡。

羽束師 山城國乙訓郡。

すみ山 宇治御室戸山

木の島のかゞり火にまがひ、曉の雨は、おのづから木の葉ふく嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの、近く馴れたるにつけても、世にとほざかる程を知る。或は、埋火をかきおこして、老の寐覺の友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。いはんや、ふかく思ひ深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこのところに住み初めし時は、白地（あからさま）と思ひしかど、今までにいつ年を經たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都を聞けば、この山に籠りゐて後、やむごとなき人の隱れ給へるも、あまたきこゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たび〳〵の炎上にほろびたる家又いくそばくぞ。たゞかりの庵のみ、のどけくして恐れなし。程せばしといへども、夜ふす床あり。晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。

の東北にある山。
笠取 宇治郡醍醐山の東。
岩間・石山・粟津の原 近江國滋賀郡。
蟬丸 宇多天皇の皇子敦實親王に仕へた雜色で琵琶の名人。晩年逢坂山に隱棲した。
田上川 近江國栗太郡にある川。
猿丸太夫 歌人。攝津國菟原郡、深草郷の人。後に近江の曾來山中に隱れた。そこに墓がある。
槇木の島 山城國久世郡にあつて、古、網代を設けて

がうなは、ちひさき貝を好む。これよく身を知るに由りてなり。みさごは荒磯にゐる。すなはち人を恐るゝによりてなり。われ亦かくのごとし。身を知り世を知れれば、願はず、まじらはず、只しづかなるを望とし、憂なきを樂びとす。すべて、世の人の住家を造るならひ、かならずしも身の爲にはせず、或は妻子・眷屬の爲につくり、或は親昵・朋友の爲に造る。或は主君・師匠、および財寶・馬牛の爲にさへこれを造る。われ今、身の爲に結べり、人のために造らず。故いかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、伴ふべき人もなく、憑むべきやつこもなし。たとひひろく造れりとも、たれをかやどし、たれをかすゑん。

それ、人の友たる者は、富めるを尊み、ねんごろなるを先とす。かならずしも情あると、すなほなるとをば愛せず。たゞ糸竹・花月を友とせんには如かず。人の奴たる者は、賞罰の甚しきを顧み、恩のあつきを重くす。更に、はごくみあはれぶといへども、やすくしづかなるをば願はず。

魚を捕つた處。
山鳥の云々 山鳥のほろほろと鳴く聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ。（行基菩薩）
峯のかせぎの云々 山深み馴るゝかせぎのけぢかきに世に遠ざかる程ぞ知らるゝ。（玉葉集）
ふくろふの聲云々 山ふかみけぢかき鳥のおとはせでものおそろしき梟の聲。（西行）
ほどせばし云々 結レ駟列レ騎所レ安不レ過レ容レ膝、食前方丈所レ甘不レ過二一肉之味一云々。（韓詩外傳）

人の友たるもの云々
人之爲レ友者以レ勢以レ利。不レ以二淡交一、不レ如レ無レ友。（慶滋保胤、池亭記）

唯、我が身を奴とするには如かず。もし、すべき事あれば、すなはちみづから身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を從へ、人を顧るよりは安し。もし、ありくべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍・牛車と心をなやますには似ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手のやつこ、足の乘物、よく我が心にかなへり。心、また、身の苦みを知れれば、苦む時はやすめつ、まめなる時は、つかふ。使ふとてもたび〳〵過ぐさず。ものうしとても心をうごかすことなし。いかにいはんや、つねにありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らん。人を苦しめ、人を惱ますは、又罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

衣食のたぐひ、又、おなじ。藤の衣・麻のふすま得るに從ひて肌をかくし野邊のつばな、峯のこのみ、わづかに命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。かて乏しければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかやうのこと、たのしく富める人に對して

三界云々
三界とは一切衆生の生死輪廻する欲界・色界・無色界の稱。三界唯一心、心外無二別法一、心佛及衆生、是三無二差別一。（華嚴經）

七珍
金・銀・瑠璃・玻璃・珊瑚・硨磲・碼碯。

魚にあらざれば
子非レ魚、安知二魚之樂一。（莊子）

いふにはあらず。たゞ、我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。大かた世を遁れ、身を捨てしより、うらみもなく、おそれもなし。命は天運に任せて惜まず、いとはず。身をば浮雲になずらへて、賴まず、まだしとせず。一期のたのしびは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をり〳〵の美景に殘れり。それ、三界はたゞ心一つなり。心、もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今さびしきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづからみやこに出でては、乞食となれることを恥づといへども、かへりてこゝに居るときは、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ、魚鳥の有樣を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくのごとし、住まずしてたれか悟らん。

淨名居士
維摩詰のこと、方丈の室に住んでゐた。

周梨般特
釋迦の弟子中の愚人。

一〇 一期の餘算

そも〳〵一期の月影かたぶきて、餘算山の端に近し。忽に三途の闇に向はん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人を敎へたまふおもむきは、事に觸れて執心無かれとなり。今、草の庵を愛するをも科とす。閑寂に着するも障なるべし。いかゞ用なきたのしびを述べて、空しくあたら時を過ぐさん。しづかなる曉、このことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はんがためなり。しかるを、汝が姿はひじりに似て、心は濁にしめり。すみかはすなはち、淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、わづかに、周梨般特が行だにも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから惱ますか、はたまた妄心に至りてくるはせるか。その時心さらに、答ふることなし。たゞ、傍に舌根をやとひて、不請の念佛、兩三返を申して止みぬ。時に、建曆の二とせ、彌生の晦日ごろ、桑門蓮胤外山の庵にして、これをしるす。

月かげは、入る山の端も、つらかりき。たえぬひかりを見るよしもがな。

建曆
順德天皇の御代。

蓮胤
長明の法名。

月かげ云々
此の歌は新勅撰集釋敎部にある源季廣の歌である。季廣は長明と同時代の人であるから、後人が書き加へたのであらう。

徒然草

徒然草は兼好法師が見聞するに從つて心に感じた事を其の折々に記錄した隨筆で、兼好の歿後今川了俊がその僕松命丸に嘗て法師に從つてゐた事を聞いて、その遺墨を尋ねさせ吉田の草庵に張つてあつたものまで蒐輯させ、之を編成して二百四十三段としたものと傳へてゐる。書名は初段に「つれづれなるまゝに云々」とあるのをとつたのである。此の書は或は老儒佛の思想を受けて人世觀を述べ、或は文藝を論じ公事有職を說いたものである。文章は暢達麗雅で和漢調和文の優秀なものである。兼好は卜部兼顯の第四子で、吉田に居つたので普通吉田兼好といふ。後宇多天皇に仕へて左兵衞尉となつたが、正中元年（一九八四）その崩御にあひ、哀悼の餘り僧となつた。晩年伊賀國國見山の麓に住し、正平五年(二〇一〇)二月入寂した。

人間の種云々　此花非二是人間種一、瓊樹枝頭第二花。(和漢朗詠集)　此花非二是人間種一、再養二平臺一片霞一。(同上)

一　つれづれなるまゝに

つれづれなる儘に、日暮し硯に對ひて、心にうつり行く由無しごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。(序)

二　いでやこの世に生れては

いでや此の世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。帝の御位はいともかしこし、竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有樣は更なり、只人も舍人など賜はる際は、ゆゝしと見ゆ。

人には木の端の樣に云々　思はん子を法師になしたらんこそ心苦しけれ。さるは、いと頼もしきわざを、たゞ木のはしのやうに思へるこそいとほしけれ。(枕草紙)

清少納言　枕草子の著者。一條天皇の時の才女。

增賀　參議橘恒平の子。僧正となって多武峯に住む。一條天皇の長保五年寂。

其の子・うまごまではふれにたれどなほなまめかし。それより下つ方は、程につけつゝ時に遇ひ、したり顔なるも、自はいみじと思ふらめど、いとくちをし。

法師ばかり羨しからぬ者はあらじ。「人には木の端の樣に思はるゝよ。」と清少納言が書けるも、げにさる事ぞかし。勢ひ猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。增賀ひじりの云ひけん樣に、名聞ぐるしく、佛の御教に違ふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨人は、なかなか有らまほしき方も有りなん。

人は、かたち・有樣の勝れたらんこそ、有らまほしかるべけれ。物うち言ひたる、聞き惡くからず、愛敬ありて詞おほからぬこそ、あかず對はまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるゝ本性見えんこそくちをしかるべけれ。

品・かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも遷さば

あだし野　嵯峨野の奥・愛宕山の麓にあつた墓地の總稱。

鳥部野　東山の阿彌陀峯の麓に火葬場のあつた所。

かげろふの云々　蜉蝣朝生而暮死、而盡二其樂一。（淮南子說林訓）

夏の蟬云々　蟪蛄不レ知二春秋一。（莊子逍遙遊篇）

命長ければ云々　多二男子一則多レ懼、富則多レ事、壽則多レ辱、是三者非レ所三以養二レ德也。（莊子天地篇）

移らざらん。かたち・心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品下り、顔にくさげなる人にもたち交りて、かけず氣壓さるゝこそ、本意なきわざなれ。ありたき事は、まことしき文の道・作文・和歌・管絃の道、また有職に公事のかた、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそをのこはよけれ。（第一段）

三　あだし野の露

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部野の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。蜻蛉の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。飽かずをしと思はゞ、千とせを過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。すみはてぬ世に、みにくきすがたを待ちえて何かはせん。命長ければ恥おほし。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはんことを思ひ、夕の陽に子孫を愛し、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみふかく、物のあはれも知らずなりゆくなんあさましき。（第七段）

四　家居のつきづきしく有らまほしきこそ

後徳大寺の大臣　左大臣藤原實定。

家居のつきづきしく有らましきこそ、假の宿りとは思へど興あるものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一際しみじみと見ゆるぞかし。今めかしく、きらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うち有る調度も昔おぼえてやすらか、なるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くの工の心を盡して磨き立て、唐の大和の、珍らしくえならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心の儘ならず造りなせるは、見るめも苦しくいとわびし。さてもやは長らへ住むべき、また時の間の煙ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。おほかたは、家居にこそ事ざまはおしはからるれ。

後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶居させじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶の居たらん何かは苦しかるべき。此の殿の御心さばかり

綾小路宮　性惠法親王、龜山天皇の皇子。

栗栖野　山城國宇治郡醍醐の邊。

にこそ」とて、其の後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば彼の例思ひ出でられ侍りしに、誠や「烏の群れ居て、池の蛙を捕りければ、御覽じ悲しませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覺えしか。德大寺にも如何なる故か侍りけん。（第十段）

五　神無月の頃

神無月の頃、栗栖野と云ふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道を踏み別けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ筧の雫ならでは、つゆおとなふ物なし。閼伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人の有ればなるべし。かくても在

られけるよと、あはれに見るほどに、彼方の庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、廻りを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。（第十一段）

六　同じ心ならん人と

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世の果敢なき事も、うらなく言ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければつゆ違はざらんと對ひ居たらんは、一人ある心地やせん。互に言はん程の事をば、げにと聞くかひ有る物から、聊か違ふ所も有らん人こそ、「我はさやは思ふ」など爭ひ憎み、「さるからさぞ」とも打語らはゞつれ〴〵慰まめと思へど、げには少しかこつ方も、我と等しからざらん人は、大方の

よしなしごといはん程こそあらめ、まめやかの心の友には遙かに隔たるところのありぬべきぞわびしきや。（第十二段）

七　何處にもあれ

いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ目覺むる心地すれ。其のわたり此處彼處見ありき、田舍びたる所、山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へ便求めて文遣る。「其の事彼の事便宜に忘るな」など言ひ遣るこそをかしけれ。左樣の處にてこそ萬に心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びて籠りたるもをかし。（第十五段）

許由　堯の世の賢人。

孫晨　周時代の人。

八　人は己をつゞまやかにし

人は己をつゞまやかにし驕を退けて財を持たず、世を貪らざらんぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは罕なり。唐土に許由と云ひつる人は、更に身に從へたる貯もなくて、水をも手して捧げて飮みけるを見て、なりひさごと云ふ物の人の得させたりければ、或時木の枝に懸けたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて捨てつ。また手に掬びてぞ水も飮みける。如何ばかり心のうち涼しかりけん。孫晨は冬の月に衾なくて藁一束ありけるを、夕べには之に臥し、朝には收めけり。もろこしの人は之をいみじと思へばこそ、記し止めて世にも傳へけめ。これらの人は語りも傳ふべからず。

（第十八段）

物のあはれは云々　春はたゞ花の一重に咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる。（拾遺集）

花橘云々　さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。（古今集）

灌佛　四月八日、釋迦誕生會。

祭

九　折節の移り變るこそ

折節の移り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ」と人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今ひときは心の浮立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萠え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて、心あわただしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、萬に唯心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ古の事も立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなき樣したる、すべて思ひ捨て難き事おほし。「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂り行く程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされ」と人の仰せられしこそ實にさるものなれ。五月、

賀茂祭、四月中の酉の日。
六月祓　六月晦日に行はれる大祓。
棚機まつる　七夕。七月七日の星祭。
源氏物語　紫式部の著した小說。
枕草紙　清少納言の著した隨筆。
おぼしき事云々　おぼしき事云はぬは、げにぞ腹ふくるゝ心地しける。（大鏡、序）

あやめ葺く頃、早苗とる頃、水鷄の敲くなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機まつるこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、早稻田刈り乾すなど、とり集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言ひ續くれば皆、源氏物語・枕草紙などに事ふりにたれど、同じ事また今更に言はじとにもあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば筆に任せつゝ、あぢき無きすさびにて、かいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬がれの景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止まりて、霜いと白う置ける朝遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人も無き月の寒けく澄める廿日あまりの空

御佛名　十二月十九日から三日間、宮中で行はれた佛事。
荷前の使　年末に初穗を十陵八墓へ奉られる勅使。
追儺　大晦日の夜、宮中で鬼を追拂ふさまをせられた公事。
四方拜　元旦未明に天皇が天地四方山陵を拜し給ふ儀式。

こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使たつなどぞ、あはれにやんごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝ樣ぞいみじきや。追儺より四方拜に續くこそおもしろけれ。

つごもりの夜いたう闇きに、松どもともして夜半すぐるまで人の門敲き走りありきて、何事にかあらん事々しく罵りて、足を空にまどふが、曉がたより流石に音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざはこの頃都には無きを、あづまの方にはなほする事にて有りしこそあはれなりしか。かくて明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えねど引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして花やかに嬉しげなるこそ又あはれなれ。（第十九段）

沅湘云々
盧橘花開楓葉衰。出レ門何處望二京師一。沅湘日夜東流去。不下爲二愁人一住少時上。（戴叔倫）

嵆康
晉の竹林七賢の一人。

山澤に遊びて云々
遊二山澤一觀二魚鳥一心甚樂之。一行作レ吏此事便廢。安能捨二其所レ樂而從二其所レ懼哉。（文選、嵆康與二山濤一絶交書）

一〇　萬の事は月見るにこそ

萬の事は月見るにこそ慰む物なれ。ある人の「月ばかり面白き物はあらじ。」と言ひしに、又ひとり「露こそあはれなれ。」と諍ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かはあはれならざらん。月花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るる水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に住る事少時も爲ず。」と云へる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵆康も「山澤に遊びて、魚鳥を見れば心樂しぶ。」と言へり。人遠く水草清き所にさまよひ歩きたるばかり、心なぐさむ事はあらじ。

（第二十一段）

飛鳥川云々
飛鳥川は大和國高市郡にある。「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬になる。」（古今集）

桃李物言はず云々
桃李不レ言春幾暮。煙霞無レ跡昔誰栖。（和漢朗詠集）

京極殿
京都の土御門の南、京極の西にあつた。

法成寺
京都の五條河原にあつた。

御堂殿
藤原道長。

正和

一一　飛鳥川の淵瀬

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事さり、樂しみ悲しみ行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人改まりぬ。桃李物言はねば誰と共にか昔を語らん。まして見ぬ古へのやんごとなかりけん跡のみぞいと果敢なき。

京極殿・法成寺など見るこそ、心ざし止まり事變じにけるさまはあはれなれ。御堂殿の造り磨かせ給ひて莊園おほく寄せられ、我が御ぞうのみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までと思し置きし時、いかならん世にも斯ばかりあせ果てんとは思してんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の頃南門は燒けぬ。金堂は其の後倒れ伏したる儘にて、とり建つる業もなし。無量壽院ばかりぞ其の形とて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて並びおはします。行成大納言の額、兼行

花園天皇の朝。

行成　藤原行成。小野道風と藤原佐理と並んで三跡といはれた。

兼行　藤原兼行。

が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども未だ侍るめり。是も亦何時までか有らん。かばかりの名殘だに無き所々は、おのづから石ずゑ許り殘るもあれど、さだかに知れる人も無し。されば萬に見ざらん世までを思ひおきてむこそ果敢なかるべけれ。（第二十五段）

一二　靜かに思へば

靜かに思へばよろづ過ぎにし方の戀しさのみぞ爲ん方なき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何と無き具足とりしたゝめ、殘し置かじと思ふ反古など破り捨つる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、たゞ其の折の心地すれ。此の頃在る人の文だに、久しく

なりて、如何なる折何時の年なりけんと思ふは哀なるぞかし。手馴れし具足なども、心もなくて變らず久しき、いとかなし。（第二十九段）

一三　人の亡き跡ばかり

人の亡き跡ばかり悲しきはなし。中陰の程、山里などに移ろひて、便あしく狹き所に數多あひ居て、後の業ども營みあへる、心あわたゞし。日數の早く過ぐる程ぞ物にも似ぬ。果の日は、いと情なう、互に云ふ事も無く、我かしこげに物ひきしたゝめ、散々に行きあかれぬ。舊の住處に歸りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。「しかじかの事は、あなかしこ、跡のため忌むなる事ぞ。」など云へるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心は猶うたて覺ゆれ。年月經ても露忘

去る者は日々に疎しと云々
去者日以疎、來者日以親。(文選)

何れの人と云々
古墓何代人、不レ知姓與レ名
化爲二路傍土一、年々春草生。
(白氏文集)

嵐にむせびし云々
古墓犁爲レ田。松柏摧爲レ薪。
(文選)

るゝには有らねど、「去る者は日々に疎し。」と云へることなれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや、よしなしごとなど言ひて打ちも笑ひぬ。からは氣疎き山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕べの嵐夜の月のみぞ事問ふよすがなりける。

思ひ出でて忍ぶ人有らん程こそあらめ、そも亦程なくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば何れの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれとも見るべきを、果は嵐にむせびし松も千年を待たで薪に碎かれ、古き塚は鋤かれて田となりぬ。其の形だに無くなりぬるぞ悲しき。

(第三十段)

一四　雪の面白う降りたりし朝

雪の面白う降りたりし朝、人のがりいふべき事ありて文を遣るとて、雪の事何とも云はざりし返事に、「此の雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬ程の僻々しからん人の仰せらるゝ事、聞きいるべきかは。返す〴〵口惜しき御心なり。」と云ひたりしこそをかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし。(第三十一段)

一五　朝夕へだてなく馴れたる人の

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心置き、ひき繕へる樣に見ゆるこそ、今更かくやはなど云ふ人もありぬべけれど、なほげにげ

身の後には云々　身後堆レ金拄ニ北斗一、不レ如生前一樽酒。（白氏文集）

金は山に云々　藏ニ金於山一、藏ニ珠於淵一。（莊子）

にしくよき人かなとぞ覺ゆる。うとき人のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。（第三十七段）

一六　名利に使はれて

名利に使はれて、閑かなる暇なく一生を苦しむるこそ愚なれ。財多ければ身を守るにまどし。害を買ひ煩を招くなかだちなり。身の後には金をして北斗を拄ふとも、人の爲にぞわづらはるべき。おろかなる人の目を歡ばしむる樂しび亦あぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉の飾も、心あらん人はうたて愚なりとぞ見るべき。金は山に棄て玉は淵に投ぐべし。利にまどふはすぐれておろかなる人なり。

智慧出でゝ云々　大道廢有ニ仁義一、智慧出有ニ大僞一。（老子經）

うづもれぬ名を永き世に殘さんこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなき人をしも、勝れたる人とやは云ふべき。愚に拙き人も、家に生れ時に遇へば高き位にのぼり驕を極むるもあり。いみじかりし賢人みづから卑しき位にをり、時に遇はずして止みぬる亦多し。ひとへに高き官位をのぞむも次におろかなり。

智惠と心とこそ、世に勝れたる譽も殘さまほしきを、つら〳〵思へば譽を愛するは人の聞を喜ぶなり。譽むる人、毀る人ともに世に停らず。傳へ聞かん人、又々速かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。譽は又毀の本なり。身の後の名のこりて更に益なし。之を願ふも次におろかなり。たゞし強ひて智を求め賢を願ふ人の爲に言はゞ、智慧出でて僞あり、才能は煩惱の增長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは實の智にあらず、いかなるをか智と云ふべき。可・不可は一條なり、如何なるをか善と云ふ。誠の人は知も無く、德

も無く、功も無く、名も無し。誰か知り、誰か傳へん。これ德を隱し愚を守るにはあらず。本より賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心をもちて名利を要むるにかくの如し。萬事は皆非なり。云ふに足らず、願ふに足らず。（第三十八段）

一七　五月五日賀茂の競馬を

五月五日、賀茂のくらべうまを見はべりしに、車の前に雜人立ちへだてて見えざりしかば、おの〳〵降りて、埒のきはに寄りたれど、殊に人多くたちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かかる折にむかひなる樗の木に、法師ののぼりて、木のまたについゐて物見るあり。取りつきながらいたう睡りて落ちぬべき時に、目を覺ます事たび〳〵なり。これ

人木石に云々　人非二木石一豈無レ感。（文選）

を見る人嘲りあさみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ。」と云ふに、我が心にふと思ひしまゝに、「我等が生死の到來たゞ今にもやあらん。それを忘れて、もの見て日を暮らす、おろかなることはなほ勝りたるものを。」と言ひたれば、前なる人ども、「實に然にこそ候ひけれ。尤もおろかに候。」と云ひて、皆うしろを見かへりて、「此處へ入らせたまへ。」とて、所をさりて呼びいれ侍りにき。

かほどのことわり、誰かは思ひ寄らざらんなれども、折からの思ひ掛けぬこゝちして胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。（第四十一段）

一八　あやしの竹の編戸の内より

あやしの竹の編戸の内より、いと若き男の、月影に色合さだかならねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いと故づきたる樣にて、さゝやかなる童一人を具して、遙なる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつゝ行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて、山の際に總門のある內に入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目止まる心地して、下人に問へば「しかじかの宮の在します頃にて、御佛事など候にや。」と云ふ。

御堂の方に法師ども參りたり。夜寒の風に誘はれ來る空焚物の匂も身に染む心地す。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人目なき山里とも云はず心づかひしたり。

心の儘に繁れる秋の野らは、置き餘る露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往來も早き心地

して、月の晴れ曇る事さだめ難し。(第四十四段)

一九 老來りて

老來りて始めて道を行ぜんと待つ事勿れ。古き塚多くはこれ少年の人なり。計らざるに病をうけて、忽に此の世を去らんとする時にこそ、始めて過ぎぬる方の誤れる事は知らるるなれ。誤と云ふは他の事に非ず。速かにすべき事を緩くし、緩くすべき事を急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり。其の時悔ゆとも甲斐あらんや。

人はたゞ無常の身に迫りぬる事を心にひしと懸けて、つかの間も忘るまじきなり。さらばなどか、此の世の濁も薄く、佛道をつとむる心もまめやかならざらん。昔ありける聖は、人來りて自他の要事を云ふ時

老來りて云々　莫待老來始學道。古墓多是少年人。(古詩)

禪林の十因　京都東山禪林寺の永觀律師の作つた往生十因。

心戒　平宗盛の子で平家の滅亡後僧になつた人であらうと云ふ。

龜山殿　山城國葛野郡龜山の麓にあつた離宮。龜山上皇の御隱居の山莊。

大井川　又大堰川と書く。下流は桂川といつて淀川にそゝぐ。

答へて曰く「いま火急の事ありて既に朝夕に迫れり」とて耳をふたぎて、念佛して遂に往生を遂げけりと、禪林の十因に侍り。心戒と云ひける聖は、あまりに此の世のかりそめなる事を思ひて、しづかについゐける事だになく、常はうづくまりてのみぞありける。（第四十九段）

二〇　龜山殿の御池に

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて水車を作らせられけり。多くのあしを給ひて、數日にいとなみ出して掛けたりけるに、大かためぐらざりければ、とかく直しけれども、遂にまはらでいたづらに立てりけり。さて宇治の里人を召して、こしらへさせければ、安らかにゆひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐりて水

宇治　山城國久世郡。

仁和寺　山城國葛野郡花園村にある。

石清水　山城國綴喜郡男山八幡宮のこと。

極樂寺　男山の麓にある寺。

高良　男山の麓にある社。

を汲み入るゝ事めでたかりけり。萬に其の道を知れる者はやんごとなきものなり。（第五十一段）

二一　仁和寺にある法師

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ心うく覺えて、ある時思ひ立ちて唯一人かちより詣でけり。極樂寺高良など拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの人に會ひて、「年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて貴くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに、山へ登りしは何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて山までは見ず」とぞ云ひける。少しの事にても先達は有らまほしき事なり。（第五十二段）

二二　是も仁和寺の法師

是も仁和寺の法師童の法師にならんとする名殘とて、各遊ぶ事ありけるに、醉ひて興に入る餘り、かたはらなる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押し平めて顏を差入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入る事限なし。しばしかなでて後、拔かんとするに大かた拔かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、頸の廻り缺けて、血たり、只腫れに腫れ滿ちて、息もつまりければ、打割らんとすれども容易く割れず。響きて堪へ難かりければ、かなはで爲べきやうなくて、三足なる角の上に帷衣を打懸けて、手を引き杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見る事限なし。くすしの許にさし入りて、對ひ居たりけん有樣、さこそことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「斯かる事は書にも見えず、傳へたる教もなし。」と言へば、また仁和寺に歸りて、親しき者、老いたる母など、枕がみに寄り居て泣き悲しめども聞くらんとも覺えず。かかる程に或者の云ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てて引き給へ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら脫けにけり。からき命まうけて久しく病み居たりけり。

（第五十三段）

二三　久しく隔たりて逢ひたる人の

久しく隔たりて逢ひたる人の、我が方に有りつる事、數々に殘り無く語り續くるこそあいなけれ。隔て無く馴れぬる人も、程經て見るは耻

しからぬかは。

つぎざまの人は、あからさまに立出でても、興ありつる事とて、息もつきあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語するは、人數多あれど一人に向きて云ふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰とも無く數多の中にうち出でて、見る事の樣に語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。

をかしき事を云ひてもいたく興ぜぬと、興なき事を云ひても能く笑ふにぞ、品のほど測られぬべき。人の見ざまの善惡、才ある人は其の事など定めあへるに、己が身に引掛けて云ひ出でたるいとわびし。

（第五十六段）

二四　世に語り傳ふる事

世に語り傳ふる事、まことはあいなきにや、多くは皆そらごとなり。あるにも過ぎて人は物を言ひなすに、まして年月過ぎ、境も隔たりぬれば、言ひたき儘に語りなして、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定まりぬ。道々の物の上手のいみじき事など、かたくななる人の、其の道知らぬは、そゞろに神の如くに言へども、道知れる人は更に信もおこさず。音に聞くと、見る時とは、何事も變るものなり。

かつ現はるゝをもかへりみず、口に任せて云ひちらすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。また我もまことしからずは思ひながら、人の言ひしまゝに、鼻のほどおごめきて云ふは、其の人の虚言にはあらず。げに〳〵しく、所々うちおぼめき、能く知らぬ由して、さりながらつま〴〵あはせて語る虚言は、恐ろしき事なり。我がため面目ある樣に云はれぬる虚

言は、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虚言は、一人さも無かりし物を」と言はんも詮なくて聞き居たる程に、證人にさへなされていとゞ定まりぬべし。

とにもかくにも、虚言多き世なり。たゞ常にある珍しからぬ事の儘に心得たらん、萬に違ふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚く事のみあり。よき人は奇しき事を語らず。

かくは言へど、佛神の奇特權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。是は世俗の虚言を懇に信じたるもをこがましく、よもあらじなど言ふも詮なければ、大かたはまことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。（第七十三段）

二五 蟻の如くに集りて

蟻の如くに集りて、東西に急ぎ南北に奔る。高きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり。行くところあり、歸る家あり。夕べにいねて、朝におく。いとなむ所、何事ぞや。生をむさぼり、利を求めてやむ時なし。身をやしなひて何事をかまつ。期する所、たゞ老と死とにあり。その來たる事すみやかにして、念々の間にとゞまらず。之を待つ間、なにの樂みかあらん。まどへる者は之を恐れず、名利に溺れて先途の近き事を顧みねばなり。愚なる人は又之を悲しぶ、常住ならん事を思ひて、變化の理を知らねばなり。（第七十五段）

下愚の性云々　上智與下愚不移。（論語）

驥を學ぶは云々　晞驥之馬亦驥之乘也。晞顏之人亦顏之徒也。（楊子方言）

舜を學ぶは云々　子服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣。（孟子）

二六　人の心すなほならねば

人の心すなほならねば僞なきにしもあらず。されどおのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たま〳〵賢なる人を見て、之をにくむ。「おほきなる利を得んがために、すこしきの利をうけず、僞り飾りて名をたてんとす。」と謗る。己が心に違へるによりて此の嘲をなすにて知りぬ。此の人は下愚の性うつるべからず、僞りて小利をも辭すべからず。假にも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ばんを賢といふべし。

（第八十五段）

二七　ある人弓射る事を習ふに

ある人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に對ふ。師の曰く、「初心の人二つの箭を持つ事勿れ。後の矢を頼みて初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、此の一矢に定むべしと思へ。」と云ふ。僅に二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心自ら知らずと雖も、師之を知る。此のいましめ萬事に渉るべし。道を學する人、夕べには朝あらん事を思ひ、朝には夕べ有らん事を思ひて、かさねて懇に修せん事を期す。況や一刹那の中に於て、懈怠の心ある事を知らんや。何ぞ只今の一念に於て、直ちにする事の甚だ難き。

（第九十二段）

二八　寸陰をしむ人なし

寸陰をしむ人なし。これ能く知れるか、愚なるか。愚にしておこたる人の爲にいはゞ、一錢かろしといへども之をかさぬれば、まづしき人をとめる人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那覺えずといへども、之をはこびてやまざれば、命を終ふる期たちまちにいたる。されば道人は、遠く月日を惜しむべからず。只今の一念むなしく過ぐる事を惜しむべし。もし人來りて、「我が命あすは必ず失はるべし」とつげ知らせたらんに、けふの暮るゝ間、何事をか頼み、何事をかいとなまん。我らがいけるけふの日、なんぞ其の時節に異ならん。一日のうちに、飲食・便利・睡眠・言語・行歩、やむことをえずしておほくの時をうしなふ。其のあまりのいとまいくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して、時をうつすのみならず、日を消し月を

千里の外
三五夜中新月

わたりて一生を送る、最も愚なり。（第百八段）

二九　花は盛りに

花は盛りに、月は隈なきをのみ見る物かは。雨に對ひて月を戀ひ、たれこめて春の行方しらぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌のことばがきにも、「花見に罷れりけるに、早く散りすぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り月のかたぶくを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、「此の枝かの枝ちりにけり、今は見所なし」などは云ふめる。

萬の事も始終こそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外まで眺め

色。二千里外故人心。(白氏文集)

祭 賀茂の葵祭四月中の酉の日に行はれた。

たるよりも、曉ちかくなりて待ちいでたるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴・しらかしなどの濡れたるやうなる葉のうへに、きらめきたるこそ身にしみて、心あらん友もがなと都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見る物かは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、はては大きなる枝、心無く折りとりぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、萬の物よそながら見る事なし。

さやうの人の祭見しさま、いと珍らかなりき。「見ごといと遲し。その程は棧敷不用なり。」とて奥なる屋にて酒飲み物食ひ、圍碁・双六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡りさぶらふ。」と云ふ時に、おの〳〵肝つぶるゝやうに爭ひ走り登りて、落ちぬべきまで簾はりいでて、押し合ひつゝ、一事も見漏らさじとまもりて、「とありかゝり。」と物ごとに云ひて、渡り過ぎぬれば、「又わたらんまで。」と云ひておりぬ。たゞ物をのみ見んとするなるべし。

都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。わかくすゑ〴〵なるは、宮づかへにたちゐ、人のうしろにさぶらふは、さまあしくもおよびかゝらず。わりなく見んとする人もなし。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明け放れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど思ひよすれば、牛かひ・下部などの見しれるもあり。をかしくもきら〳〵しくも、さま〴〵に行きかふ。見るもつれ〴〵ならず。くるゝほどには、たてならべつる車ど

も、所なく並みゐつる人も何方へ行きつらん、ほどなく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾・疊も取りはらひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られて哀なれ。　大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。（第百三十七段）

三〇　家に有りたき木は

家に有りたき木は松・櫻。　松は五葉もよし、花は一重なるよし。　八重櫻は、奈良の都にのみ有りけるを、此の頃ぞ世に多くなり侍るなる。　吉野の花、左近の櫻、みな一重にてこそあれ。　八重櫻はことやうの物なり、いとこちたくねぢけたり。植ゑずとも有りなん。　おそざくら又すさまじ。　虫のつきたるもむづかし。　梅は、白き、うす紅梅、一重なるがとく咲きたるも、重なりたる紅梅の匂めでたきも、みなをかし。　おそき梅は、櫻に咲きあひておぼえおとり、けおされて枝にしぼみつきたる心うし。「一重なるが、まづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなん軒ちかく植ゑられたりける。　京極の屋の南むきに今も二本侍るめり。　柳又をかし。　卯月ばかりの若楓、すべて萬の花紅葉にもまさりてめでたきものなり。　たちばな・かつら、いづれも木は物ふり大きなるよし。

草は山吹・藤・かきつばた・なでしこ。池には蓮。秋の草は荻・薄・桔梗・萩・女郎花・藤袴・紫苑・木香・苅萱・龍膽・菊・黄菊・蔦・葛・朝顔、いづれもいと高からずさゝやかなるが、垣にしげからぬよし。

此の外、よに稀なるもの、からめきたる名の聞きにくゝ、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。　大かた、何も珍しく有りがたき物は、よからぬ人のもてあそぶものなり。　さやうのもの無くてありなん。（第百三十九段）

京極入道中納言　藤原定家、四條天皇の時に薨じた。

三一 身死して財のこる事は

身死して財のこる事は、智者のせざる處なり。よからぬ物たくはへ置きたるもつたなく、よき物は心をとめけんと果敢なし。こちたく多かる、まして口惜し。「我こそ得め」など云ふ者どもありて、あとに爭ひたる、樣あし。後は誰にと心ざす物あらば、生けらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。（第百四十段）

三二 能をつかんとする人

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ、うち〱能く習ひえてさし出でたらんこそ、いと心にくからめ」と常に云ふめれど、かく云ふ人、一藝も習ひ得る事なし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、誹り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性其の骨なけれども道になづまず、みだりにせずして、年を送れば、堪能のたしなまざるよりは遂に上手の位にいたり、徳たけ人にゆるされて、双なき名を得る事なり。天下の物の上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども其の人、道のおきてたゞしく、之をおもくして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。（第百五十段）

三三 一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道の席に臨みて「あはれ我が道ならましかば、かくよそには見侍らじ物を。」と云ひ、心にも思へること常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。しらぬ道のうらやましく覺えば「あなうらやまし。などか習はざりけん。」と云ひてありなん。

我が智をとり出でて人に諍ふは、角あるもの丶角をかたぶけ、牙あるもの丶牙をかみ出すたぐひなり。人としては、善にほこらず物と爭はざるを德とす。他にまさる事のあるは、大なる失なり。品の高きにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ云はねども、內心にそこばくのとがあり。つ丶しみて之を忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、わざはひをも招くはたゞ此の慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、おのづから明かに其の非を知るゆゑに、志常にみたずして、つひに物にほこることなし。（第百六十七段）

三四　年老いたる人の

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「此の人の後には誰にか問はん。」など云はる丶は老のかたうどにて、いけるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生此の事にてくれにけりとつたなくみゆ。「今は忘れにけり。」と云ひてありなん。大かたは知りたりとも、すゞろに云ひちらすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづからあやまりも有りぬべし。「さだかにもわきまへ知らず。」など云ひたるは、なほまことに道のあるじとも覺えぬべし。まして知らぬことをしたり顏に、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人の、言ひきかするをさもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし。（第百六十八段）

阮籍　晉の人、竹林七賢の一人。

青き眼云々　阮籍字嗣宗、不レ拘ニ禮敬一、能爲ニ青白之眼一對レ之。及ニ嵇喜來弔一、籍作ニ白眼一、喜不レ懌而退、喜弟康聞レ之乃齎レ酒挾レ琴造焉。籍大悅乃見ニ青眼一。（晉書）

三五　さしたる事なくて

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬ事なり。用有りて行きたりとも、其の事はてなばとく歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。人と對ひたれば言葉おほく、身もくたびれ、心も靜かならず。萬の事さはりて時をうつす、たがひのため益なし。厭はしげに云はんもわろし。心づきなき事あらん折は、中々其の由をも云ひてん。同じ心に對はまほしく思はん人の、つれ〴〵にて「今しばし、今日は心靜かに」などいはんは、此の限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰も有るべき事なり。その事となきに人の來りて、のどかに物がたりして歸りぬる、いとよし。また文も「久しく聞えさせねば」などばかり云ひおこせたる、いとうれし。（第百七十段）

苔の袂　皆人は花の衣になりにけり苔の袂よかわきだにせよ。（遍昭）

三六　わかき時は

わかき時は、血氣うちに餘り、心、ものにうごきて情欲多し。身をあやぶめて碎け易き事、玉を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費やし、之を捨てて苔の袂にやつれ、いさめる心さかりにして物と爭ひ、心に恥ぢうらやみ、好む所日にさだまらず。色にふけり情にめで行をいさぎよくして百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくして、身のまたく、久しからん事をば思はず。すける方に心ひきて長き世語ともなる。身をあやまつ事は、若き時のしわざなり。

老いぬる人は、精神おとろへ、あはくおろそかにして感じ動く所なし。心おのづから靜かなれば無益の業をなさず。身をたすけて愁なく、人のわづらひ無からんことを思ふ。老いて智の若き時にまされる事若くして貌の老いたるにまされるがごとし。（第百七十二段）

時頼　鎌倉五代の執權。
守　相模守時頼をさす。
城介義景　秋田城の介安達義景。秋田城の介は出羽國秋田城を管する役。

三七　相模守時頼の母は

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝ事ありけるに、煤けたる明障子のやぶればかりを禪尼手づから小刀して切廻しつゝ張られければ、せうとの城介義景、其の日のけいめいして候ひけるが、「給はりてなにがし男にはらせ候はん。さやうの事に心得たる者に候。」と申されければ、「其の男尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づつはられけるを、義景「みなを張りかへ候はんは、遙にたやすく候ふべし。まだらに候も見ぐるしくや。」とかさねて申されければ、「尼も後はさわ〳〵と張りかへんと思へども、今日ばかりはわざと斯くて有るべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと、若き人に見ならはせて心つけん爲なり。」と申されける、いと有りがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を子に持たれける、まことに只人にはあらざりけりとぞ。（第百八十四段）

三八　萬の道の人

萬の道の人、假令不堪なりと雖も、堪能の非家の人に並ぶ時、必ず優る事は、たゆみ無く愼みて輕々しくせぬと、一重に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞、心遣も、おろかにして愼めるは得の本なり。巧にして恣なるは失の本なり。（第百八十七段）

三九　或者子を法師になして

或者、子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、說經などして世渡るたつきともせよ。」と云ひければ、教のまゝに說教師にならんために、まづ馬に乘りならひけり。輿・車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬などむかへにおこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後酒などすゝむる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つの業やうやうさかひに入りければ、いよいよよくしたくおぼえて嗜みけるほどに、說經ならふべき隙なくて年よりにけり。

此の法師のみにもあらず、世間の人なべて此の事あり。若き程は諸事につけて身を立て、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心には懸けながら、世をのどかに思ひて打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみ紛れて月日を送れば、ことごとになす事なくして身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひ

しやうに身をも持たず、悔ゆれども取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へ行く。

されば一生のうちに、旨とあらまほしからん事の中に、いづれかまさると能く思ひくらべて、第一の事をあんじ定めて、其の外は思ひ捨てゝ、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の來らんうちに、すこしも益のまさらん事をいとなみて、其の外をば打捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心にとりもちては、一事もなるべからず。

たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて小を捨てゝ大につくがごとし。それにとりて、三つの石を捨てゝ、十の石につく事は易し。十を捨てゝ、十一につく事は難し。ひとつなりともまさらん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には替へにくし。之をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも

東山　京都の東につらなる諸山の總稱。

西山　東山に對して、西の方嵯峨方面の山をいふ。

わたのべのひじり　わたのべは渡邊又は渡部と書き、攝津の難波江の渡口。そこに住んでゐた僧。

登蓮法師

得ず之をも失ふべきみちなり。

京にすむ人、いそぎて東山に用ありて、すでに行きつきたりとも、西山に行きて其の益まさるべきことを思ひえたらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝまで來着きぬれば、此の事をば先づ云ひてん、日をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りて又こそ思ひ立ためと思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる、之をおそるべし。

一事を必ず爲さんと思はゞ、他の事の破るゝをもいたむべからず、人のあざけりをも恥づべからず、萬事にかへずしては一の大事なるべからず。人の數多ありける中にて、ある者「ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふことあり。わたのべのひじり、此の事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師其の座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある、かしたまへ。かの薄のこと習ひに、渡、邊の聖のがり尋ね罷らん。」と云ひけるを、「餘りに物さわがし、雨やみてこそ。」と人の云ひければ、「無下の

傳不詳、その歌は詞花集・千載集等に出てゐる。

敏き時は云々　敏則有功。（論語陽貨篇）

事をも仰せらるゝ物かな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に聖もうせなば、尋ね聞きてんや。」とて走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申しつたへたるこそ、ゆゝしく有難うおぼゆれ。「敏き時は則ち功あり。」とぞ論語といふ書にも侍るなる。此の薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をぞ思ふべかりける。（第百八十八段）

四〇　萬の事は賴むべからず

萬の事は賴むべからず。愚なる人は深く物を賴む故に、怨み憤る事あり。勢ありとて賴むべからず、こはきものまづ滅ぶ。財多しとて賴むべからず、時の間に失ひ易し。才ありとて賴むべからず、孔子も時にあはず。德ありとて賴むべからず、顏回も不幸なりき。君の寵をも賴

人は天地の靈
惟天地萬物、父母、惟人萬物之靈。（尙書）

むべからず、誅をうくる事すみやかなり。奴從へりとて賴むべからず、背き走る事あり。人の志をも賴むべからず、必ず變ず。約をも賴むべからず、信ある事少なし。身をも人をも賴まざれば是なる時は喜び、非なる時は恨みず。左右廣ければ障らず、前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげ碎く。心の用ふる事すこしきにしてきびしき時は、物にさかひ争ひて破る。緩くして柔かなる時は一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地は限るところなし。人の性何ぞ異ならん。寛大にして窮らざる時は喜怒これに障らずして、物のためにわづらはず。（第二百十一段）

四一　萬のとがあらじと思はゞ

萬のとがあらじと思はゞ、何事にもまことありて、人をわかず恭しく詞すくなからんにはしかじ。男女老少、みなさる人こそよけれども、ことに若くかたちよき人の、ことうるはしきは忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづのとがは、なれたるさまに上手めき、所得たるけしきして、人をないがしろにするにあり。（第二百三十三段）

四二　人の物を問ひたるに

人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、ありの儘に云はんは、をこがましとにや、心まどはすやうにかへりごとしたる、よからぬ事なり。しりたる事も猶さだかにと思ひてや問ふらん。又まことに知らぬ人もなどかなからん。うらゝかに云ひ聞かせたらんは、おとなしく聞えな

まし。

人はいまだ聞き及ばぬ事を、我が知りたるまゝに、「さても其の人の事淺ましさ。」などばかり云ひやりたれば、いかなる事のあるにかと、おしかへし問ひにやるこそ心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞き洩らす事もあればおぼつかなからぬやうにつげやりたらん、あしかるべき事かは。かやうの事は、物なれぬ人のあることとなり。

(第二百三十四段)

四三　主ある家には

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくる事なし。あるじなき所には、道行く人みだりに立ち入る。狐・梟やうの物も、人げにせかれ

ねば、所えがほに入りすみ、こだまなどいふけしからぬ形もあらはるゝ物なり。

又鏡には色・形なき故に、よろづのかげ來りてうつる。かゞみに色・かたちあらましかばうつらざらまし。虚空よく物を容る。「我等の心に念々のほしきまゝに來り浮ぶも、心と云ふ物のなきにやあらん。心にぬしあらましかば胸のうちにそこばくの事は入り來らざらまし。

(第二百三十五段)

四四　八つになりし年

八つになりし年、父に問ひて曰く、「佛は如何なるものにか候ふらん。」と云ふ。父が曰く、「佛には人が成りたるなり。」と。又問ふ、「人は何として佛

八つになり　兼好八歳の時である。

父

治部少輔。卜部兼顯。

には成り候ふやらん」と。父また、佛の教に依りて成るなり」と答ふ。又問ふ「教へ候ひける佛をば何が教へ候ひける」と。また答ふ「夫も亦、前の佛の教に依りて成り給ふなり」と。また問ふ「其の教へ始め候ひける第一の佛は如何なる佛にか候ひける」と云ふ時、父「空よりや降りけん、土よりや湧きけん」と云ひて笑ふ。「問ひ詰められてえ答へずなり侍りつ」と諸人に語りて興じき。（第二百四十三段）

宇治拾遺物語

宇治拾遺物語十五巻は今昔物語卽ち宇治大納言物語の體裁に倣つて、作者が聞くがまゝ見るがまゝに、實事虚事取り交へて時代も追はず、順序も立てず、見聞に從つて筆錄したもので、書名は宇治大納言物語に漏れたものを拾ふといふ意であらう。作者は何人か明でないが、鎌倉時代の人であることは疑ない。

はしたなくて　はげしくて、どうにもならない程で。
とゞめきくる　わやわや騒ぎ立てゝ來る。
やう〳〵　さま〴〵に同じい。
たふさぎ　今の猿股のやうなもの。
ゐまはりぬ

一　鬼に瘤とらるゝ事

今はむかし、右の顔に大なるこぶある翁ありけり。大よそ山へ行きぬ。雨風はしたなくて、歸るにおよばで、山の中に心にもあらずとまりぬ。又木こりもなかりけり。恐ろしさすべきかたなし。木のうつぼのありけるにはひ入りて、目もあはずかゞまりてゐたるほどに、遙より人の音多くして、とゞめきくるおとす。いかにも山の中にたゞひとりゐたるに、人のけはひのしければ、すこしいき出づる心ちして見いだしければ、大かたやう〳〵さま〴〵なるものども、赤き色には青き物をき、黒き色には赤き物をきたふさぎにかき、大かた、目一つあるものあり、口なきものなど、大かたいかにもいふべきにあらぬものども、百人ばかりひしめき集りて、火を貂の目の如くにともして、我が居たるうつぼ木のまへにゐまはりぬ。大かたいとゞ物おぼえず。

廻りにならびゐた。
むねとある　重立つてゐる。主要である。
横座　上座。
うらうへ　左右。
人のする定なり　人のする通りである。
折敷　折板（へぎいた）で作つた角盆であつて食器を載せる具。
笑みこだれ　笑ひくづほれる。笑ひ興ずる。
かなで　舞をなすこと。
さもあれ

むねとあると見ゆる鬼横座にゐたり。うらうへに二ならびに居なみたる鬼、かずを知らず。そのすがたおの〳〵いひ盡しがたし。酒まゐらせ遊ぶありさま、この世の人のする定なり。たび〳〵かはらけ始まりて、むねとの鬼、ことの外にゑひたるさまなり。末より若き鬼一人立ちて、折敷をかざして、なにといふにか、くどき〳〵さることを言ひて、横座の鬼の前にねりいでてくどくめり。横座の鬼盃を左の手にもちて笑みこだれたるさま、たゞこの世の人のごとし。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。あしく舞ふもあり、よく舞ふもあり、あさましと見るほどに、この横座にゐたる鬼のいふやう、「こよひの御遊こそ、いつにもすぐれたれ。たゞし、さも珍らしからんかなでを見ばや」などいふに、此の翁物のつきたりけるにや、また神佛の思はせ給ひけるにや、「あはれ、はしり出でて舞はばや」と思ふを、一度は思ひかへしつ。それになにとなく鬼どもがうちあげたる拍子のよげに聞えければ、「さもあれ、たゞはしり

まゝよ。

よき　斧。

すぢりもぢり　身をさま／＼にねぢりくねること。

えいごゑ　えいと力を入れて發する聲。

あざみ　意外な事と驚くこと。こゝは感歎する事。

さた　知らせ。

をさめの手　秘藏の奥の手。

出でて舞ひてん。死なばさてありなん」と思ひとりて、木のうつぼより烏帽子は鼻に垂れかけたる翁の、腰によきといふ木きるものさして、横座の鬼のゐたる前にをどり出でたり。

此の鬼ども躍りあがりて、「こはなにぞ」とさわぎあへり。翁伸びあがりかゞまりて、舞ふべきかぎり、すぢりもぢり、えいごゑを出して一庭を走り廻り舞ふ。横座の鬼よりはじめて、集りゐたる鬼どもあざみ興ず。

横座の鬼のいはく、「多くの年ごろ此のあそびをしつれども、いまだかゝるものにこそあはざりつれ。今よりこの翁、かやうの御遊にかならず参れ」といふ。翁申すやう、「さたにおよび候はず参り候ふべし。このたび俄にてをさめの手も忘れ候ひにたり。かやうに御覧にかなひ候はば、しづかに仕うまつり候はん」といふ。横座の鬼、「いみじう申したり。必ずまゐるべきなり」といふ。

奥の座の三番目にゐたる鬼、「この翁はかくは申し候へども、まゐらぬ

いひさたす　評定する。

瘤は福の物　古諺、今も俗說にいふ。

すぢなき事　せんかたない事。

つや／＼　少しも。

事も候はんずらんとおぼえ候ふ。質をや取らるべく候ふらん」といふ。横座の鬼、「しかるべし、しかるべし」といひて、「何をか取るべき」とおの／＼いひさたするに、横座の鬼のいふやう、「かの翁がつらにある瘤をや取るべき。瘤は福の物なれば、それをや惜しと思ふらん」といふに、翁がいふやう、「たゞ目鼻をばめすとも、此の瘤はゆるしたまはり候はん。とし比持ちて候ふものを故なくめされ、すぢなき事に候ひなん」といへば、横座の鬼、「かう惜み申す物なり。たゞそれを取るべし」といへば、鬼寄りて、「さは取るぞ」とてねぢて引くに、大かたいたき事なし。さて、「かならずこのたびの御あそびにまゐるべし」とて暁に鳥などなきぬれば、鬼どもかへりぬ。

翁顔をさぐるに、年ごろありし瘤あとかたなく、搔い拭ひたるやうにつや／＼なかりければ、木こらん事も忘れて家にかへりぬ。妻のうば、「こはいかなりつる事ぞ」と問へば、しか／＼とかたる。「あさましき事か

な。」といふ。となりにある翁、左のかほに大なる瘤ありけるが、この翁瘤のうせたるを見て、「こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ。いづこなる醫師のとり申したるぞ。我に傳へ給へ。この瘤とらん。」といひければ、「これはくすしの取りたるにもあらず、しか／＼の事ありて鬼のとりたるなり。」といひければ「われその定にしてとらん。」とて、事の次第をこまかに問ひければ敎へつ。この翁いふまゝにして、その木のうつぼに入りて待ちければ、まことに聞くやうにして鬼どもいできたり。ゐまはりて酒のみあそびて、「いづら、翁は參りたるか。」といひければ、この翁おそろしと思ひながらゆるぎ出でたれば、鬼ども、「こゝに翁參りてさふらふ。」と申せば、横座の鬼、「こちまゐれ。とく舞へ。」といへば、さきの翁よりは天骨もなくおろ／＼かなでたりければ、横座の鬼、「このたびはわろく舞ひたり。かへす／＼わろし。その取りたりし質のこぶかへしたべ。」といひければ、末つ方より鬼出で來て、「質の瘤返したぶぞ。」とて、いま片方の顔に投げつけたりければ、うらうへに瘤つきたる翁にこそなりたりけれ。ものうらやみは爲まじき事なりとか。（卷一）

天骨もなく　無骨の意。天骨言二天性之有一骨格一也。（下學集）
おろ／＼　不十分ながら。
返したぶぞ　返し給ふぞの意。

二　鼻長き僧の事

昔池の尾に禪珍内供といふ僧住みけり。眞言などよく習ひて、年久しく行ひて尊かりければ、世の人々樣々の祈をせさせければ、身の德ゆたかにて、堂も僧坊も少しも荒れたる所なし。佛供・御燈なども絶えず、折節の僧膳、寺の講演しげく行はせければ、寺中の僧坊に隙なく僧も住み賑ひけり。浴室には湯沸さぬ日なく浴み罵りけり。又そのあたりには、小家ども多く出で來て、里も賑ひけり。

さてこの内供は、鼻長かりけり五六寸許なりければ、腮よりさがり

池の尾　山城國宇治郡にあつた。
内供　古昔、宮中の内道場に供奉した僧侶。
行ひて　修行して。
德　富。福德。
佛供　佛にさゝげるそなへ物。
僧膳　僧侶に饗應す

る膳部。
提 鉉のある鍋に似てやゝ小形の金屬製の具、液體を容れ又煖めるに用ひる。
かへらかして 煮立てゝ。
ゑりとほして くり拔いて。
火の炎 湯の熱氣。
そばざまに臥せ 横に寢させて。
さらめかし さら〳〵と音を立たせて。
唯人 普通の人。

てぞ見えける。色は赤紫にて、大柑子の膚のやうに粒立ちてふくれたり。痒がること限なし。提に湯をかへらかして、折敷を鼻さし入るばかりゑりとほして、火の炎の顔に當らぬやうにして、その折敷の穴より鼻をさし出でて、提の湯にさし入れて、よくゆでて引上げたれば、色は濃き紫色なり。それを側ざまに臥せ、下に物をあてて人に踏ますれば、粒立ちたる穴毎に煙のやうなる物出づ。それをいたく踏めば、白き蟲の穴毎にさし出づるを、毛拔にて拔けば、四分許なる白き蟲を、穴毎に取出す。その跡は穴だにあきて見ゆ。それを又同じ湯に入れて、さらめかし沸すに、ゆづれば鼻小さく凋みあがりて、唯人の鼻のやうになりぬ。又二三日になれば前の如くに膨れて大きになりぬ。

かくの如くしつゝ、膨れたる日數は多くありければ、物喰ひける時は、弟子の法師に、平なる板の一尺許なるが、廣さ一寸許なるを鼻の下にさし入れて、對ひゐて、上ざまへもてあげさせて物喰ひはつるまではあり

それに ところが、ある時。
心地云々 弟子の法師が病氣で、出て來なかつた時に。
その御房 いつもの鼻持上の弟子僧。
みめ 容貌。
うるはしく きちんと。
よき程 ちやうどよい加減に。
鼻をひんとて くしやみをしようとして。
ゆるぎて ぐらついて。
ひともの いつぱい。やたらに。

けり。他人してもて上げさする折は、荒くもて上げければ、腹を立てて物も喰はず。さればこの法師一人を定めて、物喰ふたびごとに持て上げさす。それに心地惡しくて、この法師出でざりける折は、朝粥喰はんとするに、鼻を持て上ぐる人なかりければ、「いかにせん。」なんどいふ程に、使ひける童、「よく持て上げ參らせてん。更にその御房にはよも劣らじ。」といふを、弟子の法師聞きて、「この童のかくは申す。」といへば、中大童子にて、みめも穢げなくありければ、上に召し上げてありけるに、この童鼻持上の木を取りて、うるはしく對ひ居て、よき程に高からず低からずもたげて、粥をすゝらすれば、この內供、「いみじき上手にてありけり。例の法師には優りたり。」とて粥をすゝる程に、この童鼻をひんとて、側樣に向きて鼻をひるほどに、手震ひて、鼻持上の木ゆるぎて、鼻外れて粥の中へふたりとうち入れつ。內供が顔にも、童の顔にも、粥とばしりてひとものかゝりぬ。內供大に腹立ちて、頭、顔にかゝりたる粥を紙にて拭ひつゝ、「おの

れはまが〳〵しかりける心持ちたる者かな、心なしの乞兒とはおのれがやうなる者をいふぞかし。我ならぬやごつなき人の御鼻にもこそまゐれ、それにはかくやはせんずる、うたてなりける心なしの癡者かな、おのれ立て立て。」とて追ひてければ、立つまゝに「世の人のかゝる鼻持ちたるがおはしまさばこそ、鼻持上にも參らめ、をこの事宣へる御房かな。」といひければ、弟子ども物の後に逃げ退きてぞ笑ひける。（卷二）

三 袴垂保昌に逢ふ事

昔、袴垂とて、いみじき盜人の大將軍ありけり。十月ばかりに、衣の用ありければ、衣少しまうけんとて、さるべき所々窺ひありきけるに、夜中ばかりに、人皆しづまりはてて後、月のおぼろなるに、衣あまた著たりけ

まが〳〵し云々　ねぢけた心を持つた奴だな。
心なしのかたゐ　阿呆の畜生。かたゐは乞食のことであるが、こゝはただ罵る詞。
やごつなきやんごとなき人。貴人。
御鼻にも云々　御鼻を持ち上げにも參らうが、その時にもかうする積りか。
うたてなりける　あまりにひどい。まるでお話にならぬ。
しれもの　馬鹿者。
をこ　馬鹿。

る主のそばはさみて、絹の狩衣めきたる著て、唯一人笛吹きて行きもやらずねり行けば、「あはれ、これこそ、我に衣得させむとて出でたる人なめれ。」と思ひて、走りかゝりて衣を剝がむと思ふに、あやしく物のおそろしく覺えければ、添ひて二三町ばかり行けども、我に人こそ附きたれと思ひたる氣色もなし。いよ〳〵笛を吹きて行けば、試みんと思ひて、足音を高くして走り寄りたるに、笛吹きながら見かへりたる氣色、取りかゝるべくも覺えざりければ、走りのきぬ。かやうに、數多度、とさまかうさまにするに、露ばかりも騷ぎたる氣色なし。希有の人かなと思ひて、十餘町ばかり具して行く。さりとてあらむやはと思ひて、刀を拔きて走りかゝりたる時に、そのたび笛を吹き止みて、立ちかへりて、「こは何者ぞ。」と問ふに、心も失せて、我にもあらでついゐられぬ。又「いかなる者ぞ。」と問へば、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、「引剝にさぶらふ。」といへば、「何者ぞ。」と問へば、「字袴垂となんいはれさぶらふ。」と答ふれば、「さ

主　人の尊稱、殿とか君といふ位の稱。
指貫　裾を括つてはくやうにした一種の袴。衣冠、直衣、狩衣などに着用する。
そばはさみ　股立をとつてはさみ。
あやしく云々　變に、物恐しく思はれたので。
人こそ附きたれ　人があとをつけてくる。
とさまかうさまにする　いろ〳〵やつてみるが。
希有の人　珍しい人。妙な人。
あらむやは

いふ者ありと聞くぞ。「危ふげに、希有のやつかな。」といひて、「共にまうでこ。」とばかりいひかけて、又同じやうに笛吹きて行く。この人の氣色、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、鬼に肝取られたるやうにて、共に行くほどに、家に行きつきぬ。いづこぞと思へば、攝津前司保昌といふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚き衣一つを賜はりて、「衣の用あらん時は參りて申せ。心も知らざらん人に取りかゝりて、汝あやまちすな。」とありしこそ、あさましく、むくつけく、恐しかりしか。いみじかりし人の有樣なりと、捕へられて後かたりける。（卷二）

四　繪佛師良秀家の燒くるを見て悅ぶ事

今は昔、繪佛師良秀（よしひで）といふありけり。家の隣より火出で來て、風おし

このまゝですまされようか。
ついゐられぬ　ついゐるは、かしこまる、つくばふ。こゝは思はず立ちすくまれたこと。
字　こゝは綽名（あだな）に同じい。
共にまうでこ　一緒について來い。
保昌　藤原保昌は腕力のすぐれた武藝に達した膽勇の人であつた。後一條天皇の長元九（一六九六）年卒。
むくつけく　氣味わるく。

おほひて責めければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり。人のかかする佛もおはしけり。また衣、絹、妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、たゞ逃げ出でたるをことにして、向ひのつらに立てり。見ればすでに我家にうつりて、烟炎（けぶりほのほ）くゆりけるまで、大方向ひのつらに立ちて眺めければ、あさましきことゝて、人ども來とぶらひけれど、騷がず。「いかに。」と人いひければ、向ひに立ちて、家の燒くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり。「あはれしつるせうとくかな。年頃はわろくかきけるものかな。」といふ時に、とぶらひに來たる者ども、「こはいかにかくては立ち給へるぞ。あさましきことかな。物のつき給へるか。」といひければ、「なんでふ物のつくべきぞ。年ごろ不動尊の火焔（くわえん）を惡しくかきけるなり。今見ればかうこそ燃えけれと心得つるなり。これこそせうとくよ。この道を立てて世にあらんには、佛だによくかき奉らば、百千の家も出できなん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜み給

風おしおほひて　風があたりを掩うて吹きかけて。
人の書かする佛　人から書いてくれと頼まれた佛畫。
さながら　取り出さずにそのまゝ。
逃げ出でたる云々　逃げ出して來たのをよい事にして。
向ひのつら　向側。
くゆる　くすぼる。
あさましきこと　あきれたこと。
あはれしつる云々　あゝうまい獲物をしたわい。せうとくは、所得で、この

へ。」といひて、あざわらひてこそ立てりけれ。その後にや、良秀がよぢり不動とて、今に人々めでてあへり。（巻三）

五　雀恩を報ゆる事

今は昔、春つ方、日うら〻かなりけるに、六十ばかりの女のありけるが、蟲うち取りて居たりけるに、庭に雀のしありきけるを、わらはべ石を取りて打ちたれば、あたりて腰をうち折られにけり。羽をふためかして惑ふ程に、烏のかけりありきければ、あな心う、烏取りてむとて、この女、いそぎ取りて、息しかけなどして、物食はす。小桶に入れて、夜はをさむ。明くれば米食はせ、銅、藥にこそげて食はせなどすれば、子ども孫ども、「あはれ女刀自は、老いて雀飼はる〻。」とて、惡み笑ふ。かくて月頃よく食へば、やう〳〵躍りありく。雀の心にも、かく養ひ生けたるを、いみじく嬉しと思ひけり。あからさまに物へいくとても、人に、「この雀見よ。物食はせよ。」などいひ置きければ、子孫など、「あはれ、なんでふ雀飼はる〻。」とて、惡み笑へども、「さばれ、いとほしければ。」とて飼ふ程に、飛ぶ程になりにけり。今はよも烏に取られじとて、外に出でて、手に据ゑて、飛びやする、見んとて、捧げたれば、ふら〳〵と飛びていぬ。女多くの月頃日頃、暮るればをさめ、明くれば物食はせて習ひて、「あはれや飛びていぬるよ。又來やすると見ん。」など、つれ〴〵に思ひていひければ、人に笑はれけり。さて二十日ばかりありて、この女の居たる方に、雀のいたく鳴く聲しければ、雀こそ痛く鳴くなれ、ありし雀の來るにやあらんと思ひて、出でて見れば、この雀なり。「あはれに忘れず來たるこそあはれなれ。」といふ程に、女の顔をうち見て、口より露ばかりの物を落し置くやうにして、飛びて

炎の實物を見て筆法を悟つたからいふ。
しつるは所得をしつるで、獲たといふほどの意。
物　物の性、怨靈、邪鬼の類。
なんでふ云々　なんで物の怪などのつくはずがあらうか。
わたうたち　和黨達、汝等の意。
よぢり不動　火炎がよぢれもぢれて眞に迫つてゐたからの稱。
蟲　虱などであらう。
しありく　歩きまはる。今も方言にしやるくといふ。
ふためかして　ハタ〳〵やつて。

息しかけ　息を吹きかけ。
銅云々　銅を削りおろして藥にして。
女刀自　おッかさん。刀自は戸主の義で、多く女の家事を主るほどのものをいふ。
あからさまに　つひちよつと。
見よ　氣をつけよ。
さばれ　さらかといつて。
習ひて　飼ひならして。
ありし雀　あの雀。
露ばかりの物を

ポロリと露ほど物を。
やう　わけ。
物得て　物をもらつて。
さばれ　ともかくも。
なべての　世間並の。
里隣　近所。
瓠　水などくむ器。
つりつけて　ぶらさげて。
ひとはた　一つぱい。
あさまし　驚いたことだ
あさましく嬉しければ　びつくりするほどうれしいので。

いぬ。女「何にかあらむ、雀の落していぬる物は。」とて、寄りて見れば、瓠の種を唯一つ落して置きたり。持て來たるやうこそあらめとて、取りて持ちたり。あないみじ、雀の物得て寶にて給ふ。」とて、子ども笑へば、「さばれ、植ゑて見ん。」とて植ゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多く生ひ廣ごりて、なべての瓠にも似ず、大に多くなりたり。女よろこび興じて、里隣の人にも食はせ、取れども〳〵、盡きもせず多かり。笑ひし子孫も、これを明暮食ひてあり。一里配りなどしてはてには、誠に勝れて大なる七つ八つは瓠にせんと思ひて、内につりつけて置きたり。さて月頃へて、今はよく成りぬらんとて見れば、よくなりにけり。取りおろして口あけんとするに、少し重し。怪しけれども、切りあけて見れば、物ひとはた入りたり。何にかあるらんとて、移して見れば、白米の入りたるなり。思ひかけずあさましと思ひて、大なる物に皆を移したるに、同じやうに入りてあれば、たゞ事にはあらざりけり。雀のしたるにこそと、あさましく嬉しければ、物に入れて隱し置きて、殘りの瓠どもを見れば、同じやうに入りてあり。これを移し〳〵つかへばせん方なく多かり。さて誠にたのもしき人になりにける。隣里の人も見あさみ、いみじき事に羨みけり。この隣にありける女の子どものいふやう、「同じごとなれど、人はかくこそあれ。はか〴〵しき事も、えし出で給はぬ」などいはれて、隣の女、この女房の許に來りて、「さても〳〵、こは如何なりしことぞ。雀のなどはほの聞けど、よくはえ知らねば、もとありけんまゝにの給へ。」といへば、「瓠の種を一つ落したりし、植ゑたりしよりある事なり。」とて、こまかにもいはぬを、「猶ありのまゝにこまかにの給へ。」と、切に問へば、心せばく隱すべき事かはと思ひて、「かう〳〵、腰折れたる雀のありしを、飼ひ生けたりしを、嬉しと思ひけるにや、その種、唯一つ持ちて來りしを植ゑたれば、かくなりたるなり。」といへば、「その種、唯一つたべ。」といへば、「それに入りたる米などは參らせん。種はあるべき事にもあらず、更にえなん

たのもしき人　富裕な人。
あさむ　おどろきあきれる。
同じごとなれご云々　うちのおッかさんは隣の媼さんと同じやうな媼さんだが。
人はかくこそあれ　隣の媼さんはあんなよい事をなさつたのに。
雀のなどは云々　雀の報いなどとはほのかに聞いてゐますが。
落したりし

おとしたのを。
かう〳〵　かう〳〵いふ。
たべ　下さい。
いかで　どうかして。
目を立て　氣をつけて。
つとめて　早朝。
おのづから　どうかした拍子に。
一つが徳をだにこそ云々　一匹の雀でさへあんなに果報があつたのに。
今はかばかり云々　もうこの位でよからう。
世にねたし　まことにくや

散らすまじ。」とて取らせねば、我もいかで腰折れたらん雀見つけて飼はんと思ひて、目を立てて見れど、腰折れたる雀さらに見えず。つとめてごとに伺ひ見れば、せどの方に米の散りたるを食ふとて、雀の躍りありくを、石を取りて、もしやとて打てば、數多の中に度々打てば、おのづから打ち當てられて、え飛ばぬあり。喜びて寄りて、腰よくうち折りて後に、取りて物食はせ、藥食はせなどして置きたり。一つが徳をだにこそ見れ、まして數多ならば、いかに頼もしからん、あの隣の女には優りて、子どもに譽められんと思ひて、籠のうちに米まきて伺ひ居たれば、雀も集りて食ひに來たれば、又打ち〳〵しければ、三つ打ち折りぬ。今はかばかりにてありなんと思ひて、腰折れたる雀三つばかり桶に取り入れて、銅こそげて食はせなどして、月頃經るほどに、皆よくなりにたれば、喜びて外に取り出でたれば、ふら〳〵と飛びて、皆いぬ。いみじきわざしつと思ふ。雀は腰うち折られて、かく月頃籠め置きたるを、世にねたしと思

しい。
さればよ　それみたことか。
ゑみまけて　ホク〳〵して。
さも　いかにもさうだ。
おほらかにて　大勢で。
きはだ　黄蘗はその黄色な樹皮（内皮）の極めて

ひけり。さて十日ばかりありて、この雀ども來たれば、喜びて、まづ口に物やくはへたると見るに、瓢の種一つづゝ、皆落していぬ。さればよと嬉しくて、取りて三所に植ゑてけり。例よりもする〳〵と生ひ立ちて、いみじく大になりたり。これはいと多くもならず、七つ八つぞなりたる。女ゑみまけて見て、子どもにいふやう、「はか〳〵しき事しいでずといひしかど、我は隣の女には優りなん」といへば、げにさもありなんと思ひたり。これは數の少ければ、米多く取らむとて、人にも食はせず我も食はず。子どもがいふやう、「隣の女房は、里隣の人にも食はせ、我も食ひなどこそせしか。これはまして三つが種なり。我も人にも食はせらるべきなり。」といへば、さもと思ひて、近き隣の人にも食はせ、我も子どもにも諸共に食はせんとて、おほらかにて食ふに、苦きこと物にも似ず、きはだなどのやうにて、心地まどふ。食ひと食ひたる人々も、子どもも我も、物をつきて惑ふほどに、隣の人どもも皆心地を損じて、來集りて、こは

にがい　喬木。
つく　吐く。
烟　湯氣。
つき惑ひ　吐きちらし。
せためん　責めよう。
怪しかりけるなめり　變なことが起つたのだらう。
入れん料の　入れる爲の。
具して　とりそろへて。
くちなは　蛇。
そこら　澤山。

いかなる物を食はせつるぞ、あなおそろし、露ばかり烟の口に寄りたる者も、物のつき惑ひあひて、死ぬべくこそあれと腹立ちて、いひせめんと思ひて來たれば、ぬしの女をはじめて、子どもも皆物覺えず、つき散らしてふせりあひたり。いふかひなくて、共に歸りぬ。二三日も過ぎぬれば、誰々も心地なほりにけり。女思ふやう、皆米にならんとしけるものを急ぎて食ひたれば、かく怪しかりけるなめりと思ひて、殘りをば皆つりつけて置きたり。さて月頃へて、今はよくなりぬらんとて、移し入れん料の桶ども具して、部屋に入る。嬉しければ、齒もなき口して、耳のもとまで獨ゑみして、桶を寄せて移しければ、虻・蜂・蜈蚣・蝘蜓、くちなはなど出でて目鼻ともいはず、一身に取りつきて刺せども、女痛さも覺えず、たゞ米のこぼれかゝるぞと思ひて、「暫し待ち給へ、雀よ、少しづゝ取らむ。」といふ。七つ八つの瓢より、そこらの毒蟲ども出でて、子どもをも刺しくひ、女をば刺し殺してけり。雀の、腰をうち折られて、ねたしと思ひて、よ

とりぬべかりしを　捕りさうであつたのを。
はかなきこと　ちよつとしたこと。
所の　所の人々が。
金海　慶尙南道の東南部にある。
國府　國の政廳。

ろづの蟲どもを語らひて、入れたりけるなり。隣の雀は、もと腰折れて、鳥の命とりぬべかりしを養ひ生けたれば、うれしと思ひけるなり。さればもの羨みはすまじきことなり。（卷三）

六　宗行の郎等虎を射る事

今は昔、壹岐守宗行が郎等を、はかなき事によりて、主の殺さんとしければ、小舟に乘りて逃げて、新羅國へ渡りて隱れて居たりける程に、新羅の金海といふ所の、いみじうののしりさわぐ。「何事ぞ。」と問へば、「虎の國府に入りて、人をくらふなり。」といふ。この男問ふ、「虎はいくつばかりあるぞ。」と。「唯一つあるが、俄に出で來て、人をくらひて逃げていきいきするなり。」といふを聞きて、この男のいふやう、「あの虎に逢ひて、一矢を射て

かしこくば　勢が强かったら。
兵の道云々　闘の仕方がいけないのだらう。
かしこき事かな　えらいもんだなあ。
まことにや、　申すなるは、まことにやと置きかへて見よ。
おぼろげにて　罷り逢はぬにかかる。容易な事では。
なじかは　どうして……あらうか、ありはしない。
射取り侍りなむ　うち取ってしまひませう。
よろこび　謝禮。
食はんとては　食はうとする場合には。
ひれふして　平くつくばって。
さばれ　さもあらばあれ。どうでもよい。
おのれ　(私)は。
そなた　そちらの方。

死なばや。虎かしこくば、共にこそ死なめ、たゞ空しうはいかでか食はれん。この國の人は、兵の道わるきにこそあめれ。」といひけるを、人聞きて、國の守に、「かう〳〵の事をこそ、この日本人申せ。」といひければ「かしこき事かな。呼べ。」といへば、人來て、「召しあり。」といへば参りぬ。「まことにや、この虎の人食ふを、易く射んとは申すなる。」と問はれければ「しか申し候ひぬ。」と答ふ。守、「いかでかゝる事をば申すぞ。」と問へば、この男の申すやう、「この國の人は、我が身をばまたくして敵をば害せんと思ひたれば、おぼろげにて、かやうの猛きけだものなどには、我身の損ぜられぬべければ、罷り逢はぬにこそ候ふめれ。日本の人は、いかにも我が身をばなきになして罷り逢へば、よき事も候ふめり。弓矢にたづさはらんもの、なじかは我が身を思はん事は候はん。」と申しければ、守、「さて虎をば必ず射殺してんや。」といひければ「我身の生き生かずは知らず、必ずかれをば射取り侍りなん。」と申せば、「いみじうかしこき事かな。さらば必ずかまへて射よ。いみじきよろこびせん。」といへば、男申すやう、「さてもいづくに候ふぞ。人をばいかやうにて食ひ侍るぞ。」と申せば、守のいはく、「如何なる折にかあるらん、國府の中に入り來て、人一人を、頭を食ひて肩にうちかけて去るなり。」と。この男申すやう、「さても如何にしてか食ひ候ふ。」と問へば、人のいふやう、「虎はまづ人を食はんとては、猫の鼠を窺ふやうにひれふして、暫しばかりありて、大口をあきて飛びかゝり、頭を食ひて肩にうち掛けて走り去る。」といふ。「とてもかくても、さばれ、一矢射てこそは食はれ侍らめ。その虎の在り所を教へよ。」といへば、「これより西に三十四町のきて、麻の畠あり。それになん臥すなる。人おぢて、あへて、そのわたりに行かず。」といふ。「おのれ唯知り侍らずとも、そなたをさして罷らん。」といひて、調度負ひていぬ。新羅の人々、「日本の人ははかなし。虎に食はれなん。」と、集りて誹りけり。かくてこの男は、虎の在り所問ひ聞きて、行きて見れば誠に麻の畠はる〴〵と生ひわたりたり。麻

はげて　つがへて。
ついひらがる　平くつくばふ。
あがく　足掻く。足をヂタバタさせる。
雁股　蛙が股を開いたやうな形の鏃。
みながら　みんな。
その庭に　その場に。

のたけ四尺ばかりなり。その中を分け行きて見れば、誠に虎ふしたり。尖り矢をはげて、片膝を立てて居たり。虎人の香を嗅ぎて、ついひらがりて、猫の鼠うかゞふやうにてあるを、男矢をはげて、音もせで居たれば、虎大口をあきて、躍りて男の上にかゝるを、男弓を強く引きて、上にかゝる折に、やがて矢を放ちたれば、おとがひの下よりうなじに、七八寸ばかり尖り矢を射出しつ。虎さかさまに伏して仆れてあがくを、雁股をつがひ、二たび腹を射る。二度ながら土に射つけて、遂に殺して、矢をも抜かで國府に歸りて、守に、かう〳〵射殺しつるよしいふに、守感じのゝしりて、多くの人を具して、虎の許へ行きて見れば、誠に箭みながら射通されたり。見るにいといみじ。誠に百千の虎起りてかゝるとも、日本の人十人ばかり、馬にて押し向ひて射ば、虎何わざをかせん。この國の人は、一尺ばかりの矢に、錐のやうなる鏃をすげて、それに毒を塗りて射れば、遂にはその毒の故に死ぬれども、忽にその庭に射伏することはえせ

おもておこしたる者　名譽を揚げた者。
祿　褒美。

ず。日本の人は、わが命死なんをもつゆ惜まず、大なる矢にて射れば、その庭に射殺しつ。なほ兵の道は、日本の人には當るべくもあらず。さればいよ〳〵いみじう恐しく覺ゆる國なりとておぢけり。さてこの男をば、なほ惜みとゞめていたはりけれど、妻子を戀ひて、筑紫に歸りて、宗行が許に行きて、その由を語りければ、日本のおもておこしたる者なりとて、勘當も免してけり。多くの物ども祿に得たりけるを、宗行にも取らす。多くの商人ども、新羅の人のいふを聞きて語りければ、筑紫にも、この國の人の兵は、いみじきものにぞしけるとか。（卷十二）

十訓抄

十訓抄(三卷)の著者に就いては古來橘成季・菅原爲時・六波羅二﨟左衞門等の諸說があつて判明しないが、その出來たのは自序に言ふやうに建久四年で北條時賴の時代である。此の書は書名の示す通り著者が見聞した所から、十目を立てゝ敎訓となるべきものを集錄したもので我邦最初の敎訓書である。

品を別たず　身分に拘らず。
賢なるは云々　「智者千慮必有二一失一、愚者千慮必有二一得一」（史記、淮陰侯傳）
しかるに　それについて。
二つの跡　賢愚兩者の事蹟。
心をつくる便　注意の材料。
三餘の窓　冬者歳之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘。（魏略）學びの窓の意。
となり　といふ目的である。
和字を先として云々　假名文を主として書き必ずしも文の冗長になるを意としない。

一　序

それ世の中にある人、事業しげきふるまひにつけて、貴き賤しき品を別たず、賢なるは得多く、愚なるは失多し。しかるに今何となく聞き見るところの、昔今の物語を種として、よろづの言の葉の中より、いさゝかその二つの跡を取りて、善き方をば之をすゝめ、悪しきすぢをば之を誡めつゝ、未だ此の道を學び知らざらん少年の輩をして、心をつくる便となさしめんが爲に、試みに十段の篇を分かちて十訓抄と名づく。すなはち三巻の文として、三餘の窓に置かんとなり。その詞、和字を先として必ずしも筆の費えを鑑みず、見る者の目安からんことを思ふ故なり。その例、漢家をついでとして、博く文の道を訪はず、聞く者の耳近からんことを思ふ故なり。すべて之をいふに、空しきことばを飾らず、たゞ實の例を集む。道の傍の碑の文をば冀はざる心なり。

漢家をついでとして　支那の例を補助の役として。
博く文の道云々　ひろく群書を探り索めない。
道の傍の云々　道ばたの碑文に見るやうな過褒の文を弄したくない。
秋の螢の云々　十分に學問を修めてゐないから、詩文の才に乏しい。
春の鶯の云々　音曲を學ばないから管絃の道にも暗い。
あまたの露霜　多くの年月。
梓弓　引くにかけた枕詞。
ならし　なるらし。なりといふ位のところをかくいふは當時における一種の語法。

但し拙き身を顧みるに、秋の螢の光を聚めずして、風月の望に暗く、春の鶯の囀を學ばざれば、絲竹の曲にうとし。藝なく能かけたり。なす事なくして、徒にあまたの露霜を送るばかりなり。かゝるにつけては、藻壚草かき誤れる言の葉も數つもり、梓弓引きみん人の嘲も外れ難く覺えながら、志のゆく所、たゞにはいかゞやまんとならし。

口とく
口疾くの義。
短
短所。
思ひも云々
氣にもとめぬ。
笑の中の劍
笑の中の刀ともいふ。外貌柔和で内に害心のあることに譬へていふ諺。
さらでだに
さらでなくてさへ。
難ず
非難する。
心をおく
打ち解けず隔てをおく。憚る。

二　可誡人上多言等事

或人いはく、人は慮なく、言ふまじき事を口とく言ひ出し、人の短を誹り、したる事を難じ、隠す事を顯し、恥がましき事をたゞす。是等はすべてあるまじきわざなり。我は何となく言ひ散らして、思ひもいれぬ程に、言はるゝ人は思ひ詰めて、憤深くなりぬれば圖らざるに恥をも與へられ、身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑の中の劍は、さらでだにも恐るべき物ぞかし。又よくも心得ぬ事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺顯るゝものなり。大方口輕き者になりぬれば、「某に其の事な聞かせそ。彼の者にな見せそ」などいひて、人に心をおかれ隔てらるゝ。口惜しかるべし。又人のつゝむ事の、おのづから洩れ聞えたるにつけても、かれ話されしなど疑はれんは面目なかるべし。然れば、旁、人の上を愼み、多言を止むべきなり。

花園大臣
源有仁。白河帝の皇孫で、左大臣となる。
名簿
名札。
南殿
寢殿。
下格子云々
格子を下しに參れと近侍を呼んだのである。
藏人五位
五位藏人、藏人大夫ともいふ。六位の藏人が五位に敍せられて地下になつた人。
たがひて
その場に居合せなかつたのをいふ。
まゐりたるに
格子を下し申してゐたのにの意。
おろしさして
おろすのを中

能は歌よみ

花園大臣の御許に、始めて參りたる侍の、名簿のはし書に、「能は歌よみ。」と書きたりけり。秋の初に南殿に出でて、はたおりの鳴くを愛しておはしましけるに暮れければ、「下格子に人參れ。」と仰せられけるに、「藏人五位たがひて、人も候はぬ。」と申して、此の侍の參りたるを、「唯おのれおろせ。」とありければ、まゐりたるに、「汝は歌よみとな。」とありければ畏まりて格子をおろしさして候ふに、「このはたおりをば聞くや。一首つかうまつれ。」と仰せられければ、「青柳の」と五文字をいだしたるを、候ひける女房たち、折にあはずと思ひたりげにて笑ひ出でたりけるを、「物を聞き果てで笑ふやうやはある。」と仰せられて、「とく仕うまつれ。」と仰せられければ、

　青柳のみどりの糸をくりかへし、夏へて秋ぞはたおりはなく。

と詠みたりければ萩おりたる直垂を押出して賜はせてけり。

途で止めて。

思ひたりげにて　思つてゐる樣子で。

夏へて　夏經てと糸を綜へるとをかけてある。

萩おりたる直垂　萩の模樣を織り出した直垂。

寛平　宇多天皇の御字の年號。

友則　紀友則。古今集撰者の一人。

左方・右方　歌合の時には歌人を左右に分ける。

ひたさわぎ　一途にさわぐこと。

寛平歌合に、初雁を友則

　春霞かすみていにしかりがねの、今ぞなくなる秋霧の上に。

と詠める、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人々盡く笑ひけり。さて次の句に「霞みて去にし」と云ひけるにこそ、音もせずなりにけれ。」物を聞きも果てず、ひたさわぎに笑ふことあるまじき事なり。又さやうに思ひがけぬことも詠むまじきにや。また人ありてまことの誤をしたりとも、我がためくるしみのなからんに、強ちに難じそしりても何かせん。（上巻）

道々の家　その道その道專門の家。

さる事なり　勿論のことである。

程々につけて　身分相應に。

氏をうけたる者　才能藝業を世職とする者。菅江兩家の文章道・三善氏の算道・安倍氏の陰陽道等の如きをいふ。

けぢめ　差別。

われどち　我々仲間同士。

雲泥の心地　天地の差があるやうな心地。

思ひけたる　壓倒される。

さめたれども

三　可庶幾才能藝業事

或人いはく、本より其の道々の家に生れぬるはさる事なり。さなき類も程々につけて、能は必ずあるべきなり。中にも氏をうけたる者藝おろそかにして氏をつがぬ類あり。道にあらざる類能によりて道に至る徳もあれば、氏をつがんがため、道に至らんが爲に、彼も是もともに勵むべし。何となくゐまじりたる折は、そのけぢめ見えざれども、藝能につけて召出され、たゞうちあるわれどちのあそびにも、かたへにぬけいでて何事をもしたらんは、雲泥の心地して、人目いみじく覺えぬべし。すべて、みめよく品高けれども、あやしく賤しきが能あるに立ちならぶ折は、その品そのみめも、必ず思ひけたるゝものなり。たとへば、花のあたりの常磐木は、うちみるに、たとへなくさめたれども、春の日かずくれ、峯の嵐過ぎたる後に、緑ばかり殘りてかりのにほひ留まらざるが如し。

見映えがしてゐないけれども。
かりのにほひ　かりそめの花の句。
藍より云々　青取二之於藍一、而青二於藍一。(荀子)
箕裘の業　父祖の舊業。
能因入道　俗名永愷。遠江守橘忠貞の子で、肥後守となつたが後薙髮した。
實綱　日野三位資成の子。
三島　伊豫國越智郡大三島宮浦に

されば、桃李は一旦の榮華なり、松樹は千年の貞木なり。」といへり。いみじくありて身の能なきが、一人あるを見るだに、能あるを思ひ出づるならひなり。況や能にならぶ折のけぢめをや。いかに況や同じ様なるが、一人は能ありて一人はなきをや。中にも世の中のかはり行くさま、昔よりは次第に衰へもて行くに付けつゝ、道々の才藝も亦父祖には及びがたき習なれば、藍よりも青からん事はまことに稀なりといへども、形の如くなりとも箕裘の業を繼がざらむ、口惜しかりぬべし。

能因入道

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて、かの國に下りたるに、夏の初、日久しく照りて民の歎淺からざりけるに、神は和歌にめで給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべきよしを國司頻りにすゝめければ、

天の河苗代水にせきくだせ、
　あまくだります神ならば神。

あつて、大山祇神を祭る宮。
みてぐら　幣のこと。
貞觀のみかど　唐の太宗皇帝。
すきもの　風流人。
樂人　伶人卽ち音樂を奏する人。
弓矢の行方　弓矢の使用の方法。

と詠みて、みてぐらに書きて、社司して申しあげさせたりければ、炎旱の天俄に曇りわたりて、大いなる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりけり。忽ちに天災を和ぐる事、唐の貞觀のみかどの蝗をのめりし政にも劣らざりけり。能因は至れるすきものなり。

都をば霞とともに立ちしかど、
　秋かせぞふく白川の關。

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さむ、無念と思ひて、人にも知られず久しく籠りゐて、色を黒く日にあぶりなして後、陸奥の方へ修行のついでによみたりとぞ披露しける。

管絃の德

和邇部の用光といふ樂人ありけり。土佐の御舟あそびに下りて、上りけるに、安藝の國なにがしの泊にて、海賊押寄せたり。弓矢の行方しらねば、防ぎ戰ふに力なくて、今は疑なく殺されなんずと思ひて、篳篥を

取りいだして、屋形の上にゐて、「あの黨や、今はさたに及ばず、とく何物をも取りたまへ。但し年頃思ひしめたる、篳篥の小調子といふ曲吹きて聞かせ申さむ。さる事こそありしかと、後の物語にもし給へ。」といひければ、宗徒の者大いなる聲にて、「主達暫し待て。かくいふ事なり、ものきかむ」といひければ、舟をおさへて各靜まりたるに、用光今は限りと覺えければ、涙を流して、愛でたき音をふき出して、思ふやうに吹きすましたりけり。折柄にや、其のしらべ浪の上に響き渡りて、彼の潯陽江のほとりに琵琶を聞きし昔語に異ならず。海賊靜まりていふ事なし。よくよく聞きて、曲をはる程に、先の聲にていはく、「君が舟に心をかけて寄せたりつれども、この曲の聲に涙落ちて、かたさりぬ。」とて、漕ぎ去りにけり。猛きもの ゝふの心を慰むる事、和歌には限らず。これら皆管絃の徳なり。此の事は鬼神の所感にあらねども、命を助くる事嚴重によりて、ついでに記す。（下巻）

殺されなんず　殺されて了はうとする。
屋形　船の上に屋根の形を設けたもの。
あの黨や　かの輩よの意。
おもひしめたる　深く心に染みこませてゐる。
小調子　篳篥の曲で、最上の祕曲である。
宗徒の者　主要な者。
主達　汝達。
舟をおさへて　舟をとゞめて。
潯陽江云々　白樂天が潯陽江頭で琵琶を聞いた物語。
かたさりぬ　片方へ離れ去つた。即ちその心が去つて了つたの意。

新古今集

新古今集二十巻は後鳥羽院の院宣によつて藤原定家・藤原家隆・藤原有家・藤原雅經・源通具の五人が撰し土御門天皇の元久二年に成つた。古今集は主觀的抒情を主としたが、新古今集は更にそれに客觀的敍景をも加味して景情一致の趣を大成し、詩想幽玄巧妙、聲調流暢華麗、餘韻また嫋々として、實に和歌進歩の絶頂に達したものである。その形式上の特色としては體言どめ、語句の轉置又は省略、本歌どりなどの多いことを擧ぐべきである。

式子内親王 後白河天皇の第三皇女で賀茂の齋院にお立ちになつた。

俊成 藤原俊忠の子。家集を長秋詠藻といふ。千載集の撰者。

定家 俊成の子。新古今集・新勅撰集の撰者で拾遺愚草・詠歌大概・明月記等を著す。

通具 源通親の子。新古今集以後の勅撰集十一部の作家。

西行法師 本名佐藤義清。初北面の武士として鳥羽上皇に仕へた。家集を山家集といひ、平安朝時代の一異彩である。

素性法師 遍昭（六歌仙の一人）の子、父以上の名人。

家隆

春歌

○百首歌たてまつりし時春の歌

山深み春とも知らぬ松の戸に
たえだえかゝる雪の玉水。

式子内親王

○入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時百首歌讀ませ侍りけるに立春の心を

今日といへば唐土までも行く春を
都にのみと思ひけるかな。

皇太后宮大夫俊成

○守覺法親王家五十首歌よませ侍りけるに

春の夜の夢のうきはしとだえして
嶺にわかるる横雲のそら。

藤原定家朝臣

○千五百番歌合に

梅の花たがそでふれし匂ぞと
春やむかしの月にとはばや。

右衞門督通具

○題しらず

とめこかし梅盛なるわが宿を
うときも人はをりにこそよれ。

西行法師

夏歌

○題しらず

をしめどもとまらぬ春もあるものを
いはぬにきたる夏衣かな。

素性法師

○後德大寺左大臣家に十首歌讀み侍りけるによみてつかはしける

我が心いかにせよとて時鳥
雲間の月のかげになくらん。

皇太后宮大夫俊成

○題しらず

藤原家隆朝臣

和歌を俊成に學んで出藍の譽があり、定家と並び稱せられた。家集を壬二集といふ。

法成寺入道　藤原兼實。世に月輪關白といふ。玉葉を著す。

相模　大江公資の女で中古三十六歌仙の中に數へられた名人。

いかにせん來ぬ夜あまたの時鳥
　またじと思へば村雨の空。

○題しらず　白河院御製

庭の面はまだかはかぬに夕立の
　空さりげなく澄める月かな。

秋歌

○中納言中將に侍りける時家に山家早秋といふ心を詠ませ侍りけるに　法成寺入道前關白太政大臣

朝霧や立田の山の里ならで
　秋來にけりと誰か知らまし。

○題しらず　相模

手もたゆくならす扇のおき所
　忘るるばかり秋風ぞ吹く。

公衡　右大臣藤原公能の子。千載集以下勅撰集七部の作家。

○題しらず　西行法師

心なき身にもあはれはしられけり
　鳴立澤のあきのゆふぐれ。

○題しらず　西行法師

きり〲す夜寒に秋のなるまゝに
　よわるか聲の遠ざかり行く。

冬歌

○百首歌たてまつりし時　藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふ蔭もなし
　佐野のわたりの雪の夕ぐれ。

○鷹狩のこゝろを讀み侍りける　左近中將公衡

狩りくらしかた野の眞柴をりしきて
　淀の川瀨の月をみるかな。

雑歌

○秋の暮にやまひにしづみて世をのがれ侍りける又の月の秋九月十日餘日月くまなく侍りけるに讀み侍りける

思ひきや別れし秋にめぐりあひて
又も此の世の月を見むとは。

皇太后宮大夫俊成

金槐集

金槐集三巻は源實朝の家集である。實朝は早くから和歌を藤原定家に學んで、新古今風の歌も作つたが、彼の長所はそれではなくて寧ろ萬葉調の古風體にあつた。思想も雄渾壯大であつて、斯界に一生面を開かんとするの概があつたが、三十歳に滿たないで暗殺の厄に遭ひ、遂にその大成を見るに至らなかつた。それでも賀茂眞淵の如きは「奈良朝以後に於ける唯一獨歩の大歌人」と云つて推賞してゐる。以て彼の技倆を知る事が出來る。

月のすむ磯の松風さえ〳〵て、
　白くも見ゆる雪のしらはま。
もの丶ふの矢なみつくろふこての上に、
　霰たばしるなすの篠原。
みさごゐる磯邊にたてるむろの木の、
　枝もとを丶に雪ぞつもれる。（上巻冬部）
草枕旅にしあればかりどもの、
　思ひみだれていこそ寝られね。
箱根路を我が越え來れば伊豆の海や、
　沖の小島に波の寄る見ゆ。
み熊野の那智のお山に引く標（しめ）の、
　うちはへてのみ落つる瀧かな。
さとみこがみ湯だてざさのそよ〳〵に、
　靡きおきふしよしや世の中。
ふりにける朱（あけ）の玉垣かみさびて、
　破れたる御簾（みす）に松風ぞ吹く。
おほ君の勅をかしこみ父母に、
　心はわくとも人にいはめやも。
大海の磯もとゞろに寄する波、
　われてくだけてさけて散るかも。
いとほしや見るに涙もとゞまらず、
　親もなき子の母をたづぬる。
ときによりすぐればたみのなげきなり、
　八大龍王雨やめたまへ。（下巻雜部）

謠曲

謠曲は能樂の詞曲で、全篇は詞及び地よりなつてゐる。謠曲は室町時代に於ける特殊な文學の一で、其の文章は概ね前代文學の美辭・麗句を補綴したものであるが、莊重な漢文調と典雅な國文調とはよく調和してゐる。作者の分つてゐるものも有るが、中には明かでないのも少くない。今日傳つてゐる謠曲は數百番に及んでゐるが、普通行はれてゐるものは內外二百番である。觀世・寶生・金春・喜多・金剛の五派に分れてゐて、流派によつて文句に多少の相違がある。

シテ　天女
ワキ　漁夫白龍
ツレ　漁夫
地は　三保の浦
季は　三月

三保の浦　駿河國安部郡。

風早の云々　風早の三穗の浦わを漕ぐ船の船人騷ぐ浪立つらしも。（萬葉集）

千里云々　千里好山雲乍斂。一樓明月雨初晴。（詩人玉屑、陳文惠）

｛晴れり／晴れたり｝

忘れめや云々　忘れずよ清見が關の浪間より霞みて見えし三保の松原。（續古今集中務卿親王）

風むかふ云々　風むかふ雲の浮波立つと見て釣せぬ先に歸る船人。（冷泉爲相）

羽衣

ワキ一聲（三人）「風早の三保のうらわを漕ぐ船の、浦人騒ぐ波路かな。

ワキサシ「是は三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。ワキツレ「萬里の好山に雲忽に起り、一樓の明月に雨初めて晴れり。げに長閑なる時しもや、春のけしき松原の、波立ちつゞく朝霞、月も殘りの天の原、及びなき身の眺にも、心そらなる景色かな。忘れめや山路をわきて清見潟、遙に三保の松原に、立ちつれいざや通はん。上歌「風むかふ雲の浮波たつと見て、〳〵、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春ならば吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝なぎに、釣人多き小船かな。ワキ詞「われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる處に、虚空に花降り音樂聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとゝ思はぬ處に、これなる松に美しき衣懸れり。寄りて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸

｛春ならば／春なれば｝

天人の羽衣　天人の着物で、衣でありながら翼の用をなすもの。もと白鳥の美を神話化したものと云ふ。

末世　釋迦入滅後遠く隔つた後世の意で、佛教の衰へた世。

せん方も云々　せん方も無みと涙とにかけ、なみを無みと涙とにかけ、たまを露の玉と玉葛とにかけた。

り古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。シテ詞「なう其の衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候程に取りて歸り候よ。シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ。ワキ詞「そも此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返すことあるまじ。シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に歸らんこともかなふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ「此の御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、詞「もとより此の身は心なき、天の羽衣とりかくし、カヽル謠「かなふまじとて立ちのけば、シテ「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、上らんとすれば衣なし。ワキ「地にまた住めば下界なり。シテ「とやあらんかくやあらんと悲めど、ワキ「白龍衣をかへさねば、シテ「力及ばず、ワキ「せん方も、地「涙の露の玉

天人の五衰　天人が死ぬ時に天上界に五つの衰相が現れると佛説にとかれてある。「衣染二埃塵一、華蔓萎悴、兩腋汗出、臭氣入身、不レ樂二本座一。」

天の原云々　天の原ふりさけ見れば霞たち、家路まどひて行方知らずも。（丹後風土記羽衣傳説）

迦陵頻伽　極樂淨土に住む鳥で常に美妙な聲でなく。印度の雪山に住んで居ると。

賜はり　賜ひ

かた見の舞　駿河舞といふのがあるから、これをこの天人の殘したのだとの意で云つた。

葛かざしの花もしを〱と、天人の五衰も目の前に見えてあさましや。シテ「天の原ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひて行くへ知らずも。地下歌「住み馴れし空にいつしか行く雲の羨しきけしきかな。上歌「迦陵頻伽の馴れ馴れし〱、聲今更に僅なる、雁の歸り行く、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや〱。ワキ詞「いかに申候。御姿を見奉れば、あまりに御痛はしく候程に、衣をかへし申さうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや此方へ賜はり候へ。ワキ詞「暫らく。承り及びたる天人の舞樂、只今こゝにて奏し給はゞ、衣を返し申すべし。シテ詞「嬉しやさては天上に歸らん事をえたり。此の悦にとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮を廻らす舞曲あり。只今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとてはまづ返し給へ。ワキ詞「いや此の衣を返しなば、舞曲

霓裳羽衣の曲　唐樂の曲の名。

東遊の駿河舞　駿河舞を東舞とも云ひ後には東遊とも云つた。

二神　伊弉諾、伊弉冉の二神を云ふ。

十方世界　佛説でこの宇宙を云ふ。

玉斧の修理　「玉斧難レ修、舊二月輪一」（方回詩）

白衣黒衣の天人云々　白衣の天女と黒衣の天女との數によつてみちかけがあると。

春霞たなびき云々　春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲くらん。（貫之）

天つ風云々　僧正遍昭の歌。

をなさで其のまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ詞「いや疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキカヽル「あら恥しやさらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、シテ「雨に潤ふ花の袖、ワキ「一曲を奏で、シテ「舞ふとかや。地次第「東遊の駿河舞、〱、此の時や始なるらん。クリ「それ久方の天といつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限もなければとて、久方の空とは名づけたり。シテサシ「然るに月宮殿の有樣、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天少女、地「月の桂の身をわけて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「春霞たなびきにけり久方の、月の桂の花やさく。げに花かづら色めくは春のしるしかや。面白や、天ならでこゝも妙なり天つ風、雲の

天地は云々　天照大神の御末。

君が代は云々　きみが代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖ならん。（拾遺集）

孤雲の外に云々　笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。（大江定基）

蘇命路の山　佛說の須彌山。こゝは富士山を云ふ。

浮島がはらふ　原と拂ふとにかけてある。

月天子　佛說にて寶吉祥となづける月宮の天子。

さいうさ　左右左と袖をかへしてまふ。

滿月眞如　滿月の圓滿なのを云ふ。眞如の月とも云ふ。

通ひ路吹きとぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、此の松原の春の色を三保がさき、月清見潟富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ波も松風も、長閑なる浦の有樣。其の上天地は、何を隔てん玉垣の、內外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。

シテ「君が代は、天の羽衣まれにきて、地「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲添へて數々の、笙・笛・琴・箜篌孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山を移して、綠は波に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。

シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。地「東遊の舞の曲、

シテ「あるひはノル天つ御空の綠の衣、地「又は春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なり少女の裳裾、地「さいうさ、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。

キリ 東遊の數々に、〱、其の名も月の宮人は、三五夜中の空に又、滿月

御願圓滿　眞如の月の缺けた所がない樣に、誓願が圓滿で、國土が成就して、天から七寶充滿の寶を降らせると云ふので、月光の隈なく下界を照すのをたとへて云つた。

眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶を降らし、國土にこれを施し給ふ。さる程に、時移つて、天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の霞にまぎれて失せにけり。

この領域を異にし云々
　武士は謠曲、漢詩、和歌、擬古文、狩野土佐の繪畫などを玩んだのに對して、平民は淨瑠璃、歌舞伎、長唄、狂歌、川柳、小說、浮世畫等を愛した。

家の宗敎
　キリスト敎鎭壓策として宗門改を行ひ全國民をして必ず一派の佛徒たらしめたこと。

圓頂緇衣の徒
　藤原惺窩・林羅山・山崎闇齋等。

國文學史概說（近世）

一、武士と平民の二分野。 德川時代は階級の世であつた。社會は武士と平民の二階級を以て組織せられ、各々その獨自の歷史と職分をもつて、地位を別ち生活の樣式を異にしてゐた。從つて文藝美術亦その領域を異にし、保守と進步、傳統と革新、相對して明らかに二分野を劃してゐた。

二、思想界の特色。 當代に於ける著しい思想界の特色は儒敎が佛敎に代つて新にその勢力を占めたことである。現世を否定し淨土を欣求した薄暗い近古の世は、現實を謳歌し泰平に陶醉する花やかにも亦明るい世界と變じた。各自家の宗敎はもたねばならなかつたけれども、佛敎はすでに人心の内部を支配する權威を失うて徒に形骸と化し、圓頂緇衣の徒にして、新興の儒敎に趨つたものも少しとせぬ。殊に幕府の官學が朱子學であつた爲に、儒敎はまさにその時を得て、修身・齊家の現實主義が、文化の根柢に深くその礎を置いたの

である。
　殊にこの儒教と手を携へて當代の人心を支配した思想は、武士道であつた。由來武士道は、われらが祖先の尊び來つた廉潔・尙武の國民性に、仁義を本領とする儒教の精神を加へ、更に信仰を基として生死を度外に措く佛教の主旨を折衷し、之を戰亂に鍛へて成つたもので、それが當代に於て美しき實を結ぶに到つたものである。かくして凛々たる義理の精神、卽ち献身犧牲の尊むべき又可憐なる物語が、この時代の文學を飾つてゐるのである。けれども亦一面武事を偏重して殺伐に流れる弊を伴つたことも否定することは出來ぬ。

三　寛永時代　德川家康は馬上に天下を得た。然しながら亦到底馬上に於て天下を治め得るものでないことを知つてゐた。こゝに於て彼の文教奬勵策が行はれた。戰國以來散逸した書籍を蒐集し、印行し、藤原惺窩・林羅山等の學者を招いて經史を講せしめた。かくして寛永の頃に至つては、さしも衰頽を極めた文運も、漸く復興の氣運に向つたのである。その文運復興の第一聲

は漢學であつた。しかもそれは鑑賞の爲の詩文ではなく、天下經綸の爲の儒學、殊に朱子學であつた。家康の爲に、律令制度を更定して大功を奏した羅山の後裔が、代々儒を以て幕府に仕へ、爲に朱子學は幕府の御用學として永く後年にかけてその權威を振つたのである。朱子學の外に行はれたものは陽明學である。この學は近江聖人中江藤樹に因つて社會感化に生かされ、その弟子熊澤蕃山に因つて政治の上に應用せられた。
　和歌に於て戰國から當代への橋渡しをつとめたものは細川幽齋である。幽齋に學んだ公卿の數も少くはないが、その歌道を中流以下に弘めた功は、地下の弟子松永貞德に歸せねばならぬ。貞德の主功はしかしながら和歌よりもむしろ俳諧にある。彼は京の人、俳諧の法式を定め、有力な多數の門人を育て、文藝の趣味を平民の社會に擴めた。彼は自らいふ、俳諧は、俳言を以て賦する連歌であると、卽ち、彼は、詩想の上に俳諧を見ずして之を言語の上に見たのである。從つてその形式を外にしては、宗祇等の連歌とさしたる相違もない。

細川幽齋　名は藤孝、足利將軍、信長、秀吉に仕へ、後家康に召された。二條家歌學の正統を傳へた人。慶長一五、二二七〇年薨。

松永貞德　明心居士、逍遊軒、長頭丸等號が多い。和歌を九條植通細川幽齋等に連歌を里村紹巴に學ぶ。門下に羅山、元政、加藤磐齋、北村季吟、俳諧には、野々口立圃、松江重頼等多士濟々である。

形式を外にし

ては云々　俗語、漢語の交つてをるのと、人事に屬する材料の多い外には、宗祇等の連歌と大差のないものである。

假名草紙
一、事實小說　史實に多少の潤飾を加へたもの。信長記、太閤記の類。
一、宗教小說　佛教の功驗を說くもの。二人比丘尼、因果物語の類。
一、教訓小說　儒教に神道老莊等の思想を交へたもの。可笑記、誰が身の上の類。
一、遍歷小說

この一派を世に古風といふ。之についで、その天禀の奇才を以て、輕妙なる滑稽と清新なる句法を以て一旗幟を樹てたものは西山宗因である。謂はゆる檀林風がそれで、一時は天下を風靡する概があつた。

要するにこの時代は、たゞ文運復興の先聲時代で、未だ旺盛と稱するまでには到らない。新作の假名草紙も、多くは室町期の御伽草紙に一歩を進めたまでゝ、いづれも啓蒙思潮に棹すものである。

四、元祿時代。元和偃武より五十年、諸般の文化的施設が緒についた時代である。あらゆる方面に因襲打破が行はれ、個性の開放が叫ばれ、革新的機進の澎湃として昂進した時代である。

將軍綱吉は、漢學を好み、諸侯は競うて儒者を聘用する。朱子學には羅山の孫鳳岡、古學には伊藤仁齋、その子東涯、古文辭學に荻生徂徠、博通不偏の木下順菴、その門下に新井白石、室鳩巣、蔚然たる大家が一時に輩出した。教育家としての貝原益軒、國語學の僧契沖、尊皇主義の水戸學、まことに盛觀と謂はねばな

名勝、風俗、人情等を小說風に示すもの。東海道名所記の類、
一、怪異小說　奇事異聞をのべたもの。お伽婢子の類。

雄渾にして云々　彼の作には種々の體を兼具して、滑稽なるもの、優美なるもの、纖巧なるもの。千種萬樣ではあるが、その最も獨自性を發揮してゐるのは下に記したところにある。

らぬ。

以上は學界の傑物であるが、元祿の偉大なる點は、わが國の文藝に萬丈の氣を吐いた松尾芭蕉、井原西鶴、近松門左衛門の三者を產んだことである。

五、芭蕉の俳諧。芭蕉は伊賀の人、初北村季吟に學び、後江戸に出て正風の眼を開いた。

彼の理想は風雅の二字であつた。風雅とは外物に役せられずして、天地自然に融合同化し、造化の機微に參ずるの謂である。かくして象徵せられた彼の俳諧は、雄渾にして莊大、幽玄にして閑寂、何人の追隨をも許さぬ高き藝術の殿堂を築き上げたのである。

彼は清僧の如く恬淡寡欲であつたけれども、一面又極めて人情に厚く、社會的の儀禮を重んじた人である。その俳道を通じて完成した高貴なる人格と、感化力の偉大なる點は、日本文壇中ひとりその光輝を放つところのものである。

門弟
榎本其角、向井去來、服部嵐雪、山口素堂、森川許六等頗る多い。

西鶴の諸作
好色物には一代男、一代女、五人女。
武家物には武道傳來記、武家義理物語。
町人物には日本永代藏、世間胸算用。
敎訓物その他に本朝二十不孝、本朝櫻陰比事など有名なものが多い。

その門弟には俊秀の作家が多く、蕉風は檀林派に代つて天下を一統したのであるが、芭蕉の歿後は、各々その好むところに偏して、終に統一を失するに到つた。

六、浮世草紙と淨瑠璃。 蕉風の俳諧は、貞門や檀林に較べて高雅な趣味の上に立つてゐるが爲に、その道の修業を積んだものでなければたやすくその味を解することが出來ぬ。こゝに於て一般世人の趣味好尙に投ずる文藝が生れなければならぬ。まして當代は、太平の惠澤漸く深く、文化は進展し、生活は向上し、三府の繁榮前古に比なく、殊に大阪は日本全國の賄所として天下の金權を握り、幾多の豪富が輩出して驕奢を極めた時代である。しかも彼等町人の世界には、武士道や儒敎の制裁も少い。金に任せて本能の動くがまゝに活動する結果、風俗は勢ひ淫靡に流れざるを得ない。かうした社會をさながらに寫し出したものは、西鶴の浮世草紙である。彼はその驚くべき聯想と記憶の力を以て、現實の社會から得來つた豐富なる活材料を、極端に節約せられたる

門左衞門の諸作
時代物では曾我會稽山、國姓爺合戰、傾城反魂香等が有名であり、
世話物では天の網島、冥途の飛脚、油地獄、宵庚申などが傑作と謂はれてゐる。

文體の中に盛り込んで、輕妙奇拔格法を超越し、創意に充ちた幾多の小說を發表したのである。

淨瑠璃は江戶開府以前既に行はれてゐたけれども、なほ未だ見るに足るものが少かつた。元祿に至つて近松門左衞門が出るに到つて、遂に之を不朽の藝術品に仕上げた。著はすところ百數十曲、その凡てが彼の博大なる愛の精神に包まれてゐる。現實を美化して、しかもよく人情の秘奥を穿ち、湧くが如きその才藻は、この種文體の頂點を示して、永く後人を醉はしめるのである。

以上元祿文學は、主として上方を中心とした文藝である。

七、文運東遷。 幕府の創立と共に政權は江戶に遷つたけれども、文化の發展は直ちに之に隨伴することが出來なかつた。寶曆の前後に到つて、上方を中心とした文藝は、漸く東遷の勢を示し、文化文政時代に及んで遂に、榮枯その處をかへて、京阪は全く振はなくなつた。

八、俳壇の革新。 芭蕉以來俳諧は都鄙に亙つて盛行するに從ひ、徒に時好に

一茶　小林一茶、寶暦一三年信濃に生る。生涯を極めて不幸に終つた俳人。句集の外に七番日記、おらが春などがある。

四方赤良　本名は太田覃。學者、狂歌作者、戯文家、蜀山人、四方山人、寢惚先生等の號がある。文政六（二四八三）年歿。

山東京傳　本姓は灰田、又岩瀨とも稱した。洒落本、讀本等著作頗る多い。洒落本では、通言

媚びて風調甚しく卑俗に流れた。天明の頃谷口蕪村が出るに及んでこの弊風を改め、俳壇に一新生面を拓いた。彼は好んで自然の景物を詠じ、又よく漢詩の趣を交へ、更に歴史的事實の助を仰いだ。世に芭蕉と並べて俳壇の二聖といふ。その後の俳壇は漸次俗了して行くのみであるが、俳諧寺一茶が眞摯に人間愛の精神をうたつたのは注目すべきである。横井也有は俳文を以て鳴る。その文洒脫にして輕妙、また滑稽の趣に富む。

九、文化文政時代。 寬政から文化文政にかけて、江戸の繁榮はその極に達し、市民は眞に鼓腹擊壤の有樣であつたが、文化の爛熟に伴うて頽廢的氣分が到る所に滿ちてゐる。かゝる時勢は遂に川柳を產み、狂歌を產み、戯文を產んだ。川柳は、一種の風俗詩とも稱すべきもので、その鋭利なる觀察と、寸鐵人を殺す底の表現は、よく江戸ッ子の氣風を標徵してゐる。狂歌・戯文は通人の文學で、滑稽諧謔よく人の頤を解く。四方赤良はその隨一の作者である。歌壇には香川景樹が出て「歌はことわるものに非ず調ぶるものなり。」と唱

總籬。讀本では、忠臣水滸傳、安積沼、曙草紙、稻妻表紙、本朝醉菩提などが名高い。

滑稽本　徳川末に出た滑稽を主とした小說。俗間の事件を題材とし、口語の對話が多い。

一九　本名は重田貞一、道中膝栗毛の名作がある。

三馬　本名は菊池泰輔、通稱を西宮太助といふ。浮世床、浮世風呂はその傑作。

人情本　酒落本の洒落や滑稽を除いて人情を主としたもの。淫蕩な生活を描く。春水の梅暦が名高い。

へて、優美なる自然感情を、洗錬された穩かな調で歌ひ上げて、いかにも上品である。世に之を桂園派と稱し、明治の新派の起るまでは歌壇の中心勢力であつた。

一〇、江戸の小說。 江戸には各種の小說が相次いで起り、作者も亦陸續として輩出した中に、山東京傳は早く數多の作を出して、一時に名聲を高めた。曲亭馬琴次いで現はれ、該博の學と絢爛の文を以て、椿說弓張月・里見八犬傳の如き人口に膾炙する多數の作品を出した。その主義とする所は勸善懲惡、武士道と儒敎が作の基調をなしてゐる。その他滑稽本の作者として名を得たものは、十返舍一九、式亭三馬等で、人情本の作者では爲永春水が最も名高い。

一一、幕末の衰運。 かくて嘉永以後は、幕府その勢を失ひ歐米諸國は邊境を窺ひ、尊王攘夷の論が沸騰して、人心安定を失ひ、從つて文學の見るに足るものがない。只歌壇に於て僧良寬・橘曙覽・大隈言道等が各々獨創の歌才を示した位のものである。

明治文學史概說

一、準備時代。 明治から大正へかけての半世紀は、世界的に異彩を放つ時代である。近世以來の階級は打破せられ、四民は平等となり、外歐米の文化を移植し、內我が國民の特性を發揮して、遂に世界の一等國に列することが出來た。

明治に於ける嚴密なる意味の文藝は、十八年坪內逍遙がその文學論を世に問うて以來のことで、それまでは謂はゞ準備の時代であつた。この時代の生活の中心は政治である。從つて文學は之に交涉をもつ詩文論策の謂はゆる硬派文學と、それとは全く道を異にした子女の娛樂を目的とする稗史小說類の軟派文學との二流に別たれる。而して維新當初の改革の餘炎のまださめきらぬ冷灰の中に、硬派文學は既にその芽を吹いてゐた。

明治文化の半面は歐化の二字にある。而してその先聲は明六社の先覺によつて叫ばれた。就中福澤諭吉は文明批評家として、封建思想を打破し、實利

逍遙の文學論　小說神髓をいふ。それと同時に一讀三嘆當世書生氣質といふ創作を發表した。

明六社　明治六年の結社だからいふ。森有禮、福澤

實益の學問を唱道して、新文明の前驅をなし、中村正直は、儒教を以て基督教を說き、精神文化の開拓に功を奏した。

二、舊文學の殘榮と新文學の曙光。 維新の當初江戶の戲作者系の文人に假名垣魯文及び新聞紙に於ける繪入讀物の作家達があるが、何れも德川文學の傳統以外には出ないものである。新文學の曙光のかすかに見え出したのは、明治十年前後で、その發生を促したものは當時の政治中心思想である。

かくして現はれたものは英佛の政治小說、歷史小說、或は傳奇的趣向を多分に含んだ物語の飜譯小說で、多くは政治家若しくは政論家の手になるものである。次いで明治十六七年の頃から、矢野龍溪、東海散史、末廣鐵腸等の政治小說が現はれた。彼等は自己の所見と一致するものを求めて飜譯し、自己の政論を披瀝せんが爲に小說を書いたのである。

三、坪內逍遙と長谷川二葉亭。 明治文學の曉鐘は、坪內逍遙の新文學運動の宣言書たる小說神髓とその裏書とも見るべき書生氣質である。近世文學の

諭吉、西村茂樹、中村正直、加藤弘之、西周、津田眞道、箕作麟祥、箕作秋坪、杉亨二等で急進的な社會改造論を唱へた。

假名垣魯文　明治三年「西洋道中膝栗毛」同四年「安愚樂鍋」「胡瓜圖解」等を著す。

矢野龍溪　「經國美談」

東海散史　「佳人之奇遇」

末廣鐵腸　「雪中梅」「花間鶯」

硯友社 明治十八年尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案等によつて組織せられ後川上眉山、巖谷小波、江見水蔭等同人に加はつた。

紅葉 「多情多恨」「三人妻」「青葡萄」などがその傑作といはれ、世間的に有名

勸善懲惡主義を打破して、小說の主眼の人情世態風俗の寫實にあることを述べて、藝術の獨立性と、近世文學の特質たる寫實主義を呼號した。その小說革新論の要諦は、藝術に如實の人生を與へてその眞を發揮せんとする傾向、從つて「眞」の表現を生命とするものであつた。この逍遙の所說を完全に裏附けたものは、長谷川二葉亭の浮雲である。自由なる口語體を用ひ、微細なる心理を描き、人物の性格を寫した點は、當時としては、實に破天荒のものである。

四、硯友社と紅葉と露伴。

しかしながら逍遙の眞を生命とする人生的傾向を受けついだものは、一の二葉亭あるのみで、直ちに擡頭したのは硯友社一派の藝術至上主義であつた。

硯友社の主腦者は尾崎紅葉である。彼の寫實は皮相的であり、且つ一種の趣味に囚はれて深く眞に徹しないといふ批難もあるが、その規模の廣大にして風格の堂々たるところ、又一代の巨匠たるを失はぬ。彼は文章報國を標語としただけあつて、文章の爲には眞に泣血の苦心を献げた。その俊雋の人格

なのは「金色夜叉」である。

幸田露伴 「風流佛」「五重塔」等が傑作といはれる。

文學界 雜誌文學界は明治二十六年の創刊、同人は北村透谷、島崎藤村、戶川秋骨、平木禿木、馬場孤蝶、星野天知等である。

觀念小說 この世の悲劇や罪惡が社會の罪であるといふ觀念を與へんとするものが多い。川上眉山の「書記官」「うらおもて」泉鏡花の「夜行巡査」「外科室」等。

悲慘小說 悲慘な、暗黑な事件を取扱つた小說で、性格と境遇から來る悲劇を

と洗錬せられた社交性から天下の名士として過せられ、文士の社會的地位を高めた點は又忘るべからざる彼の功績である。

紅葉と並び稱せられた巨匠は幸田露伴である。彼は理想派、主觀派の作家であつた。その思想の一面には佛教的悟道の精神があり、又一面意力に對する憧憬がある。その文雄健、氣を以てまさるもので、紅葉と軒輊し難い。彼は又文壇稀に見る學者である。

かゝる經過を取つて進み來つた明治の文壇は、明治二十五年頃に至つて評壇に長足の進步を見た。その殊勳者は坪內逍遙と森鷗外である。

この頃從來の遊戲的傾向を排し、眞面目に人生の問題に惱み、高き理想にあこがれた一派は、北村透谷を中心とする文學界の人々である。透谷について花々しく活動したのは島崎藤村で、透谷が未成品として殘した新體詩は、藤村によつて完成せられた。その哀婉にして浪漫的なる歌ひぶりは、土井晩翠の雄大豪宕の詩風と並び稱せられた。

五、日清戰後の文壇と樋口一葉。 日清戰爭は國民の自覺を促し、延いて個人の自覺を促した。此時代相を代表したものは高山樗牛で、或は日本主義の提唱となり、更にニイチェの個人主義に結びついて、美的生活の讃頌となつた。綱島梁川の詩人的宗教觀又注意すべきである。 硯友社一派も戰後に於ては次第に深く人間の心理を描かんとする傾向に進んで川上眉山、泉鏡花等の觀念小說が出廣津柳浪の悲慘小說が出たが、この心理的傾向を最も深めたものは女流天才樋口一葉である。 その傑作に到つては、確實に人生を把握し、個人の心理もその性格も深く奧底に徹して、複雜なる人生の姿のさながらに迫つて來るものがある。

六、自然派の勃興。 明治三十四五年頃の文藝界は一般に萎微停滯して、纔かに家庭小說などに其餘命をつないでゐたが、日露戰爭後に到つて自然主義文學が勃然として起つた。 日露戰爭は個人の自覺を世界大のものとし、爲に日本國民は一擧にして世界的文明に參與する資格を得た。 時恰も歐洲の思想

描く。廣津柳浪の「今戸心中」「河内屋」等。

泉鏡花 初は觀念的のものを書いたが、次第に夢幻的、神祕的のものを出して獨自の境地を拓いた。「高野聖」「湯島詣」など有名である。

一葉 「わかれ道」「われから」「十三夜」「にごり江」等數々の作品があるが「たけくらべ」は最大傑作といはれる。

家庭小說 主として家庭道德の美を發揮した小說で、德富蘆花の「不如歸」「思ひ出の記」菊池幽芳の「己が罪」「乳兄弟」田口掬汀の

界を風靡してゐたものは、個人主義を基調とする自然主義の文學であつた。其宿命的人生觀、無理想・無解決主義が、戰後の人生苦に惱みつゝあつた國民の頭腦に共鳴して、この勃興を見たのである。 あるがまゝの人生をあるがまゝに描寫せんとする態度は、又、好んで人生の暗黑面を大膽に描かしめた。 その先驅者は國木田獨步・島崎藤村・田山花袋等である。

七、餘裕派文藝と夏目漱石。 このせつぱつまつた現實暴露の態度に對抗して現はれたものは夏目漱石・高濱虛子等に代表せられる餘裕派文藝である。 漱石の藝術は一言でいへば英文學趣味と東洋趣味との混融で健全なる趣味と娛樂を享樂せしめんとするものであつた。 その藝術家としての敎養・警句・諧謔に富んだ妙文に至つては古今獨步で、風格も亦堂々として居る。 漱石も虛子もホトヽギス社の俳人で、正岡子規のはじめた寫生文から出發して小說に筆を着けるに到つたものである。 子規は又俳句及び短歌の革新者として明治文壇の殊勳者である。

「人の罪」「伯爵夫人」中村春雨の「無花果」等がそれである。

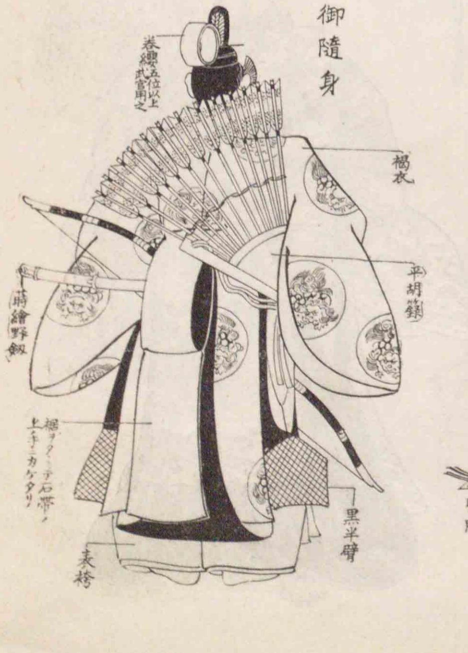
高濱虛子 長篇に「俳諧師」「朝鮮」短篇に「鷄頭」「凡人」「道」等がある。

正岡子規 蕪村以後俗了した月並の俳句を藝術的のものに革新し、遊戲的空想的の和歌を排して寫生道を說き萬葉精神を尊重して後年のアララギ派の基を開いた。

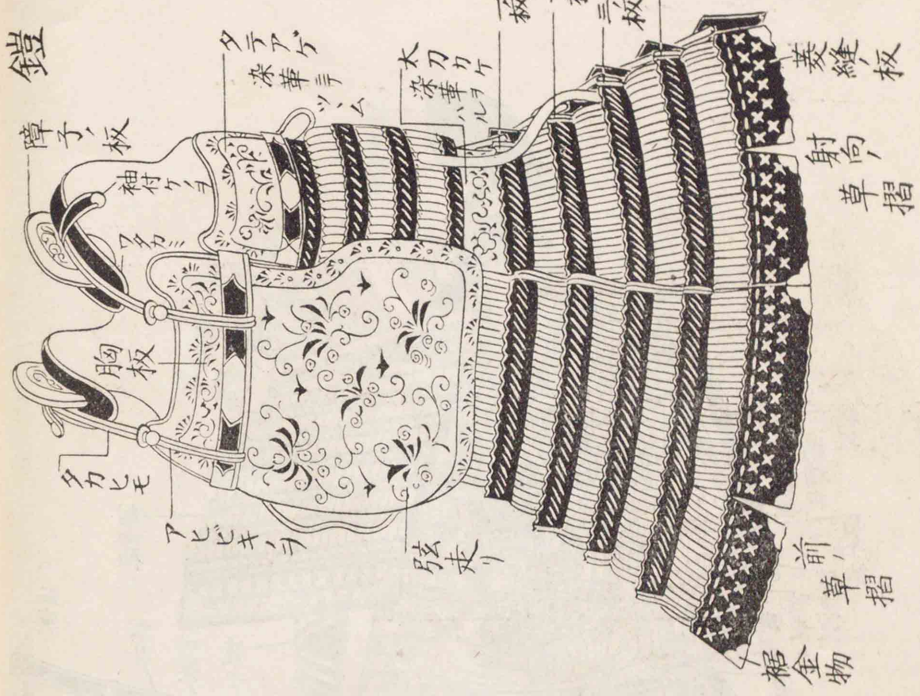
揉烏帽子
冠板
征矢
上差
矢筈
矢羽
冠板
化粧板
胸板
栴檀板
鳩尾板
馬手袖
鎧直垂
弦走
鞘巻
射向袖
石突
太刀
雨覆
芝引
籠手
握
箙
板ノ一
板ノ二
板ノ三
板ノ四
弦巻
揺板(前板)
裾金物
射向草摺(弓手草摺)
弦
菱縫
臑當
熊貫

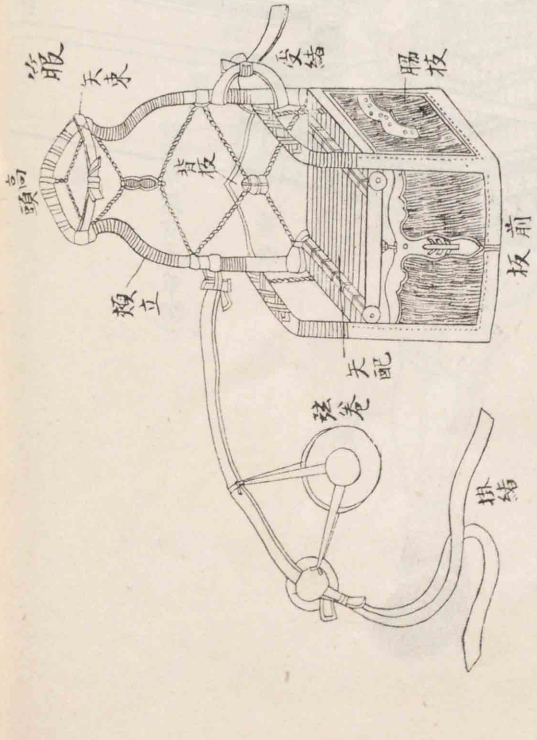
束帯

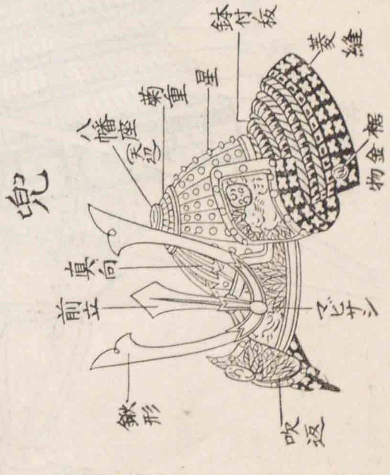
衣冠

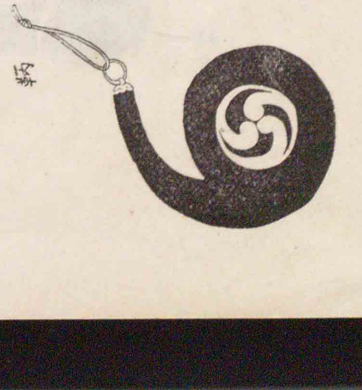

御随身

正装


鎧


鞍


兜


鞆

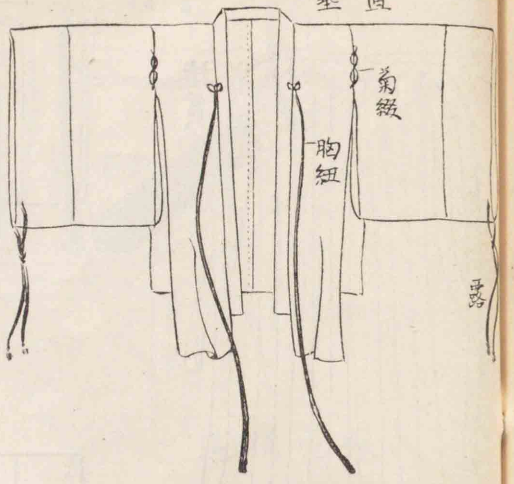
大紋

烏帽子直衣圖

狩衣

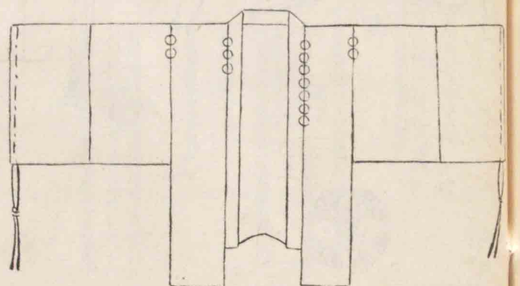
直衣

直垂



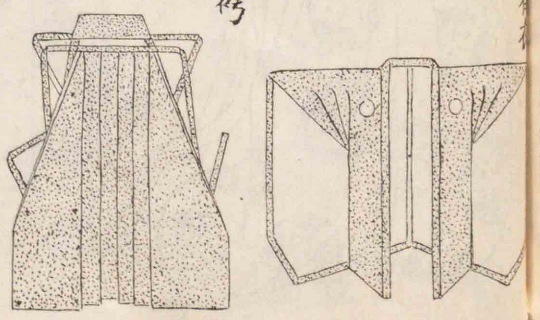
直垂着用圖

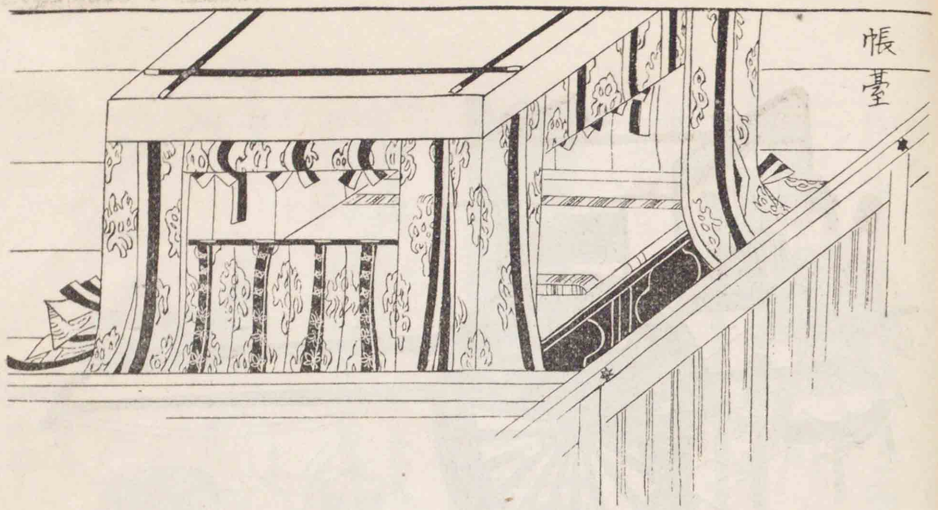
鎧直垂

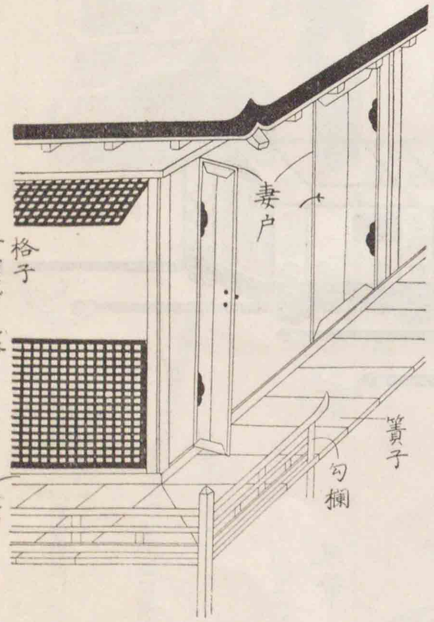


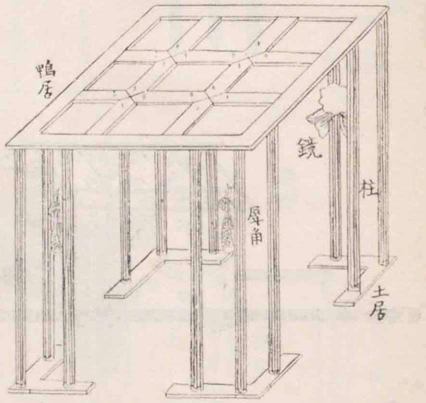
鎧直垂着用圖

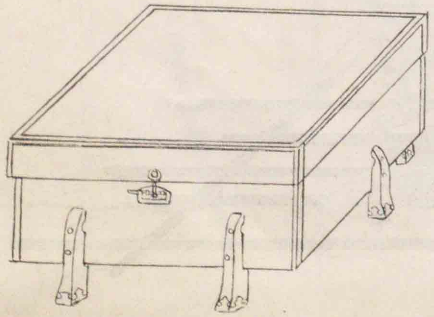
袴

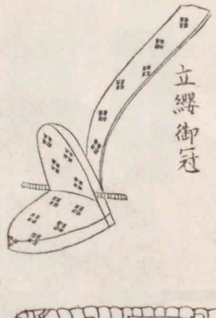


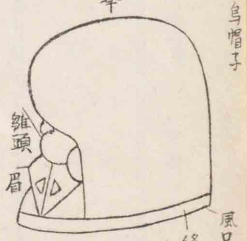

帳臺


妻戸
格子
上ノ方アゲタル体
簀子
勾欄
長押

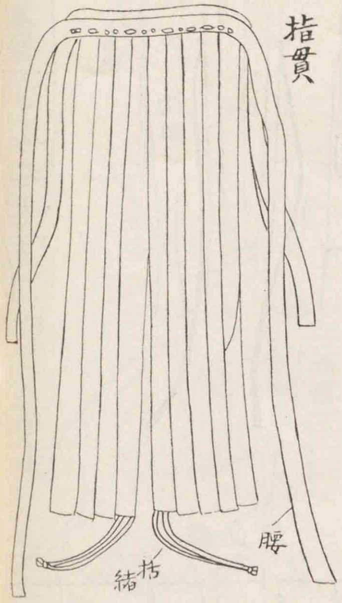

帳臺構造
鴨居
鏡
柱
辱角
土居


唐櫃

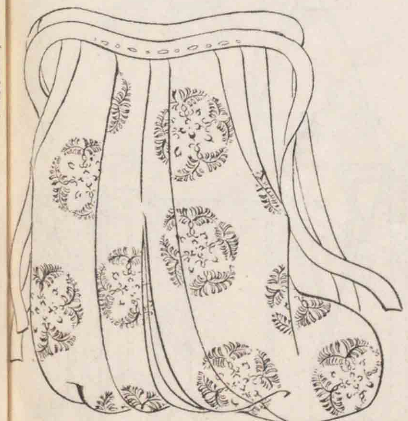

立纓御冠

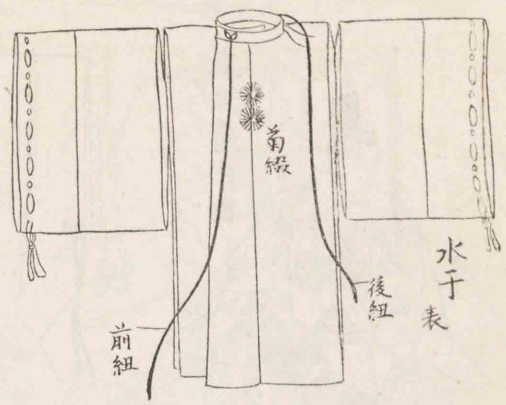

峯
立烏帽子
雛頭
眉
縁
風口

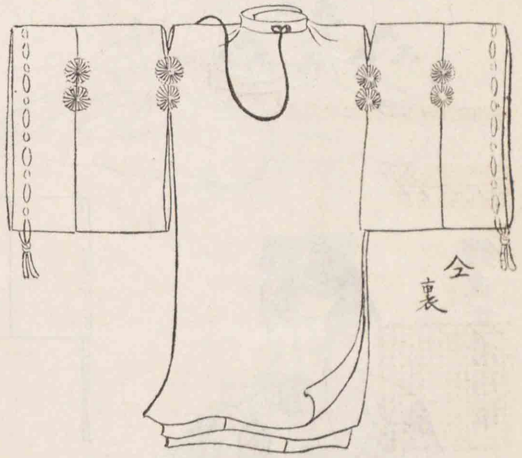
蛭鞘巻
副子(小刀)

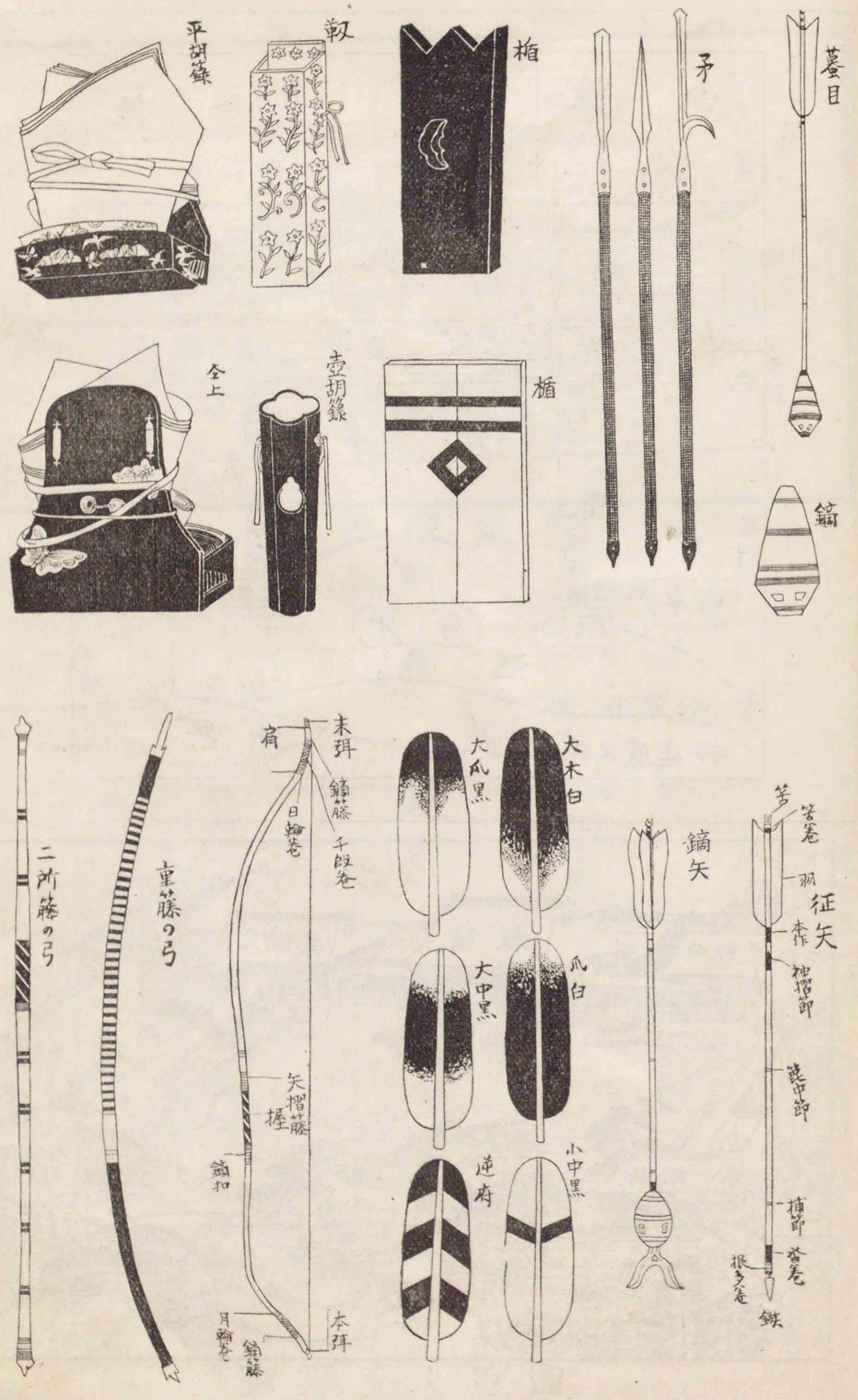

指貫
括
結
腰

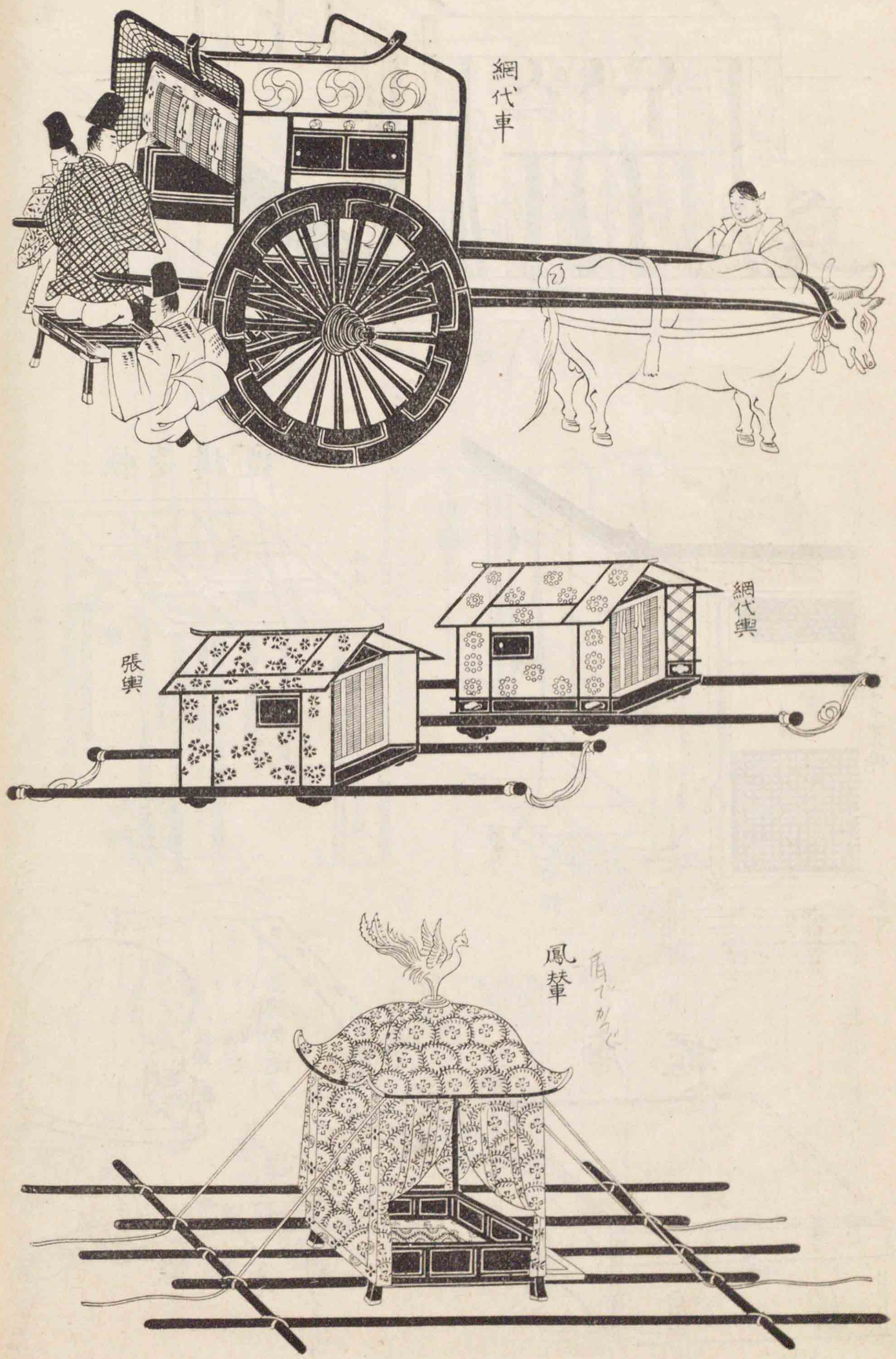
仝上

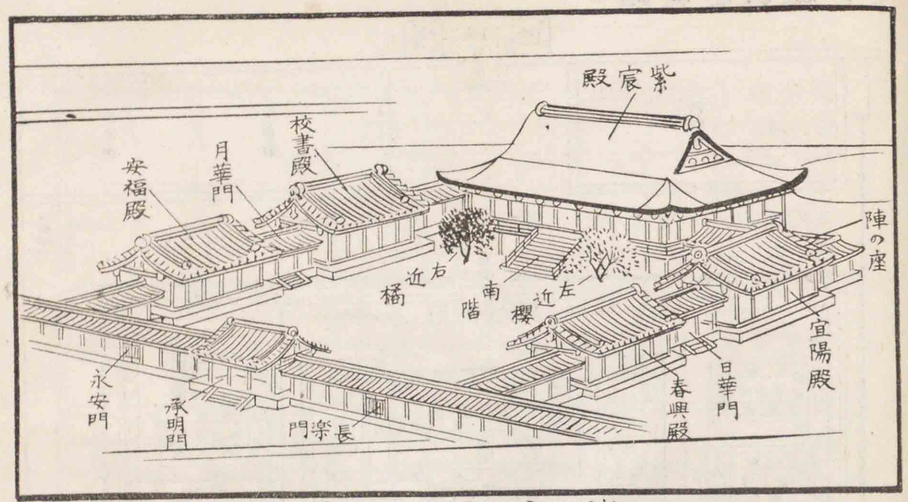

水干
表
菊綴
後紐
前紐


仝
裏


狩衣
袖括
露

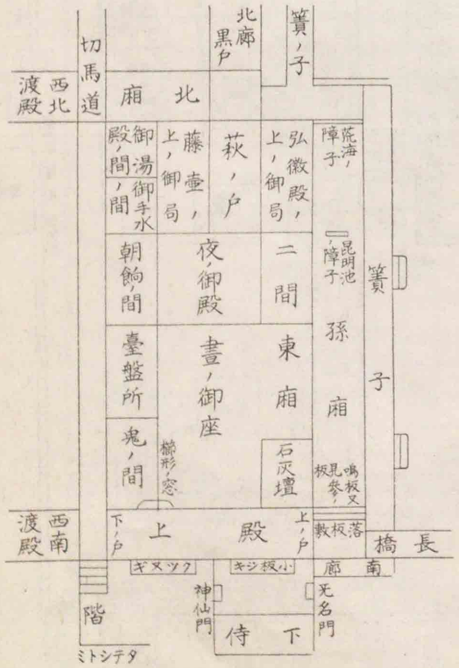

蟇目
鏑
矛
楯
靫
平胡籙
楯
壺胡籙
仝上
征矢
鏑矢
大木白
大爪黒
爪白
大中黒
小中黒
重藤の弓
二所藤の弓
末弭
本弭
握


網代車
網代輿
張輿
鳳輦

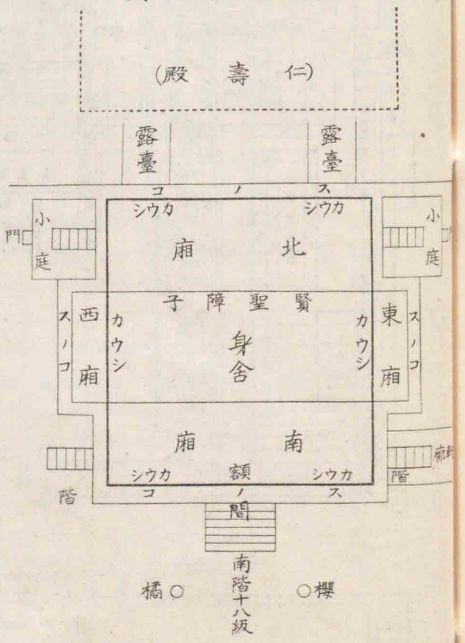


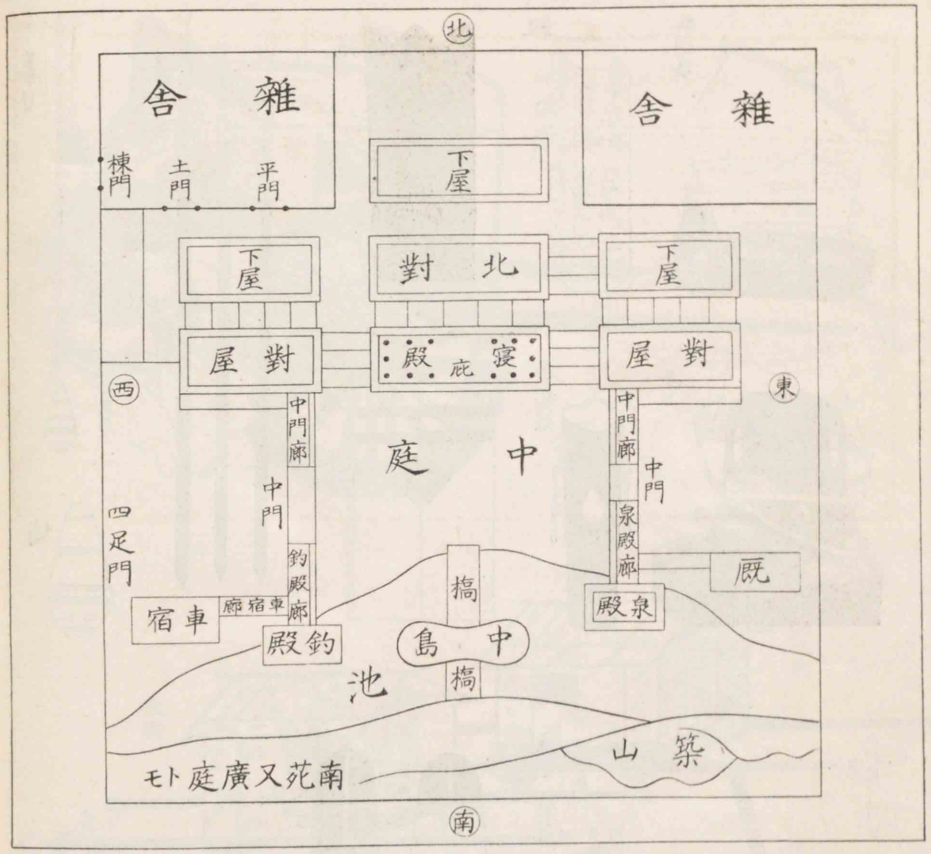
紫宸殿の図

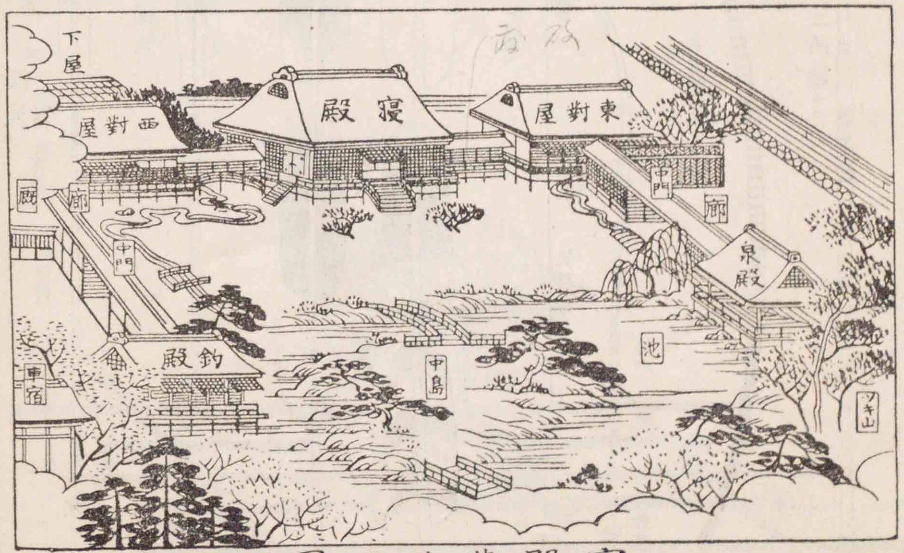
清涼殿の圖



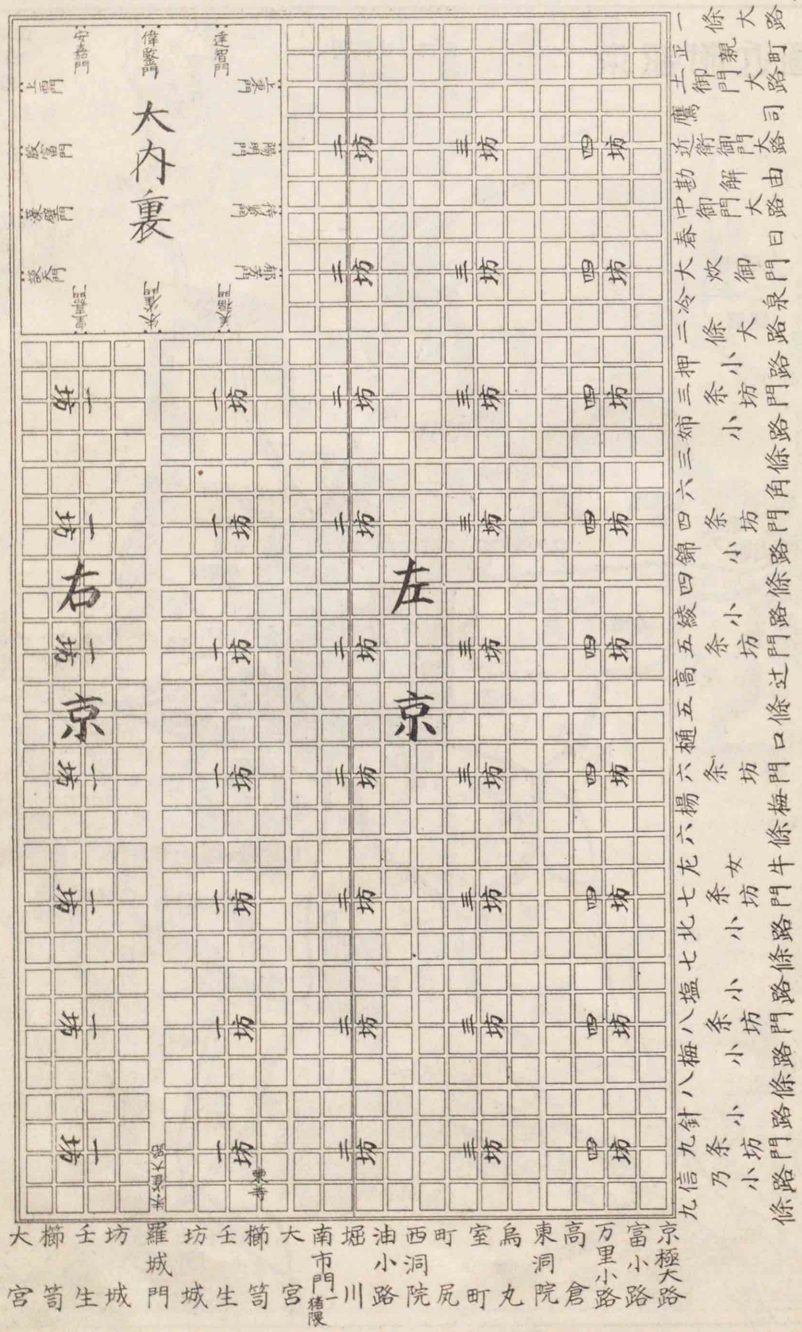
紫宸殿の圖



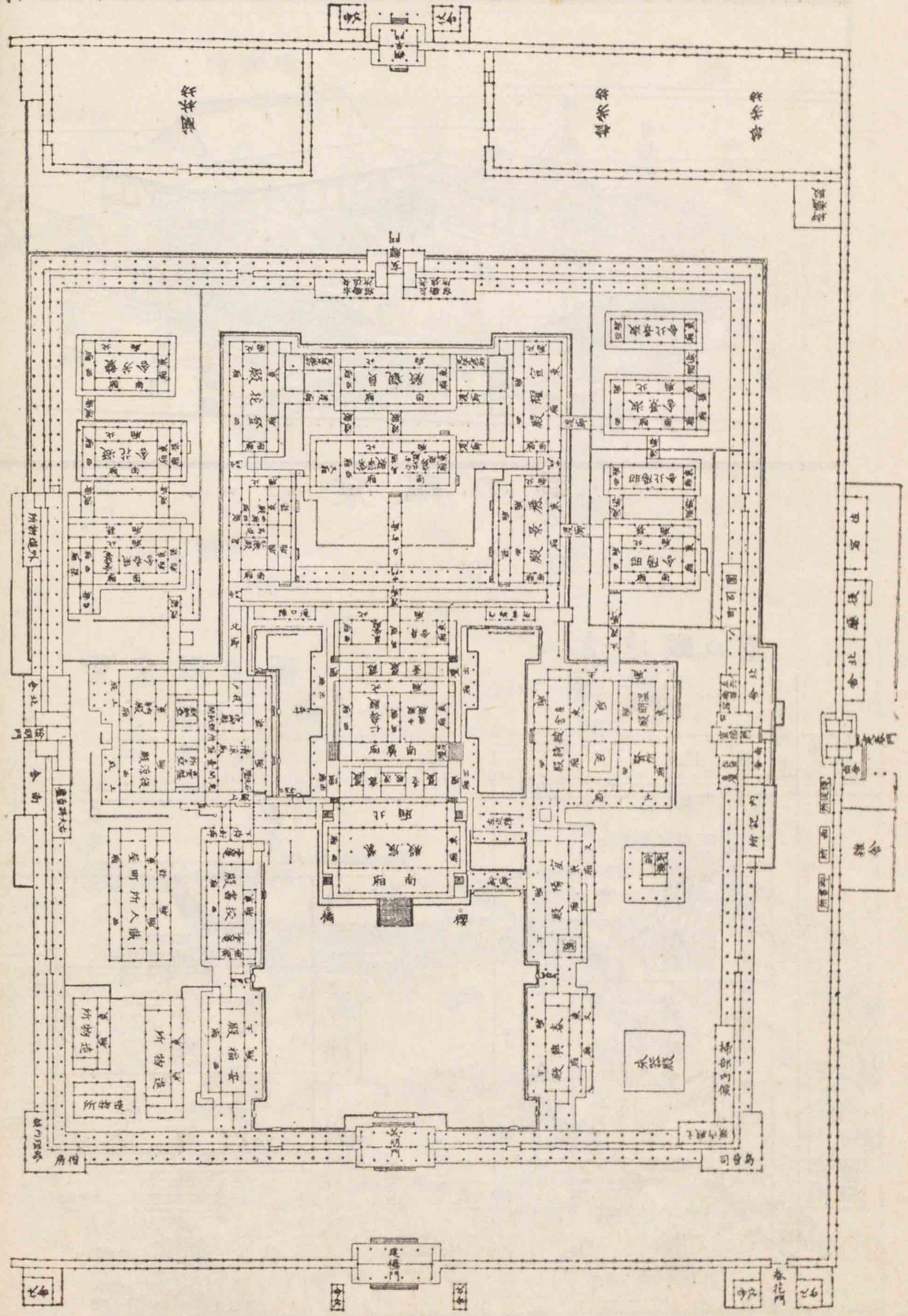


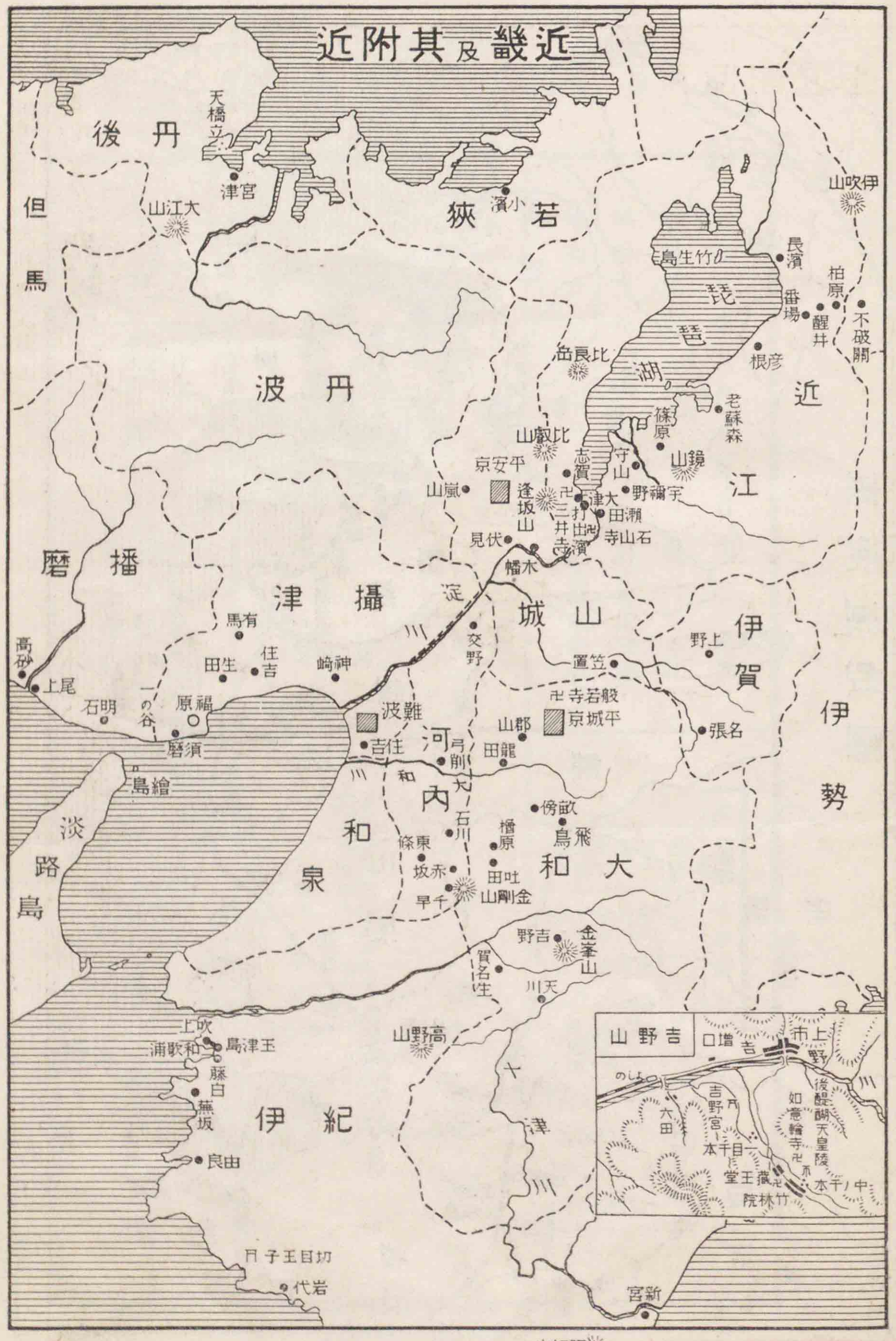


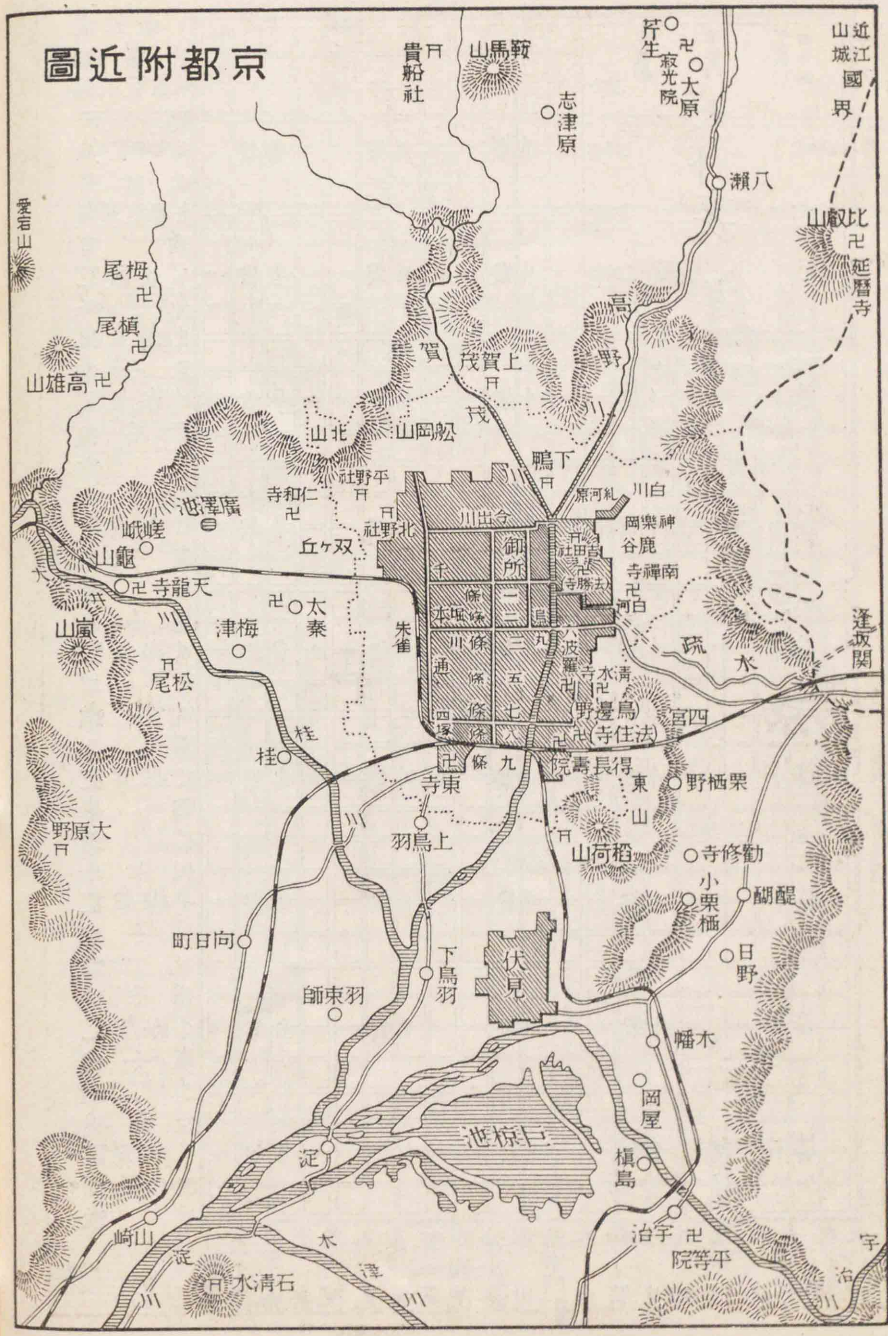
寝殿造りの圖


大内裏
左京
右京
一條大路
正親町
土御門大路
鷹司
近衛御門大路
勘解由小路
中御門大路
大炊御門大路
冷泉小路
二條大路
押小路
三條坊門小路
姉小路
三條大路
六角小路
四條坊門小路
錦小路
四條大路
綾小路
五條坊門小路
高辻小路
五條大路
樋口小路
六條坊門小路
楊梅小路
六條大路
左女牛小路
七條坊門小路
北小路
七條大路
塩小路
八條坊門小路
梅小路
八條大路
針小路
九條坊門小路
信濃小路
九條大路
京極大路
富小路
万里小路
高倉
東洞院
烏丸
室町
町尻
西洞院
油小路
堀川
南市門猪隈
大宮
櫛笥
壬生
坊城
羅城門
坊城
壬生
櫛笥
大宮

大内裏皇居全圖




近畿及其附近
丹後
但馬
若狹
丹波
近江
播磨
攝津
山城
伊賀
伊勢
河內
和泉
大和
紀伊
淡路島
琵琶湖
天橋立
宮津
大江山
小濱
竹生島
長濱
柏原
醒井
不破關
番場
彦根
比良山
老蘇森
篠原
比叡山
平安京
嵐山
逢坂山
鏡山
大津
瀨田
石山寺
伏見
淀
有馬
生田
住吉
神崎
高砂
尾上
明石
須磨
一の谷
福原
難波
交野
笠置
般若寺
平城京
郡山
龍田
上野
名張
繪島
畝傍
飛鳥
吉野
金峯山
高野山
天川
賀名生
玉津島
和歌浦
吹上
藤白
蕪坂
由良
切目王子
岩代
新宮
那智山
吉野山
上市


京都附近圖
鞍馬山
貴船社
寂光院
大原
芹生
志津原
八瀨
比叡山
延曆寺
愛宕山
梅尾
槇尾
高雄山
上賀茂
賀茂
高野
下鴨
船岡山
北山
平野社
仁和寺
廣澤池
北野社
嵯峨
雙ヶ丘
龜山
天龍寺
太秦
梅津
嵐山
松尾
桂
朱雀
今出川
御所
白川
鹿谷
南禪寺
白河
疏水
逢坂關
清水寺
六波羅
鳥邊野
法住寺
四宮
得長壽院
東寺
九條
栗栖野
東山
稻荷山
勸修寺
上鳥羽
大原野
向日町
下鳥羽
伏見
小栗栖
醍醐
日野
木幡
岡屋
巨椋池
槇島
淀
山崎
宇治
平等院
石清水
木津川
近江山城國界

◉備考
……市郡界
▨人家稠密地

昭和二年十二月二十七日
文部省檢定濟
中學校國語科用

昭和二年六月廿五日印刷
昭和二年七月一日發行
昭和二年十二月十日訂正再版印刷
昭和二年十二月十五日訂正再版發行

不許複製

編纂者　吉澤義則

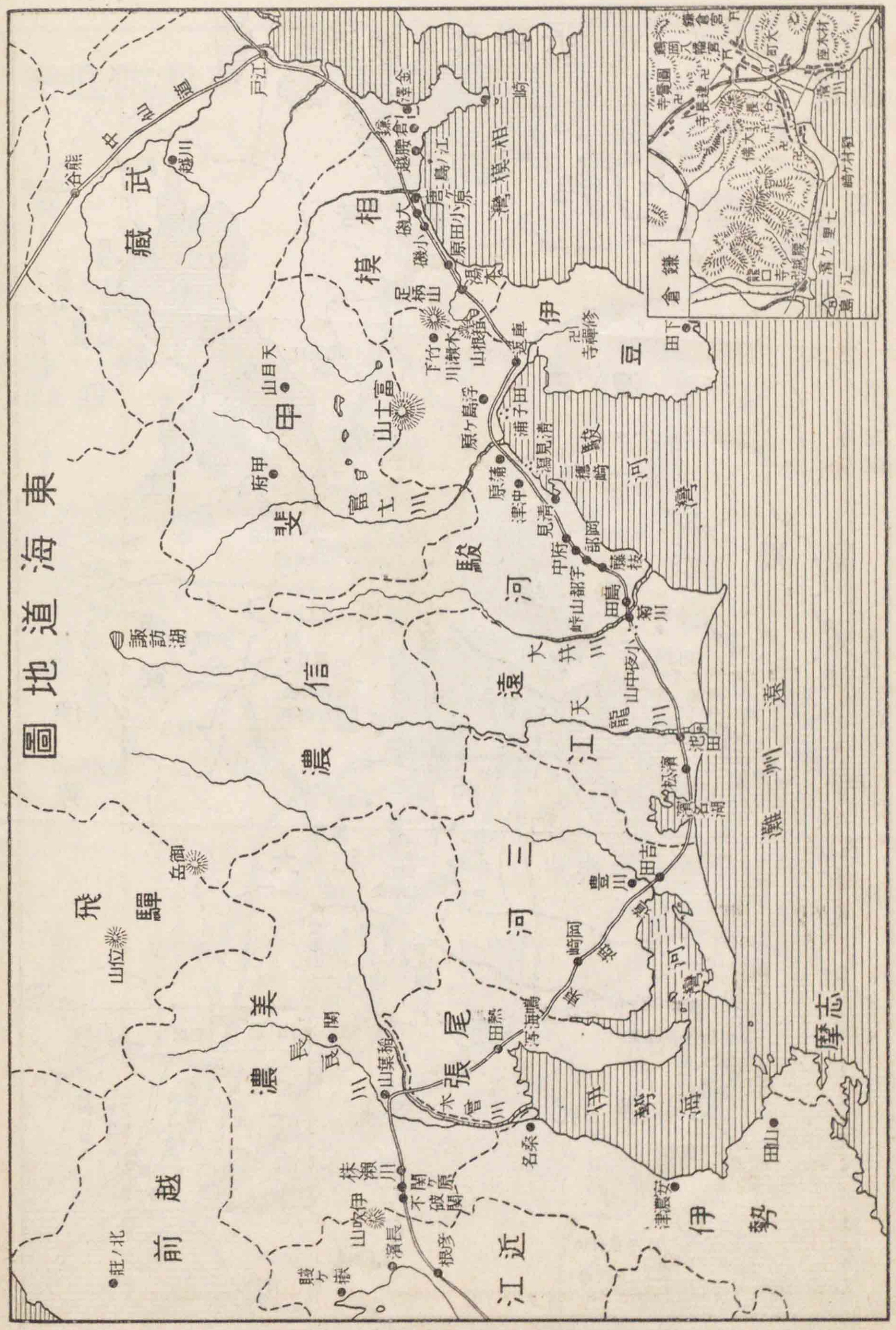
京都市上京區丸太町通堀川西入西丸太町百七十一番地
發行者兼印刷者　星野敬一

發行所
京都市上京區丸太町通堀川西入
電話西陣三〇三五番
　　　　四八三七番
振替貯金口座大阪四九四九一番
星野書店

歷代國文學新選

卷數	定價	昭和五年度臨時定價
卷一	金四拾四錢	金七拾貳錢
卷二	金四拾七錢	金七拾七錢
卷三	金四拾八錢	金七拾八錢
卷四	金五拾錢	金八拾貳錢
卷五	金五拾六錢	金九拾壹錢

星野書店印刷部印刷



本科四年三組
小森義代